

高松市内遺跡発掘調査概報

—平成26年度国庫補助事業—

2015年3月

高松市教育委員会

例　言

1. 本書は、高松市教育委員会が平成 26 年度（一部、25 年度も含む）に国庫補助事業として実施した高松市内遺跡発掘調査事業の概要報告書である。
2. 本書には国庫補助事業のうち、高松市内遺跡発掘調査事業として平成 25 年 12 月から平成 26 年 11 月にかけて実施した試掘調査及び内容確認調査を 25 件、平成 25・26 年度に実施した史跡石清尾山古墳群保存・整備事業と、平成 25 年度に実施した史跡天然記念物屋島基礎調査事業の内容確認調査について収録した。なお、平成 26 年 12 月以降の実施分については、次年度に報告する。
3. 調査は、高松市創造都市推進局文化財課文化財専門員 小川 賢・渡邊 誠・船築 紀子・高上 拓・波多野 篤、同埋蔵文化財担当職員 池見 渉、同非常勤嘱託職員 中西 克也・磯崎 福子・上原 ふみ・森原 奈々・杉原 賢治が担当した。
4. 本書の執筆は小川・渡邊・船築・高上・波多野・池見・中西が担当し、編集は磯崎・波多野が担当した。
5. 調査の実施にあたっては、下記の方々及び関係諸機関の御指導・御協力を得た。記して厚く謝意を表する（敬称略・順不同）。
磯部 將英、鵜羽神社氏子各位、加藤 利幸、法華寺住職 吉本 正文、清水 周一、狩野 久、亀田 修一、西田 一彦、丹羽 佑一、平岡 岩夫、松尾 哲育、信里 芳紀、乗松 真也、鎌田 良博、山下 平重、森下 章司、農林水産省四国森林管理局香川森林管理事務所、香川県東部林業事務所、香川県栗林公園観光事務所、財務省四国財務局、香川県教育委員会
大久保 徹也、穴吹 香祐、小川 翼、斎藤 麻綾、清水 普未、瀧川 未来、田中 達也、日野 優香、福家 萌希、美馬 広河、山本 和暉、山本 修平、吉井 悠介、芳野 裕成（以上、徳島文理大学）
6. 本書の挿図として、高松市都市計画図 2 千 5 百分の 1 を 5 千分の 1（一部、1 万 5 千分の 1 と 5 万分の 1）に改変して使用した（調査地位置図内の網かけは、事業対象地を示す）。
7. 本書のうち標高値を示したものは海拔高を表し、座標は国土座標 IV 系（世界測地系）に拠った。また方位は、G.N が座標北、M.N が磁北を表す。
8. 発掘調査で得られたすべての資料は高松市教育委員会で保管している。

目　次

第 1 章 高松市内遺跡発掘調査事業（平成 25 年 12 月～26 年 11 月）	1
1. 弘福寺領讃岐国田図調査地	1
2. 高松城跡（大手前地区）	2
3. 飯田西 5・6 号塚	5
4. 史跡讃岐国分尼寺跡～13 次調査～	6
5. 高松城跡（丸の内地区）	12
6. 神内城跡	13
7. 新名氏屋敷跡	14
8. 平賀下遺跡	17
9. 宮ノ浦遺跡	18
10. 北山下遺跡	18
11. 史跡高松城跡	19
12. 上林町地区	21
13. 佐料遺跡	22
14. 史跡讃岐国分尼寺跡～14 次調査～	24
15. 北口遺跡	30
16. 上天神遺跡	31
17. 香川町川東上地区	32
18. 条里跡	33
19. 香西南西打遺跡	34
20. 鵜羽神社境内遺跡	36
21. 東中筋遺跡	38
22. 大池南遺跡	39
23. 野郷遺跡	40
24. 井手上・中所遺跡	44
25. 拝師庵寺	48
第 2 章 史跡石清尾山古墳群保存・整備事業（平成 25・26 年度）	49
26. 石清尾山塊レーザー測量・図化業務	49
27. 稲荷山姫塚古墳	54
28. 稲荷山北端 1 号墳	61
第 3 章 史跡天然記念物屋島基礎調査事業（平成 25 年度）	64
29. 屋嶋城跡 浦生地区	64

第1章 高松市内遺跡発掘調査事業(平成25年12月～26年11月)

1. 弘福寺領讃岐国田図調査地

1 所 在 地 高松市多肥上町

2 調 査 期 間 平成 25 年 12 月 2 日～12 月 3 日

3 調査担当者 池見 渉

4 調査の原因 分譲住宅地造成工事

5 調査の概要

(1) はじめに

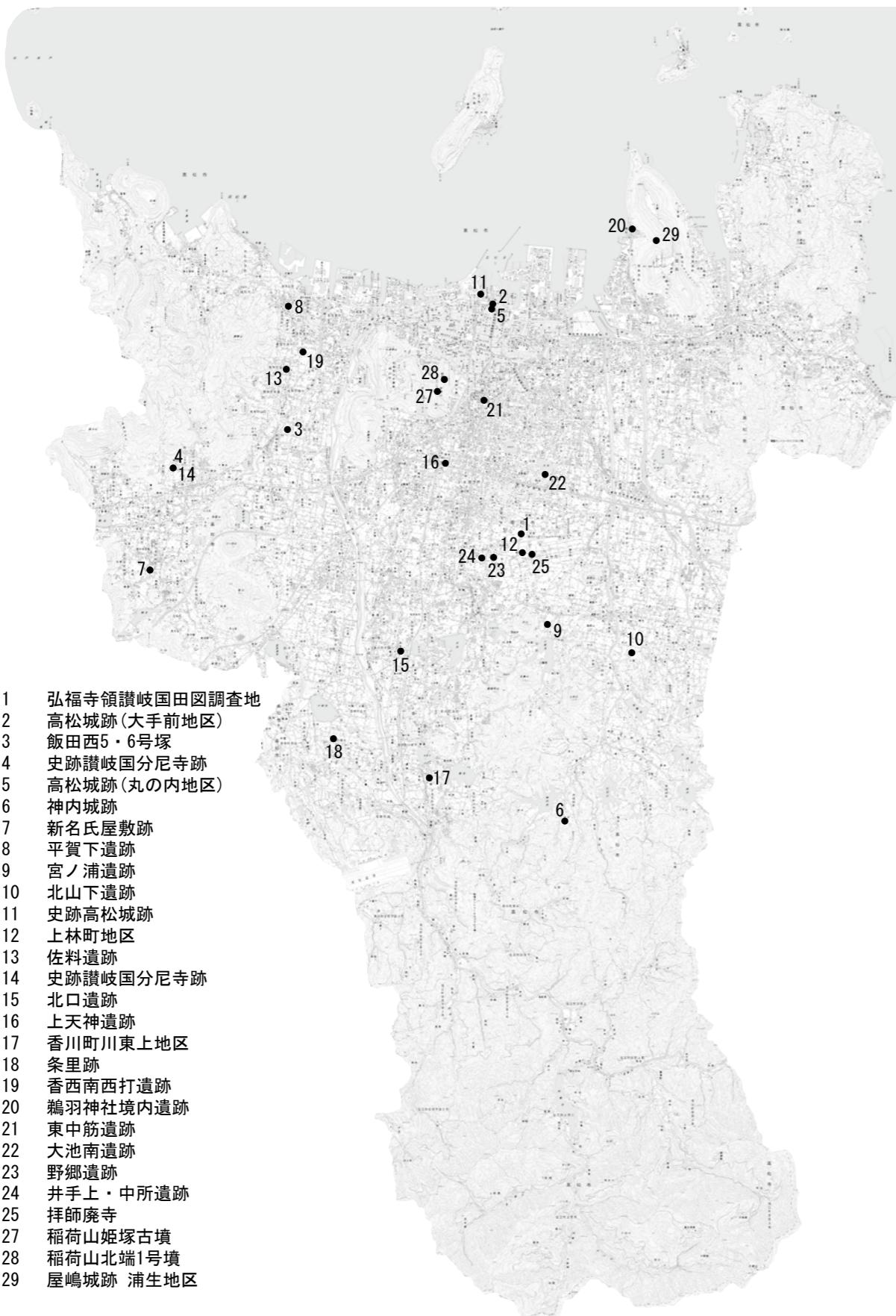
工事対象地の一部に周知の埋蔵文化財包蔵地「弘福寺領讃岐国田図調査地」が位置することから、事業者の協力のもと試掘調査を実施した。なお、調査対象地内に位置する「弘福寺領讃岐国田図調査地」では昭和 62 年度及び平成 7 年度に発掘調査が実施されており、中・近世に属すると考えられる水田畦畔及び弥生時代に属すると考えられる自然流路状の遺構が確認されている。

(2) 調査成果

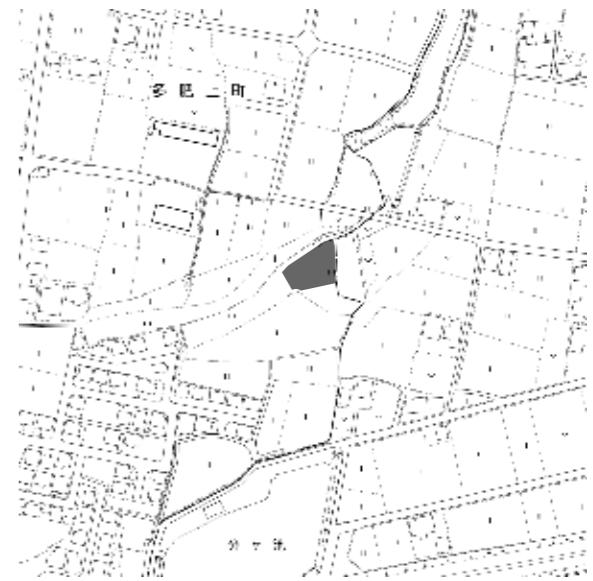
試掘調査の結果、弥生時代後期の遺物を少量含む自然流路が自然地形に沿って延びる状況を確認した。また、調査対象地北半部は本来、谷状に急激に落ち込む状況を呈していたことが判明した。その他の遺構は皆無であった。

6 ま と め

今回の調査によって、埋蔵文化財を確認することはできなかった。よって、今回の調査で包蔵地外に位置付けられた部分については保護措置不要である。また、工事対象地の一部に存在する周知の埋蔵文化財包蔵地「弘福寺領讃岐国田図調査地」についても、包蔵地台帳及び包蔵地地図から削除された。（池見）



第1図 調査地位置図



第2図 調査地位置図 (S=1/5000)



写真1 旧河道断面（北西から）



写真2 旧河道検出状況（西から）

たかまつじょうあと おおてまえちく 2. 高松城跡（大手前地区）

- 1 所 在 地 高松市玉藻町
- 2 調査期間 平成 25 年 12 月 10 日～12 月 17 日
- 3 調査担当者 池見 渉・小川 賢
- 4 調査の原因 都市計画道路高松海岸線道路整備工事

5 調査の概要

(1) はじめに

学校跡地である調査対象地は、松平家時代に新造された大手前に相当し、本市の史跡高松城跡保存整備基本計画において、史跡範囲に追加し保存活用を図る地区である。平成 21 年度、城内中学校跡地において実施した雨水管渠整備に伴う発掘調査では、曲輪を構成する中堀の石垣が確認され、保存整備を念頭に置き現状保存を図った経緯がある。この大手前の空間は、松平家時代における城の玄関口であり、絵図では腰掛や門、番所が描かれた下馬所となっている。

(2) 調査成果

当調査は、都市計画道路整備事業に伴う確認調査で、堀の基礎部分と考えられる石垣と礎石建物を確認した。この石垣は中堀の入隅部分から発し、埋没した旧道と並行して西方向に延びるもので、中堀の石垣よりも後出し積み方が間知積のようになることから、昭和初期の所産となる可能性がある。礎石建物については規模は未確認だが、礎石の確認状況から堀の石垣よりも先行し、江戸時代に属する可能性がある。何れの遺構も詳細は不明であるが、高松空襲の後の整地層より下位で認められることがから、少なくとも戦後までには埋没していたものと推定される。

6まとめ

調査の対象地となった城内中学校跡地については、既往の発掘調査範囲を除けば、現状において史跡並びに埋蔵文化財包蔵地となっていない。しかしながら、現状の石垣や調査で確認された石垣と絵図とを対比すれば、東西において堀に囲まれ下馬所とされた城郭の一部であることは明白であり、よって跡地利用に先立ち、その全域を埋蔵文化財包蔵地として保護を図ることが妥当と考えられる。

その包蔵地名については、既存名である「高松城跡（玉藻町地区）」から前述した保存整備基本計画に合わせて「高松城跡（大手前地区）」に変更することとし、また大手前地区と東ノ丸を画する東西方向の中堀が未確定であることから、当範囲を大手前地区として当面は把握しつつ、調査の進展に応じて、一部を東ノ丸の名称に改訂するなど適宜見直すものとしたい。

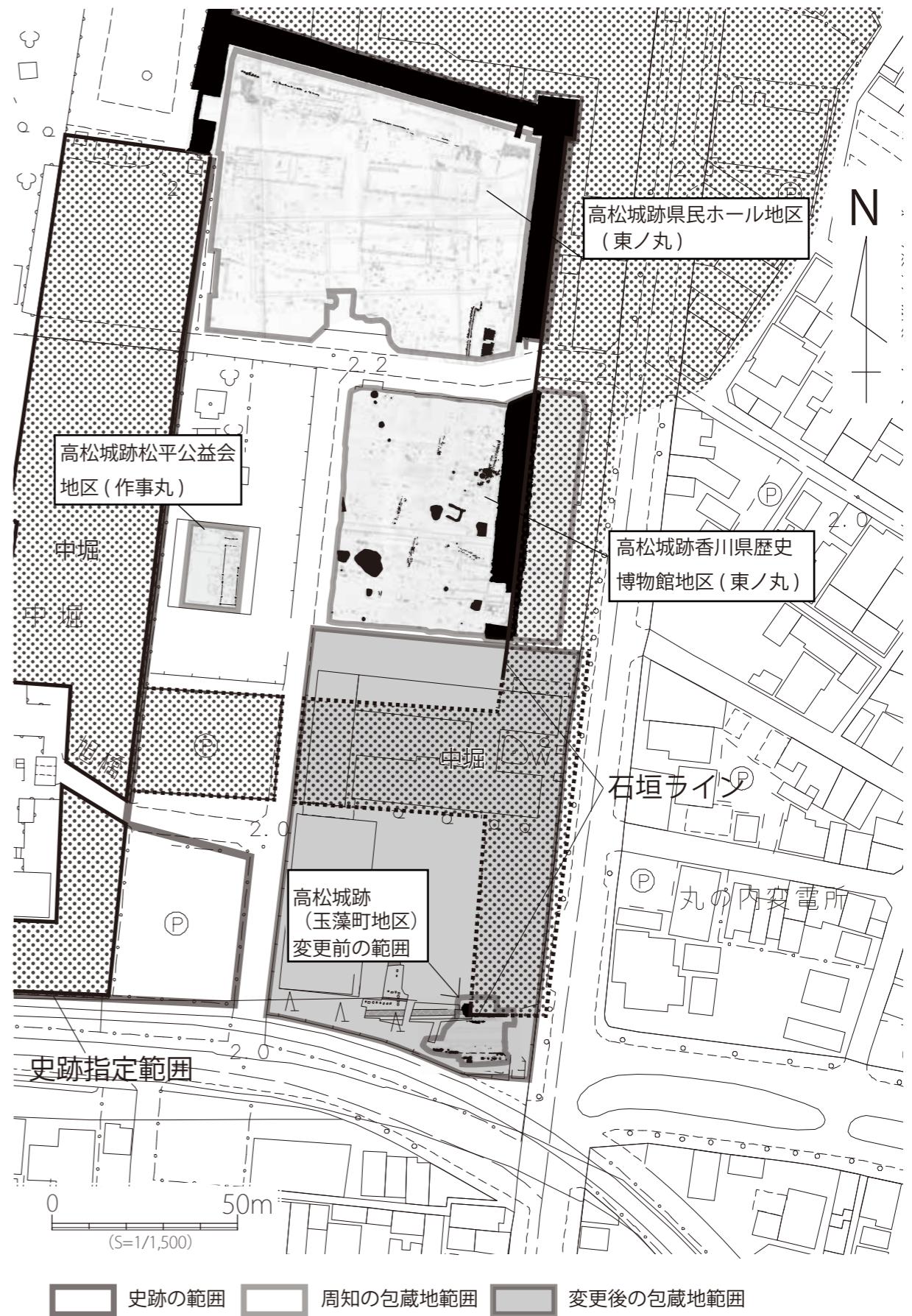
また跡地南部における路線計画については、保存整備基本計画の見地から、大手前地区の南限に相当する旧道以南において計画の策定が望まれる。
(小川)



第3図 調査地位置図 (S=1/5000)



写真3 試掘調査実施状況



第4図 史跡「高松城跡」範囲及び周知の埋蔵文化財包蔵地「高松城跡」範囲

※既存調査区内の黒塗り部は東ノ丸
造成～幕末期の主要遺構を示す

3. 飯田西 5・6号塚

- 1 所 在 地 高松市飯田町
 2 調 査 期 間 平成 26 年 2 月 5 日
 3 調 査 担 当 者 波多野 篤・池見 渉
 4 調 査 の 原 因 共同住宅建設工事
 5 調 査 の 概 要

(1) はじめに

工事対象地内に周知の埋蔵文化財包蔵地「飯田西 5号塚」及び「飯田西 6号塚」が存在することから、包蔵地の性格及び残存状況を確認するための確認調査を実施するとともに、周辺部においても埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。なお、上記の塚は現況で大きく改変を受けており、拳大から人頭大の円礫が散乱する状況を呈し、6号塚では一部マウンド状の高まりが確認できた。

(2) 調査成果

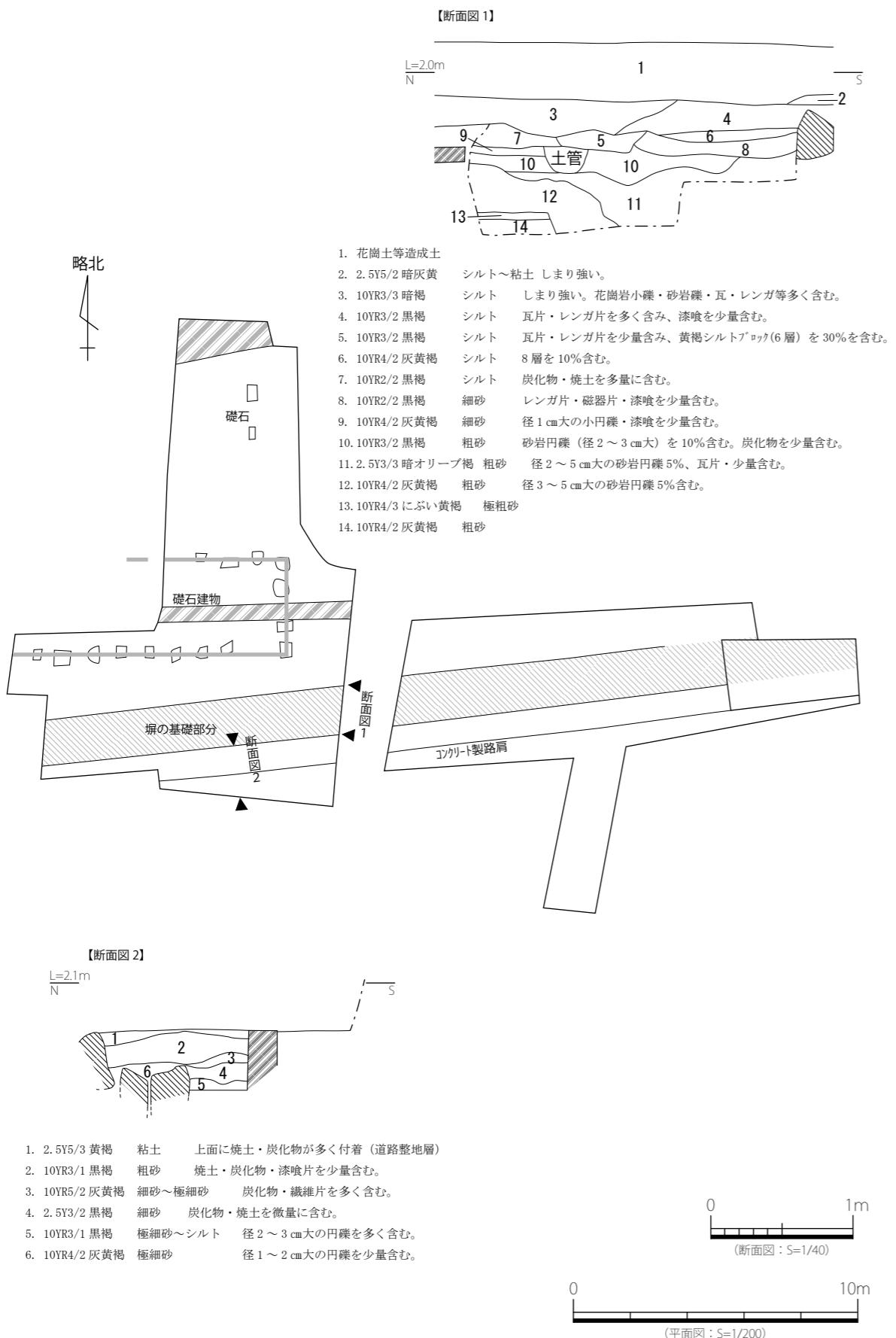
包蔵地外での試掘調査では遺構・遺物ともに皆無であった。包蔵地内での確認調査の結果、近世以降に形成されたと考えられる集石が確認されたのみであり、埋葬施設等は確認できなかった。なお、平成 26 年 4 月に工事立会を実施した結果、上記の塚は本来、人為的に形成されたものではなく、本津川東岸に形成された自然堤防状の高まりが削平を免れて部分的に残存したものであることが判明した。

6まとめ

以上の結果、上記の包蔵地は埋蔵文化財ではないことが判明したため、包蔵地台帳及び包蔵地図から抹消した。また、包蔵地外については遺構・遺物ともに皆無であったことから保護措置は不要である。(池見)



第 6 図 調査地位置図 (S=1/5000)



第 5 図 試掘調査 平・断面図 (S=1/200・1/40)



写真 4 飯田西 5号塚トレンチ断面 (南西から)



写真 5 飯田西 6号塚トレンチ断面 (南西から)

4. 史跡讃岐国分尼寺跡～13次調査～

1 所 在 地 高松市国分寺町新居
2 調査期間 平成26年2月3日～3月28日

3 調査担当者 渡邊 誠

4 調査の原因 重要遺跡確認調査

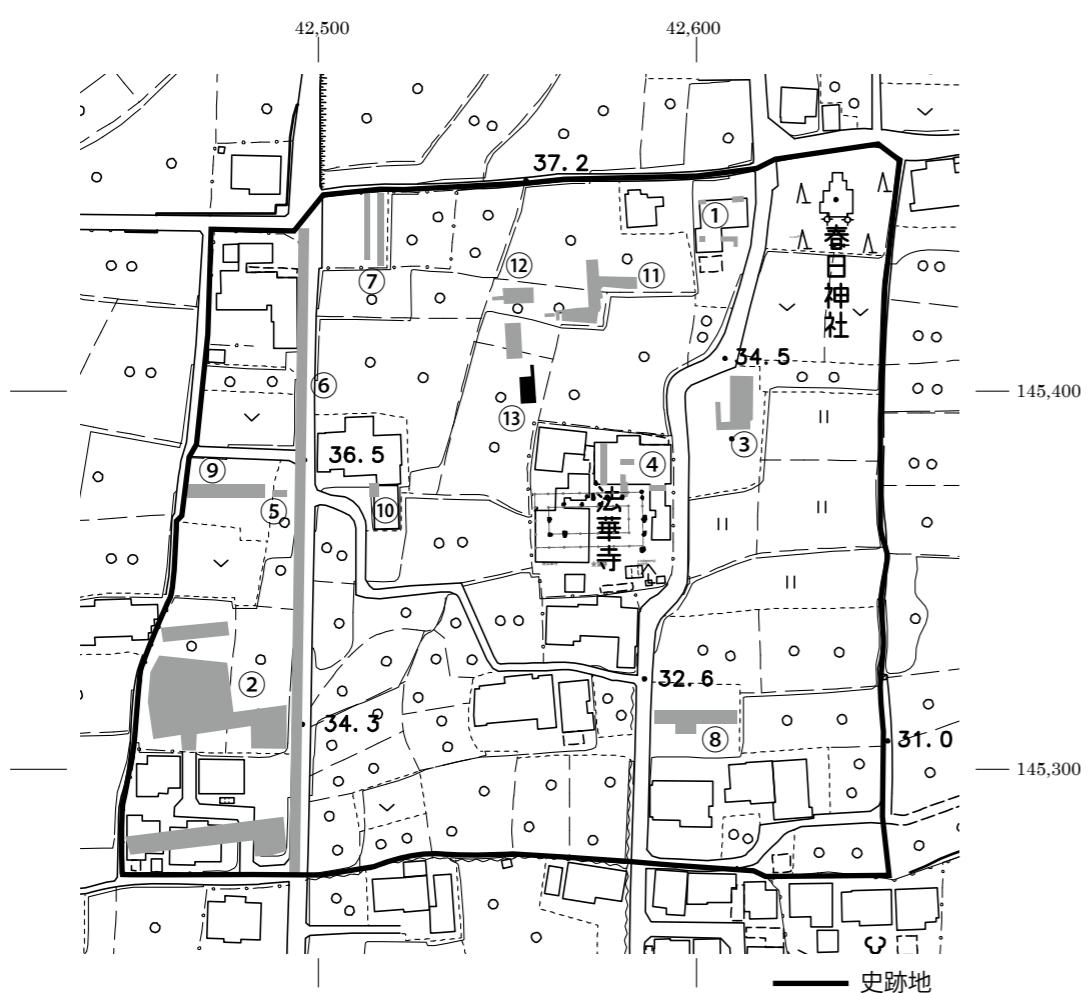
5 調査の概要

(1) はじめに

讃岐国分尼寺跡に関する調査はこれまでに12回実施されており、本調査で13回目を迎える。これまでの国分尼寺跡における確認調査では、寺域を区画する溝の一部、尼房跡と考えられる礎石建物跡（平成23・24年度調査（11・12次））が確認されている。尼房跡の発見によって、尼坊跡と金堂跡に挟まれた範囲に講堂跡と考えられる建物跡が所在する可能性が出てきた。そのため、今回の調査は講堂跡の建物の有無について明らかにすることを目的として実施した。掘削は人力で行い、測量・写真撮影等を実施した後、養生して埋め戻した。



第7図 調査位置図 (S=1/5000)



第8図 史跡讃岐国分尼寺跡 調査箇所 (S=1/2000)

(2) 調査成果

a 基本層序

調査地の基本層序は上から耕作土（第10図調査区土層図の第1層）、近世の耕作土（第2層）、褐灰色砂礫混じり土（第3層）、褐灰色粘質土（遺物を多量に含む：第4層）、にぶい黄橙色砂礫混じり粘質土（基壇土）である。

b 遺構の概要

安山岩と考えられる礎石及び礎石抜き取り痕跡を確認したほか、多数の柱穴などを確認した。また、礎石列の北側及び西側に瓦が集積する範囲を確認した。これらはこれまで雨落ちとして判断してきたものであるが、厳密にいうならば、基壇の落ちに位置している。これらは尼房跡と同様に礎石列に対して平行して確認でき、基壇の端を示しているものと考えられる。

法華寺境内地に現存する礎石が原位置をとどめているかが課題であったが、今回確認した礎石列上に位置し、柱間距離は等間隔でおおよそ3.245mとなること、礎石の上面レベルが同一であることなどから同じ建物を構成する礎石であり、原位置をとどめていることが明らかとなった。また、この法華寺境内の礎石が位置関係から南西隅を構成し、南北方向は4間と考えられる。柱間間隔が3.245mで、尼房跡が概ね0.296mを造営尺としていることから考えると、柱間間隔は11尺となり、南北方向の規模は44尺、約13m ($3.245\text{m} \times 4 = 12.98\text{m}$) となる。

今回の調査で確認した礎石は尼房跡のものより大きい。礎石の周辺には掘り方が確認できなかったため、今回の調査で確認した地山に非常に酷似する土は基壇盛土であると判断した。尼房跡の調査時にも同様な土が基壇を構成していたことから同様に盛土であると考えられる。礎石の検出レベルから、尼房跡より約50cm低いことも判明した。

基壇の西側及び北側はともに、上面部分は削平・流出した後に二次的な堆積が認められた。これらの堆積土を一部撤去し基壇土を検出すると、北側では明確な落ち、西側では緩やかに西に向かって下ることが判明した。基壇化粧などは確認できなかった。なお、西側については、削平等による影響も想定されるが、瓦の堆積が浅いこと、梁間方向の中央部分に位置することなどから現状では回廊がとりつく可能性も想定できる。基壇盛土の上層の堆積土を撤去した範囲が非常に狭小であることから、西側の判断については今後の調査に委ねたい。いずれにしても上記の点から北端・西端を概ね確認できたと考えているが、調査区内では雨落ち溝は確認できていない。

また、これら以外の小規模なピット群は掘削を行っていないが、これまで同様埋土から中世以前の遺構であると考えられる。

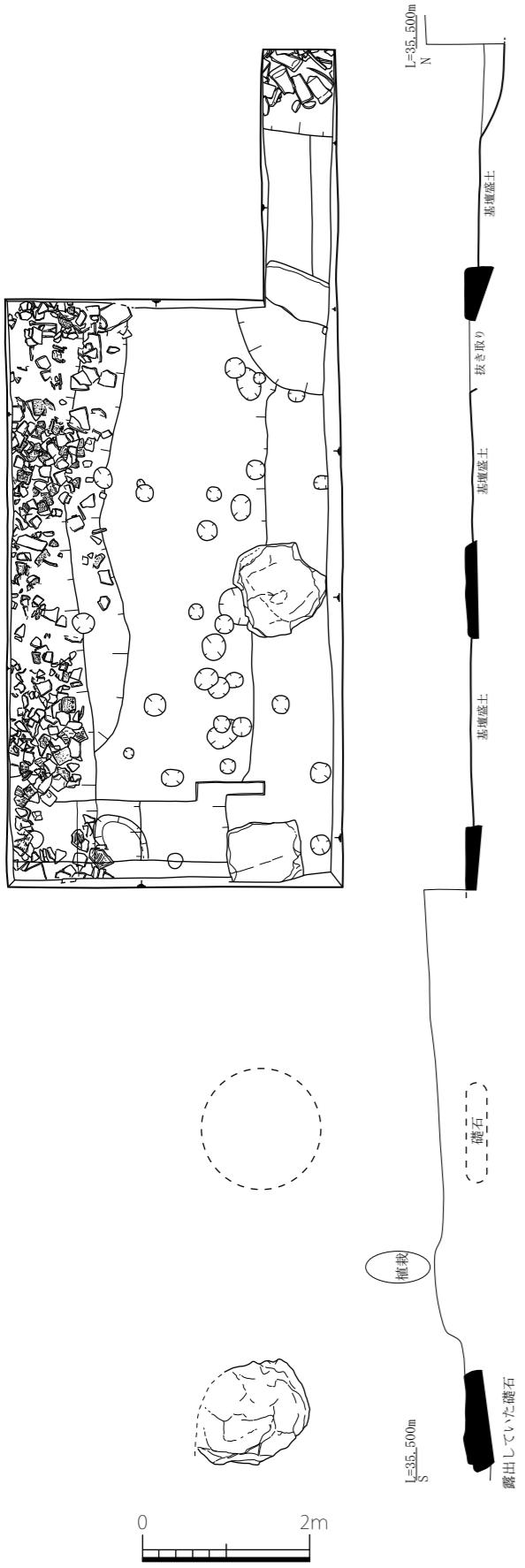
c 出土遺物の概要

基壇の落ちを示す範囲に多量に瓦が集積していたが、尼房跡とは異なり、土器類は非常に少ない。また、基壇の北端に位置する箇所では軒丸瓦の完形品の4点が非常に狭い範囲で出土したほか、多くの瓦が非常に原形に近い状況で出土した。第11～12図に掲載した軒瓦が13次調査で出土した全てである。第11図1～4の軒丸瓦は調査区北側拡張区で出土したもので、全て文様が異なり、建物の廃絶時の屋根の状況を示すものとして注目できる。周辺にも同様に廃絶時の状況をとどめて軒瓦が埋没しているものと考えられる。

6 まとめ

以上のように、今回の調査で確認した礎石建物は伽藍における位置関係から講堂跡と判断でき、尼房跡に続き、講堂跡も良好に残存していることが判明し、讃岐国分尼寺跡の全体像を解明する上で重要な成果を得ることができた。当該地の東側はやや低くなることなどから、どの程度建物が残存しているかは不明であるが、今回の調査によって、少なくとも同一レベルで広がる平坦地などにおいては、主要伽藍を構成する建物が良好に遺存している可能性があることが判明した。

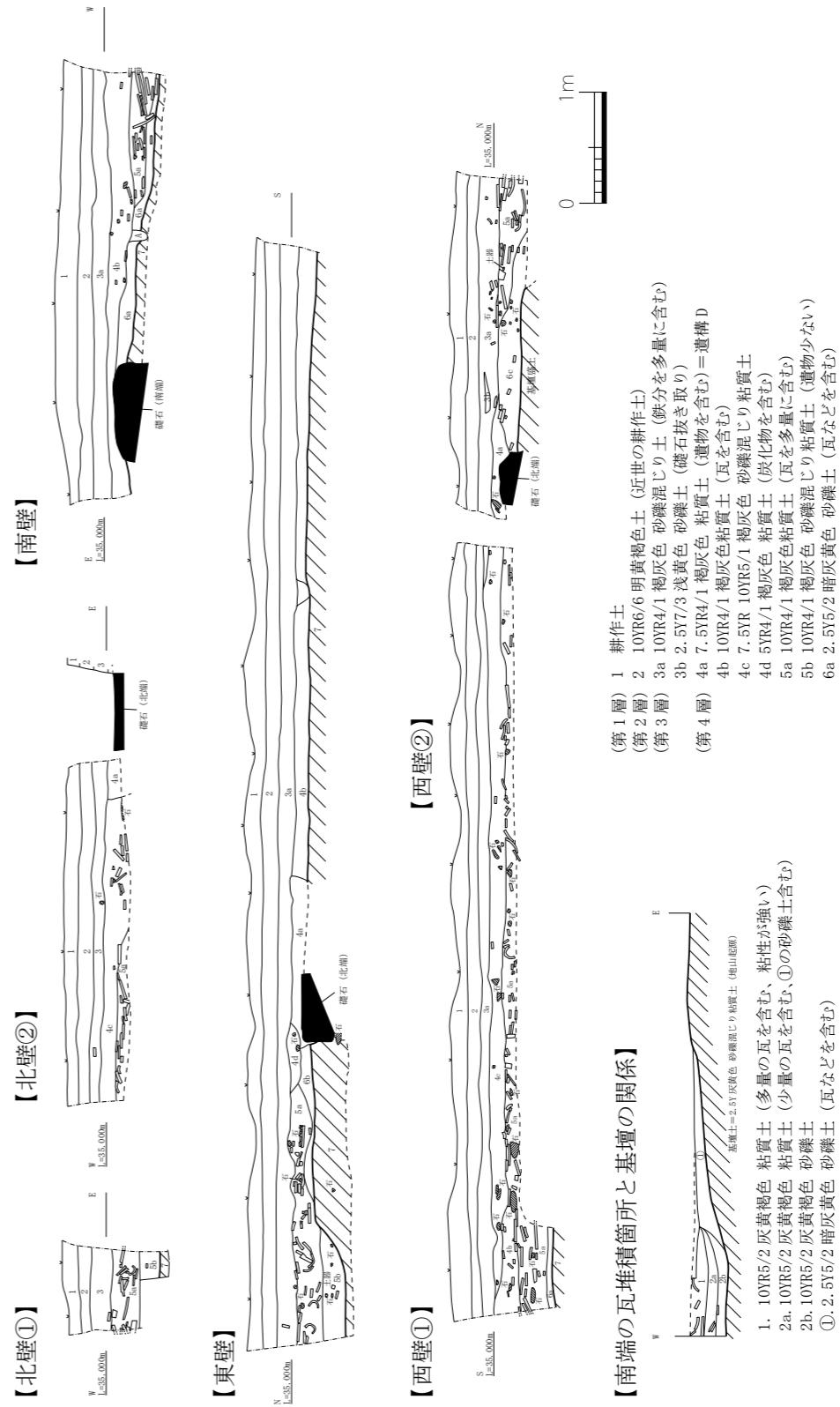
（渡邊）



第9図 調査区 平・断面図 (S=1/80)

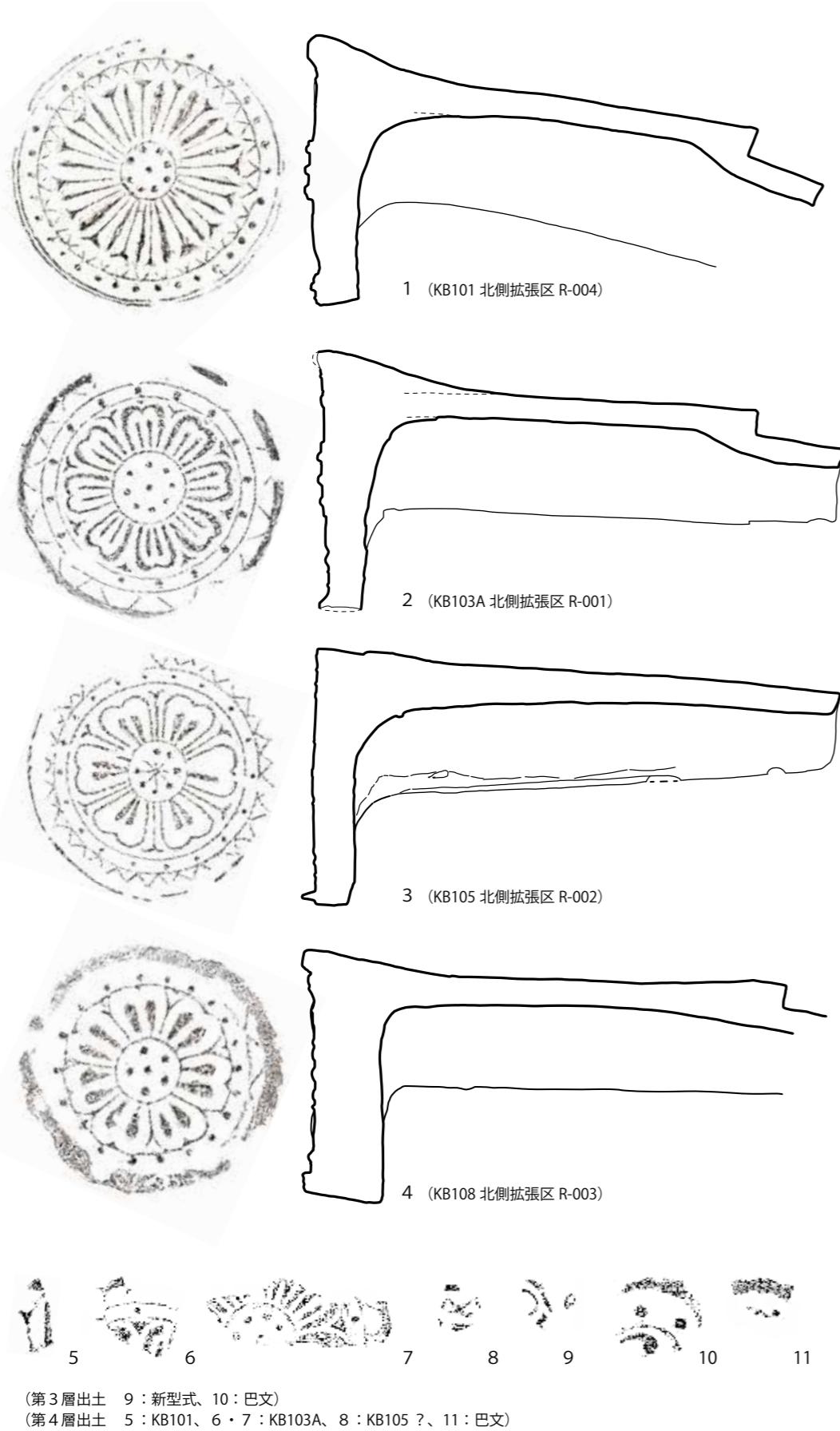


写真10 境内地に残る磚石 (南西から)

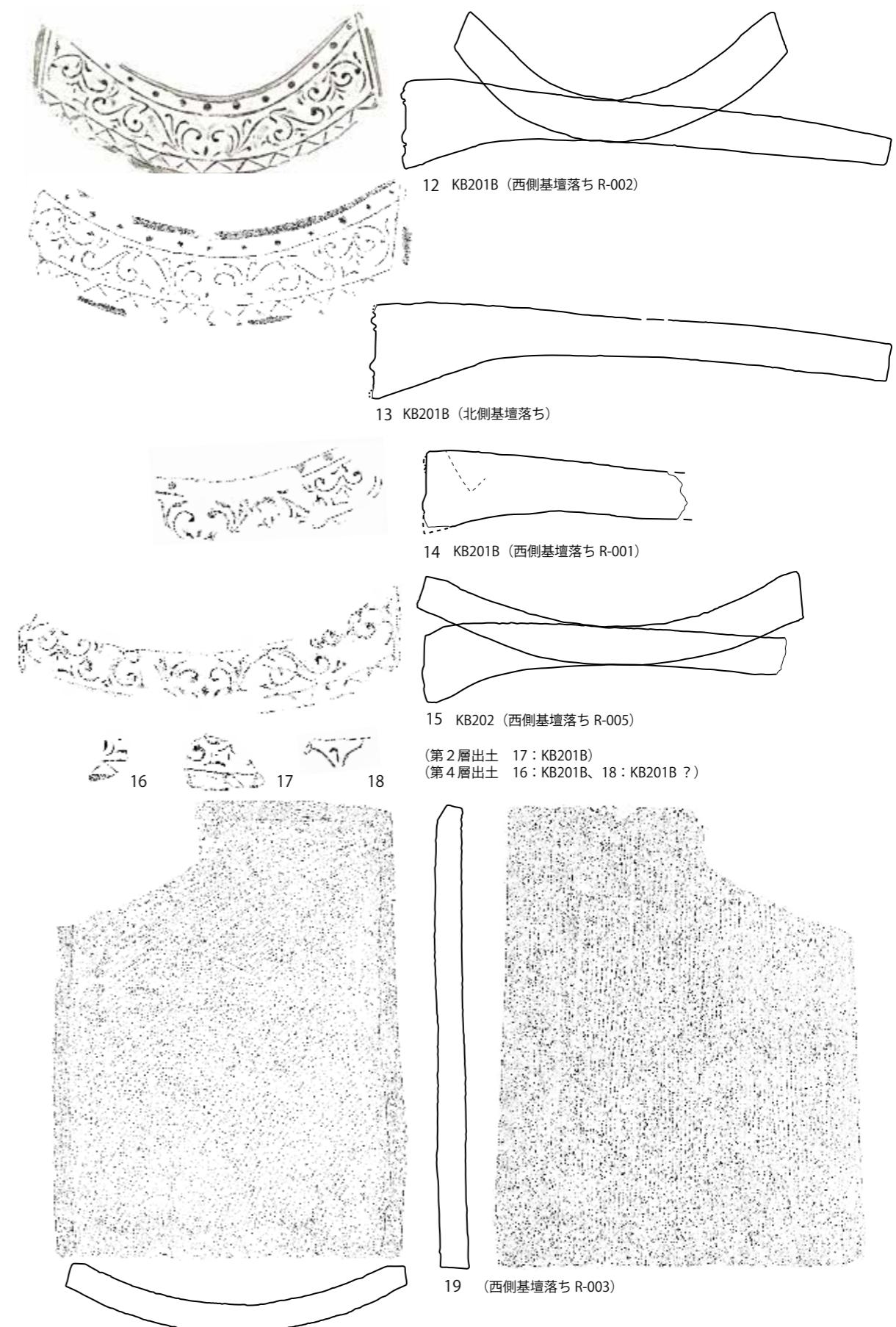


(第1層) 1 耕作土
2 10YR6/6 明黄褐色土 (近世の耕作土)
(第2層) 3a 10YR4/1 暗灰色 砂礫混じり土 (鉢分を多量に含む)
(第3層) 3b 2, 5Y7/3 淡黄色 砂礫土 (礫石抜き取り)
(第4層) 4a 7, 5YR4/1 暗灰色 粘質土 (遺物を含む) = 運構 D
4b 10YR4/1 暗灰色粘質土 (瓦を含む)
4c 7, 5YR 10R5/1 暗灰色 砂礫混じり粘質土
4d 5YR4/1 暗灰色 粘質土 (炭化物を含む)
5a 10YR4/1 暗灰色粘質土 (瓦を多量に含む)
5b 10YR4/1 暗灰色 砂礫混じり粘質土 (遺物少ない)
6a 2, 5Y5/2 暗灰黄色 砂礫土 (瓦を含む)
6b 10YR6/2 暗黄褐色 粘質土 (瓦を含む)
6c 10YR5/2 暗黄褐色 砂礫混じり粘質土 (瓦など、遺物を含む)
7 基壇土 10YR6/3 にぶい黄橙色 砂礫混じり粘質土 (穢が多い 地山起源)

第10図 調査区土層図 (S=1/60)



第11図 第13次調査出土軒丸瓦 (S=1/4)



第12図 第13次調査出土軒平瓦・平瓦 (S=1/4)

たかまつじょうあと まるのうちちく 5. 高松城跡（丸の内地区）

- 1 所 在 地 高松市丸の内町
2 調査期間 平成26年3月3日～3月6日
3 調査担当者 波多野 篤・池見 渉
4 調査の原因 共同住宅建設工事
5 調査の概要

(1) はじめに

工事対象地は近世城郭である高松城跡内に位置するとともに、周知の埋蔵文化財包蔵地「高松城跡（丸の内地区）」に隣接する。当地は高松城跡に関連する遺構が残存する可能性が極めて高いことから、事業者の協力のもと試掘調査を実施した。

(2) 調査成果

試掘調査の結果、現代造成土、太平洋戦争時の戦災層、近代造成土を除去した段階で、炭化物や焼土、陶磁器類、礫を含む黄色系粗砂～シルトの堆積層を確認した（第1遺構面）。さらに、下位ではオリーブ褐色～黄色系粗砂～細砂の一部で縞状を呈する堆積層（ラミナ）を確認した（第2遺構面）。なお、第1遺構面を構成する堆積層は陶磁器類や礫等を多量に含むことから人為的な整地層であると考えられる。一方、第2遺構面を構成する堆積層は炭化物や焼土が含まれるもの、一部でラミナが見られることから自然堆積層である可能性が高い。現地表面から遺構面までの深度は、第1遺構面が約-0.9m、第2遺構面が約-1.1mである。

第1遺構面及び第2遺構面上面で遺構精査を行った結果、両遺構面において土坑・柱穴等を確認した。第1遺構面では、調査対象地西端部において、南北に延びる石組み溝を1条確認した。溝開削箇所は武家屋敷と町家（「上横町」）の境界付近にあたることから、武家屋敷と町家の区画を目的として開削されたものである可能性が考えられる。なお、第1遺構面上位に位置する近代整地層上面では、太平洋戦争時の空襲で廃絶したと考えられる、焼土層に覆われた住宅基礎を検出しており、当該地における土地利用の変遷過程を考える上で重要である。

第1・2遺構面検出遺構等からの出土遺物は、肥前系陶器・磁器、瀬戸・美濃系陶器、京・信楽系陶器、備前系陶器等である。出土遺物の年代観から、第1遺構面は18世紀後葉～19世紀初頭に、第2遺構面は18世紀前葉～中葉に位置付けられる。



第13図 調査地位置図 (S=1/5000)



写真11 戦災層に覆われた近代住宅基礎検出状況（西から）



写真12 18～19世紀の遺構検出状況

6まとめ

試掘調査の結果、調査対象地全域に18世紀～19世紀代の遺構が比較的良好な状態で残存することが判明した。よって、調査対象地全域を周知の埋蔵文化財包蔵地「高松城跡（丸の内地区）」の範囲に追加した。なお、平成26年4月～6月に工事で破壊される部分に関しては発掘調査を実施しており、平成27年度に報告書を刊行する予定である。（池見）

じんないじょうあと 6. 神内城跡

- 1 所 在 地 高松市西植田町
2 調査期間 平成26年3月14日～3月31日
3 調査担当者 上原ふみ・小川 賢
4 調査の原因 測量による内容確認調査
5 調査の概要

(1) はじめに

調査対象は春日川の上流、西植田の山間部末端に位置する中世豪族、神内氏の山城跡である。付近に残る地名から台山と呼ばれる丘陵部を中心に縄張りが想定でき、また城域周辺には神内氏縁の墓所、神社が残るなど中世的景観をよくとどめている。平成21年度から随時、台山山頂部を中心とし遺構の調査を実施し、内容把握を行ってきたものである。

(2) 調査成果

当期間において主郭東西の虎口、土壘北東の大走り及び堀切等、山頂の曲輪に付随して認められる遺構測量を実施した。

6まとめ

次年度以降についても、遺構の把握を困難にしている竹林の伐採と地表に溜まった落ち葉、雑草の除去を行ないながら、遺構確認及びその測量を実施し、基礎資料の蓄積を目的とした調査を継続する予定である。（小川）



第14図 調査地位置図 (S=1/5000)



写真13 土壘北東側の犬走り



写真14 主郭西側の虎口

7. 新名氏屋敷跡

1 所 在 地 高松市国分寺町新名

2 調査期間 平成 26 年 4 月 6 日～4 月 11 日

3 調査担当者 池見 渉・杉原 賢治

4 調査の原因 分譲住宅地造成工事

5 調査の概要

(1) はじめに

工事範囲の一部は周知の埋蔵文化財包蔵地「新名氏屋敷跡」内に位置する。当該地における埋蔵文化財の包蔵状況が不明であったことから、開発行為との調整に係る協議データを得る目的で、確認調査を実施した。

(2) 調査成果

調査対象地は、南西から北東方向へと延びる低丘陵の先端付近に位置し、丘陵頂部から西側斜面部にあたる。確認調査の結果、現代耕作土・旧耕作土等を除去した段階で黄褐色系細砂～粘土の地山面（遺構面）を確認した。なお、遺構面までの深度は現地表面から約 -0.2 ～ -0.5m であり、やや低所に位置する 4 ～ 8tr では地山面までの深度が深いが、高所に位置する 1 ～ 3 ・ 9 ～ 11tr では地山面までの深度が極めて浅いことから、一定程度の削平を受けている可能性が考えられた。

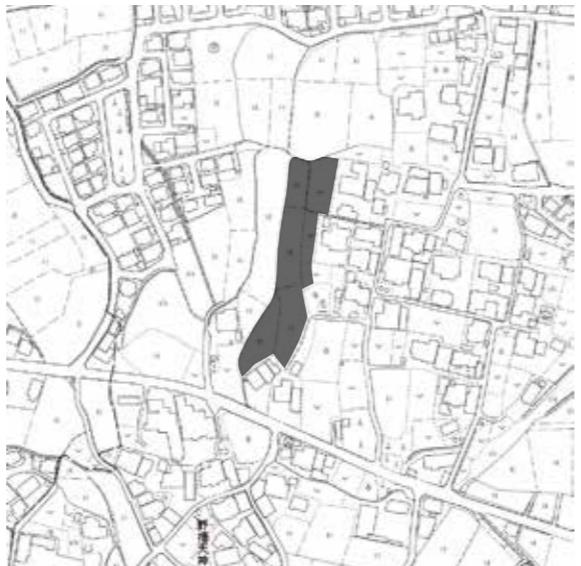
上記地山上面で遺構精査を行った結果、1・4・5・8tr において遺構を確認した。4・5tr では地形に沿って開削されたと考えられる幅 2.0m 以上の溝 2 条及び多数の柱穴を確認した。いずれも黄褐色シルト～粘土を埋土とする遺構であり、残存状況は非常に良好である。これらの遺構埋土からは、土師質土器碗・擂鉢・須恵器碗・甕、瓦器碗が出土している。これらの土器類は 13 世紀～ 14 世紀に属するものであると考えられる。よって、4・5tr 検出遺構は 13 世紀～ 14 世紀に形成された可能性が考えられる。

1・8tr では柱穴を数基確認した。平成 26 年 12 月に実施した工事立会でも、1・8tr 周辺で暗褐色系シルト～粘土を埋土とする柱穴が散在する状況を確認しており、複数棟の建物跡が存在した可能性を指摘できる。上面の削平が著しく、残存状況は不良である。また、埋土より土師質土器小片が少量出土しているのみであり、具体的な時期は不明である。ただし、埋土が 4・5tr 検出遺構埋土と類似していることから、少なくとも 13 世紀～ 14 世紀以降に属するものと考えられる。

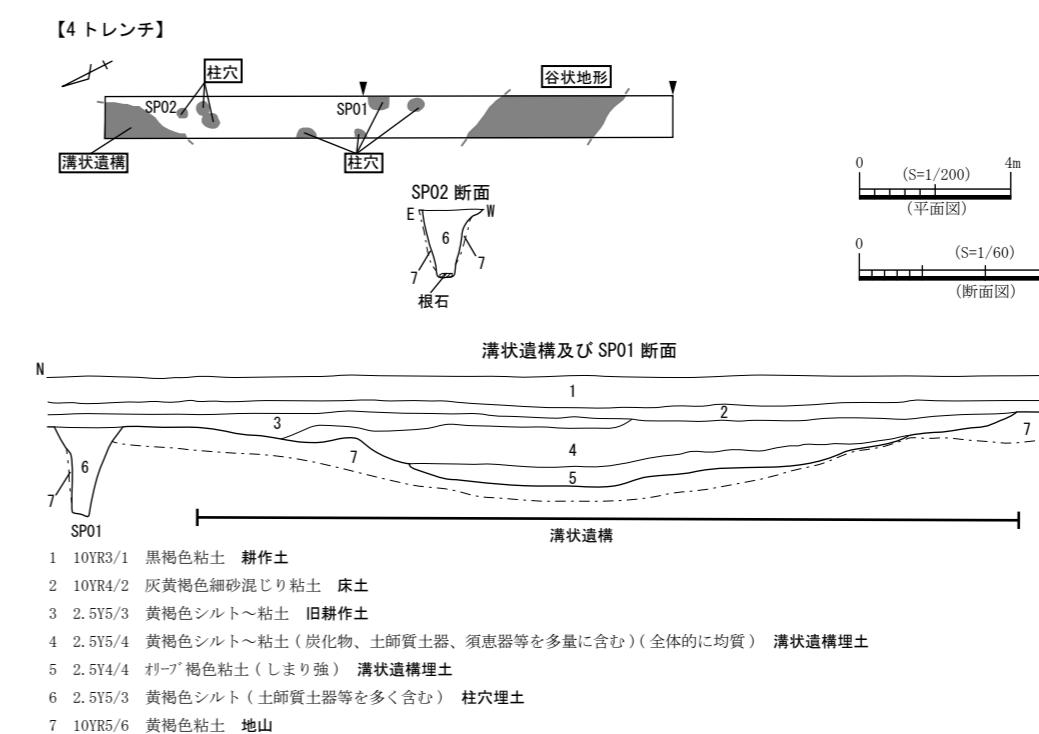
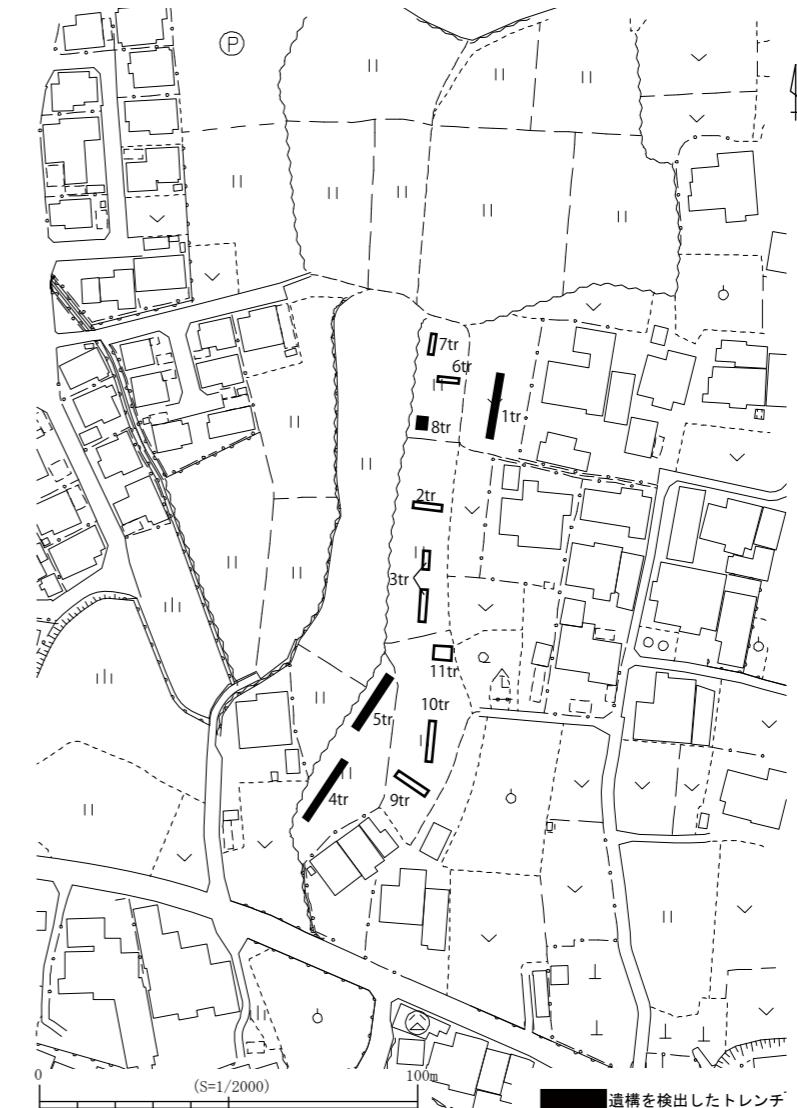
その他、2・3・6・7・9 ～ 11tr では遺構が皆無であった。特に比較的高所に位置する 2・3・9 ～ 11tr では上面が削平された可能性が極めて高いと考えられる。

6まとめ

確認調査の結果、1・4・5・8tr において、近世以降の削平を免れた 13 世紀～ 14 世紀以降の遺構・遺物が残存している状況を確認した。特に、調査対象地南端付近に位置する 4・5tr 周辺では、比較的良好に遺構が残存していることが判明した。当該地周辺に形成されたと考えられる新名氏屋敷跡との関係は明らかではないものの、検出遺構の所属時期は『古今讀岐名勝図絵』等の記載から推測される新名氏の存続時期と合致することから、地形に沿って開削された幅広の溝状遺構や柱穴群は新名氏屋敷跡に関連する遺構である可能性も考えられる。現段階では、具体的な証拠に欠けることから判断を保留せざるを得ない。なお、今回の開発行為では 1・6 ～ 8tr 設定箇所の削平が行われるため、平成 26 年 12 月に発掘調査を実施した。（池見）



第 15 図 調査地位置図 (S=1/5000)



第 16 図 トレンチ配置図及び 4 トレンチ平・断面図 (S=1/200 · 1/60)

【5 トレンチ】

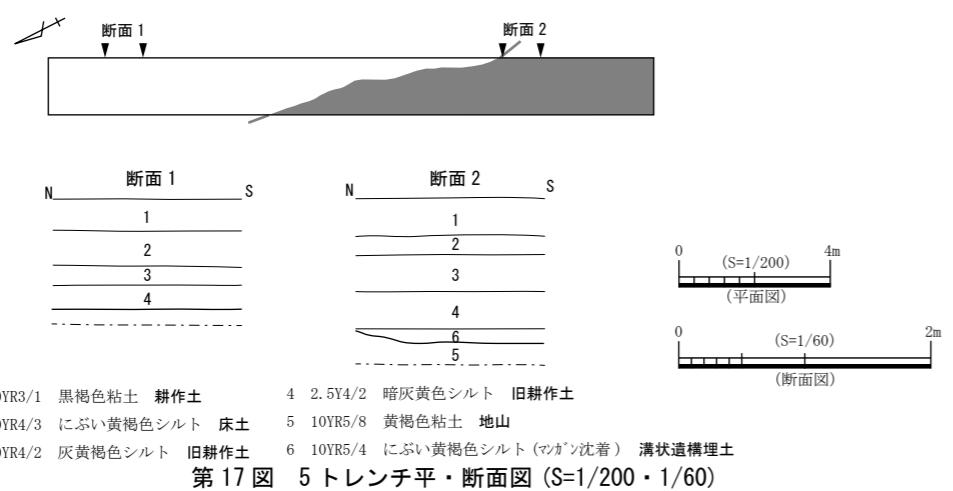


写真 15 1 トレンチ柱穴検出状況（北から）



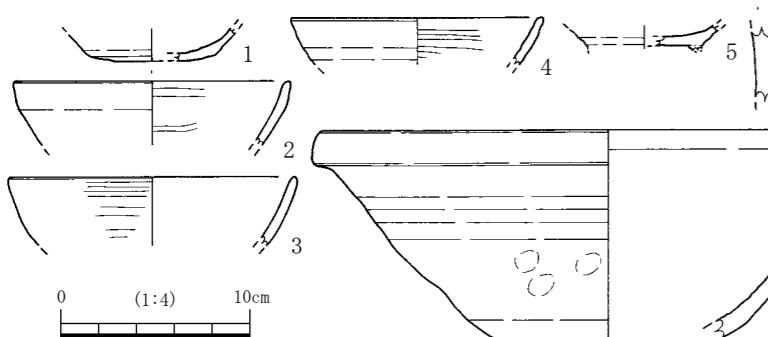
写真 16 1 トレンチ検出柱穴断面（南から）



写真 17 4 トレンチ検出溝状遺構断面（北西から）



写真 18 4 トレンチ検出柱穴断面（西から）



8. 平賀下遺跡

1 所 在 地 高松市香西北町

2 調査期間 平成 26 年 4 月 15 日・6 月 12 日

3 調査担当者 中西 克也

4 調査の原因 消防屯所建築工事

5 調査の概要

(1) 経緯と調査目的

香西北町で計画されている消防屯所の建設予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、近くに藤尾城跡があることから、事業者の協力を得て試掘調査を実施した。試掘調査は、調査対象地の北側に東西方向の第 1 トレンチと第 2 トレンチを設定し、南側にも同様に東西方向の第 3 トレンチと第 4 トレンチを設定し、実施した。

(2) 調査成果

a 基本層序

調査地は、五色台山系の東麓に広がる緩傾斜面の縁辺部に位置し、東側にむかって緩やかに下る。基本層序は、遺構検出面の地山を含めて 5 層である。上位の第 1 ~ 3 層はガラスやプラスチックを含み近代~現代のものであり、第 4 層は灰黄褐色+にぶい黄橙色シルト質細砂であり、中世~近世の堆積層である。第 5 層地山は明黄褐色+灰黄色細~粗砂であり、現地表面からの深さは約 0.6 m である。

b 遺構の概要

各トレンチにおいて複数の遺構を確認している。第 1 トレンチではピット 8 基、性格不明遺構 1 基を検出した。SP4 ~ 7 は規則的に並んでおり、掘立柱建物跡と考えられる。ピットの埋土は褐灰色シルト質細砂で、土師質土器小皿が数点分出土した。第 2 トレンチではピット 5 基、土坑 2 基を検出した。SK1 は埋甕が出土し、トイレ遺構と考えられる。ピットは不規則な配置である。SK1・SK2・SP12・SP13 は出土遺物から 18 世紀中期以降のものである。SP10 では中世の土師質土器小皿が出土した。第 3 トレンチではほぼ直線上に並ぶピット 3 基を検出し、SP16 より中世の土師質土器小皿が出土した。第 4 トレンチではピット 3 基、土坑 1 基、近代の溝・土坑を検出した。

6 まとめ

以上のように、試掘調査を行った範囲全域で遺構・遺物が認められた。その後、事業者と協議し、平成 26 年 7 月 14 日～25 日に調査対象地の全面において発掘調査を実施した。なお、平成 27 年度に報告書を刊行する予定である。（中西）



写真 19 調査地位置図 (S=1/5000)



写真 19 第 1 トレンチ土層（南から）

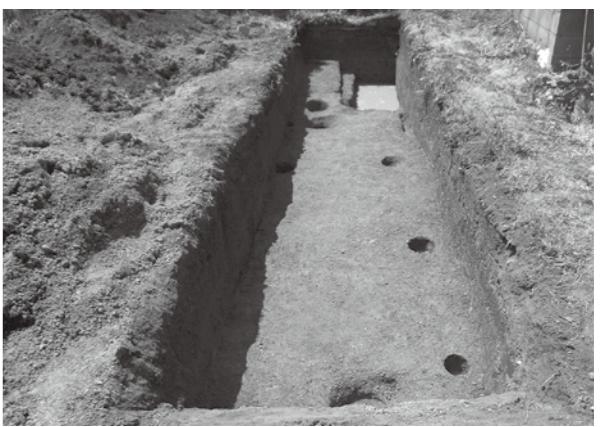


写真 20 第 1 トレンチ完掘状況（東から）

9. 宮ノ浦遺跡

- 1 所 在 地 高松市三谷町
2 調査期間 平成 26 年 4 月 23 日
3 調査担当者 高上 拓
4 調査の原因 净化槽設置工事
5 調査の概要

(1) 経緯と調査目的
対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「宮ノ浦遺跡」に近接することから、試掘調査を実施した。調査では 2 本のトレンチを設定した。

(2) 調査成果
対象地全域に、縦横に既設の埋設管が確認され、調査可能範囲がほとんど存在しなかった。また、一部掘削が可能であった西トレンチでも、花壇の造成土の下層から風化円礫混じり砂層を確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。

6まとめ
対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地とは認められない。(高上)



第 20 図 調査地位置図 (S=1/5000)

10. 北山下遺跡

- 1 所 在 地 高松市川島東町
2 調査期間 平成 26 年 4 月 24 日
3 調査担当者 高上 拓
4 調査の原因 中学校校舎改築工事
5 調査の概要

(1) はじめに
対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「北山下遺跡」に隣接することから、試掘調査を実施した。

(2) 調査成果
試掘調査の結果、調査区の西端付近で黒褐色の遺物包含層を基盤層とする遺構 (SX1) を確認した。直線的に延びる平面形を確認したが、大半は調査区外へ延びるため性格は不明である。埋土より中世に属する土師器・須恵器片が比較的多数出土した。調査区中央付近では、砂層と粘土層の互層が確認でき、一部溝状の落ち込みを確認した。溝からは土師器細片 1 点を検出したのみで、時期の特定には至らなかった。隣接する北山下遺跡の発掘調査では、試掘対象地の東端よりさらに東側に遺構面及び遺構の分布が広がることを確認している。今回の試掘調査では、対象地の西端において埋蔵文化財が包蔵されることを確認できた。

6まとめ
対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地として認められる。開発に先行して発掘調査を実施することが協議で決定し、その調査も平成 26 年度中に既に完了している。(高上)



第 21 図 調査地位置図 (S=1/5000)

11. 史跡高松城跡

- 1 所 在 地 高松市玉藻町
2 調査期間 平成 26 年 5 月 7 日～5 月 9 日
3 調査担当者 高上 拓
4 調査の原因 トイレ改築工事
5 調査の概要

(1) はじめに
史跡地内における便益施設の整備工事計画に先立つ確認調査である。第 23 図のとおりトレンチを設定し人力で掘削を行った。

(2) 調査成果
トレンチ全域において、表土下で花崗土や近現代の造成土が厚く見られ、一部互層状を呈し、切りあいも認められることから複数次の造成や改変がなされたことが分かった。平均して現地表面から 80 cm 程度の深度まで掘削したが、コンクリートの建造物基礎や、コンクリートブロックを含む攪乱が全域で確認されたのみで、遺構・遺構面は確認できなかった。このため、標記工事に着手した。

工事着手後の立会時、対象地の南西隅において、長径 80 cm 程度の花崗岩が 2 石、南北方向に長軸を揃えて直線的に列をなした状態で検出した。天端の標高がほぼ同一で、なおかつ比較的平坦であったことから、人工的な石列であると考えられる。また、石列の背面（西側）には、拳大～人頭大程度の安山岩角礫が確認でき、石垣の裏栗石に相当する可能性が考えられる。2 石の花崗岩は褐色砂層の直上に設置されており、空隙には上記の裏栗石と同程度の石材が詰められている。このことから、石材の設置にあたって小礫で勾配・高低を調整していることが分かる。また、北側の石材には縦 5 cm × 幅 4 cm 程度の矢穴痕跡、いわゆる豆矢の痕跡が 2 箇所に見られる。検出した石列の北側は確認調査でも確認したとおり、大規模な攪乱が及んでおり、遺構の残存は見られなかった。ただし、攪乱土中より同規模の石材がもう 2 石確認されており、本来は石列がより北側に延びていた、あるいはより上方に積み重ねられていた可能性が考えられる。層序であるが、検出した石垣は既存の便益施設の基礎であるコンクリートがその上面を巻き込んだ形で遺存しており、このコンクリートの除去を行ったところその下部に残存していた。このため、石材よりも上方は大きく改変されており、旧状をとどめていない。工事立会中の検出であり、各層からの出土遺物は確認できず、遺物からの時期の比定は困難である。

6まとめ
描年不詳ながら城内の施設等の配置を比較的正確に示しているとされる『旧高松御城全図』を見ると、当該地は弼櫓の東方にあたり、絵図中には南北方向の階段状の表現及び直線の区画が表現されている。今回確認した遺構はこれら的一部にあたる可能性が考えられる。また検出した石組は 2 石の上面が同一高で、平坦であることから、雁木の一部である可能性も考えられる。(高上)



第 22 図 調査地位置図 (S=1/5000)



写真 21 検出した石組と背面の弼櫓

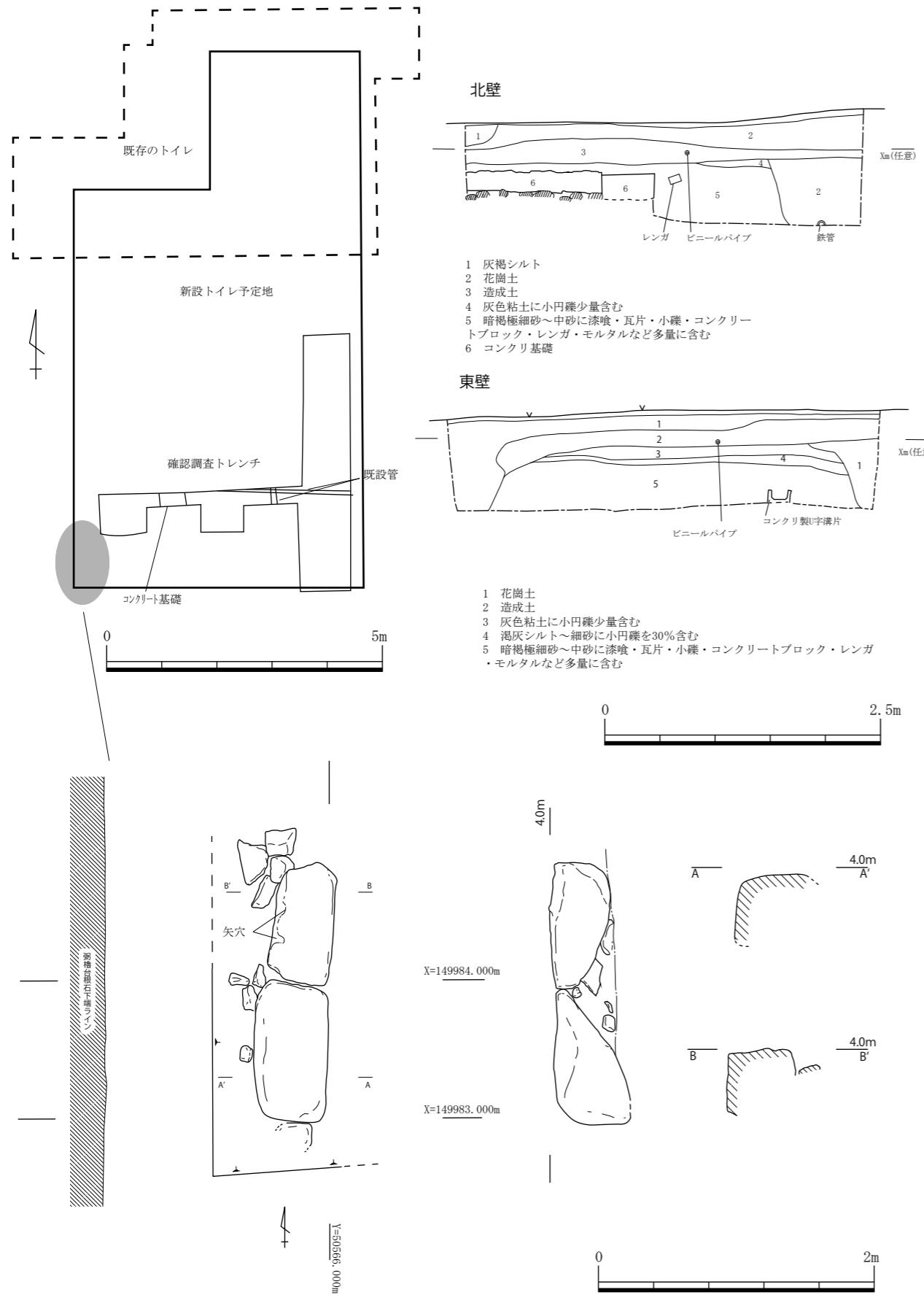


写真22 確認調査風景



写真23 石列検出状況（北から）



写真24 石列正面（東から）



写真25 矢穴痕跡

12. 上林町地区

1 所 在 地 高松市上林町

2 調 査 期 間 平成 26 年 5 月 14 日

3 調査担当者 高上 拓

4 調査の原因 分譲住宅地造成工事

5 調査の概要

(1) はじめに

対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「拝師廃寺」に隣接する。事業者より事前の調査依頼が提出されたため、試掘調査を実施した。

(2) 調査成果

2 本のトレーンチを設定し、調査を行った結果、対象地のほぼ全域に、鉄筋コンクリートやアスファルトを多量に含む攪乱が最大で現地表面より 1.4 m を超えて及んでいた。また、対象地東端と南端で、一部攪乱を免れた範囲を確認したが、遺構・遺物は確認できなかった。

6まとめ

対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地とは認められない。（高上）



第24図 調査地位置図 (S=1/5000)

13. 佐料遺跡

- 1 所 在 地 高松市鬼無町佐料
 2 調査期間 平成 26 年 5 月 15 日
 3 調査担当者 高上 拓
 4 調査の原因 個人住宅建設工事
 5 調査の概要

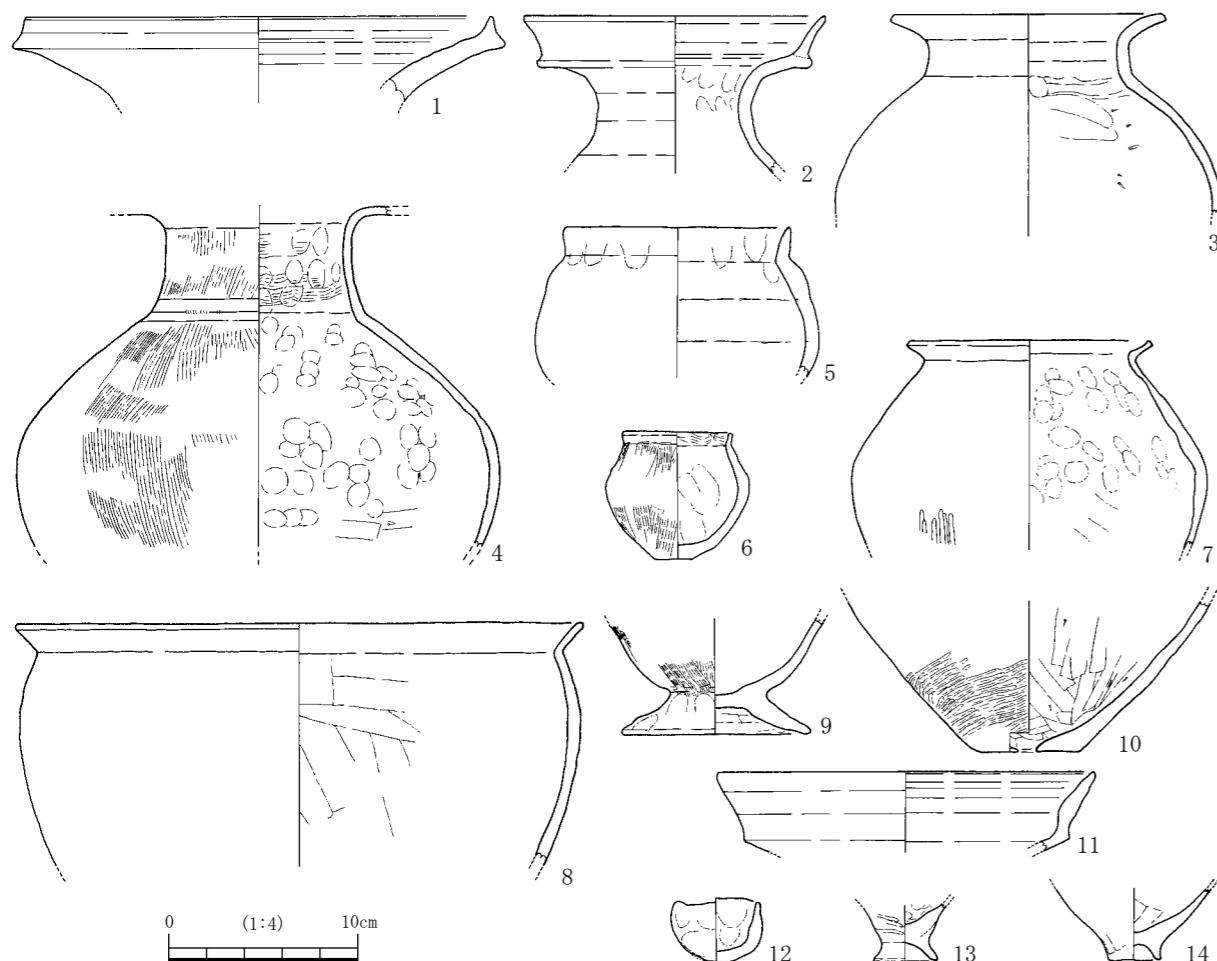
(1) はじめに

対象地は、周知の埋蔵文化財包蔵地「佐料遺跡」内に位置する。事業者からの依頼を受け、確認調査を実施した。調査では住宅建設予定地に 2 本のトレンチを設定した。

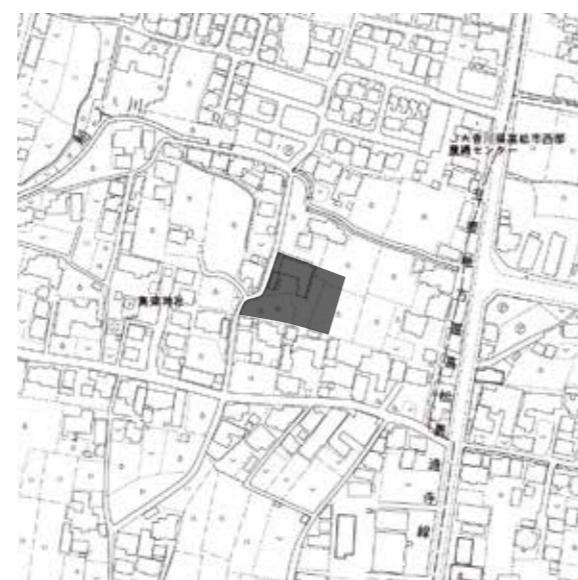
(2) 調査成果

東西トレンチを中心とした調査区の全域で、現地表面下 0.3 ~ 0.4 m 程度の深度で柱穴を多数確認した。東西トレンチ中央付近では等間隔に並ぶ。いくつかを半裁し、SP1・2・4 からは図化できなかった土師器碗・杯の細片が出土しており、古代以降の埋没時期が推定される。

また、これら遺構の基盤層であるが、勝賀山側（西側）から東側に向かって傾斜して地形が下



第 26 図 出土遺物 (S=1/4)

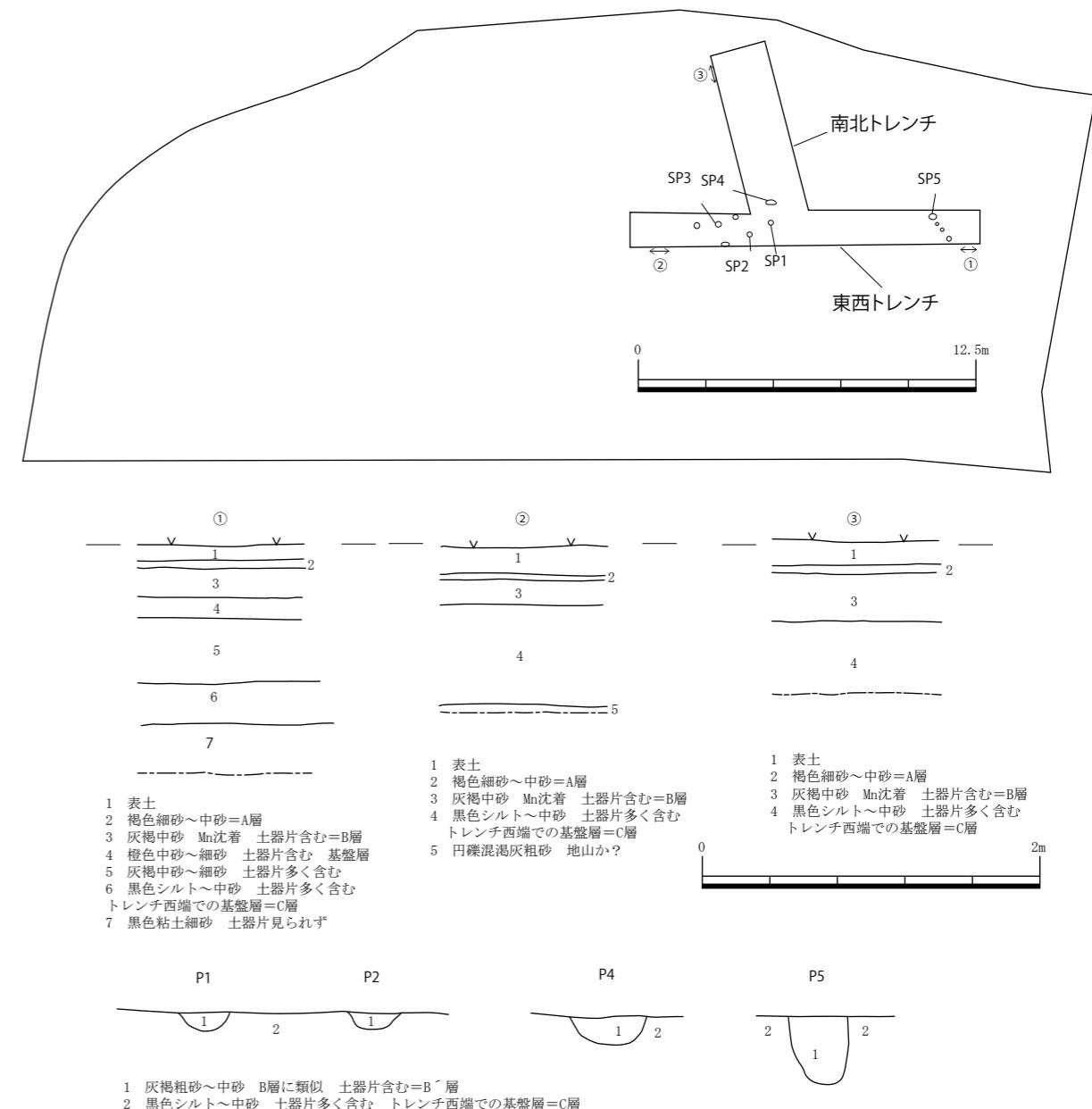


第 25 図 調査位置図 (S=1/5000)

降しており、調査区西端では黒色系のシルト～中砂が基盤層となり、東端では上層である橙色中砂～細砂が基盤層となる。いずれも弥生時代後期後半を主体とする遺物を多量に含んでいる。評価としては遺構の基盤層であり、遺物包含層でもある。遺物の出土量であるが、基盤層上面に露出していた資料のみでコンテナ 1 箱分出土するなど、極めて多い。基盤層を断割り調査した結果、東西トレンチ東端では現地表面より 1.3 m 掘削しても地山を確認することができなかった。遺物も現地表面下 1 m 程度の深度までは確認でき、遺物包含層が厚く堆積していることが分かる。東西トレンチ西端では現地表面下 0.9 m 程度の深度で円礫混じり粗砂層を確認しており、地山に相当する可能性が考えられる。

6 まとめ

以上をまとめると、調査対象地全域に比較的濃密な遺構の分布と、基盤層中から極めて多量の遺物を確認することができた。現地表面から基盤層までの深度は、0.3 ~ 0.4 m 程度である。なお、協議の結果、今回の開発に際しては保護層が設けられ、埋蔵文化財が保存されることが決定した。(高上)



第 27 図 遺構等 平・断面図

14. 史跡讃岐国分尼寺跡～14次調査～

- 1 所 在 地 高松市国分寺町新居
 2 調査期間 平成26年5月19日～6月20日
 3 調査担当者 渡邊 誠
 4 調査の原因 重要遺跡確認調査
 5 調査の概要

(1) はじめに

讃岐国分尼寺跡に関する調査はこれまでに13回実施されており、本調査で14回目である。これまでの国分尼寺跡における確認調査では、寺域を区画する溝の一部、尼房跡（平成23・24年度調査（11・12次））、講堂跡の一部（平成25年度調査）を確認している。今回の調査は講堂跡の建物の規模の解明を目的として実施した。

なお、調査は後述するように、建物に関わる遺構の確認が目的であり、建物の東端、南端に位置する箇所でトレントを設定して調査を実施した。掘削は人力で行い、測量・写真撮影等を実施した後、養生して埋め戻した。

(2) 調査成果

a 基本層序

調査地の基本層序は上から耕作土（第31図 調査区土層図の第1層）、床土（近世の耕作土：第2層）、褐灰色砂礫混じり土（第3・4層）、褐灰色砂礫混じり粘質土（遺物を多量に含む：第6層）、にぶい黄橙色砂礫混じり粘質土（基壇土：第9層）である。

b 遺構の概要

【第1トレント】当該地は南及び東に向かって削平を受けており、礎石の根石と考えられるものが僅かに残存していた。さらに、東側に拡張した部分で、礎石を抜き取る時に石材を割った痕跡及びその端材が確認できた。

【第2トレント】遺構面はほぼ耕作土直下に認められ、拡張した南東部分は南東に向かって一部削平されていることが判明した。調査区の2か所で根石と抜き取り時に石材を割った痕跡と、基壇の北側と東側の落ちが認められた。また、同一レベルで近世末期以降と考えられる暗渠排水、瓦廃棄土坑を確認した。土層との関係から、礎石が抜き取られた後、もしくは、一部が見えていいるような状況で、近世末期以降の遺構が構築されたものと考えられる。

c 出土遺物の概要

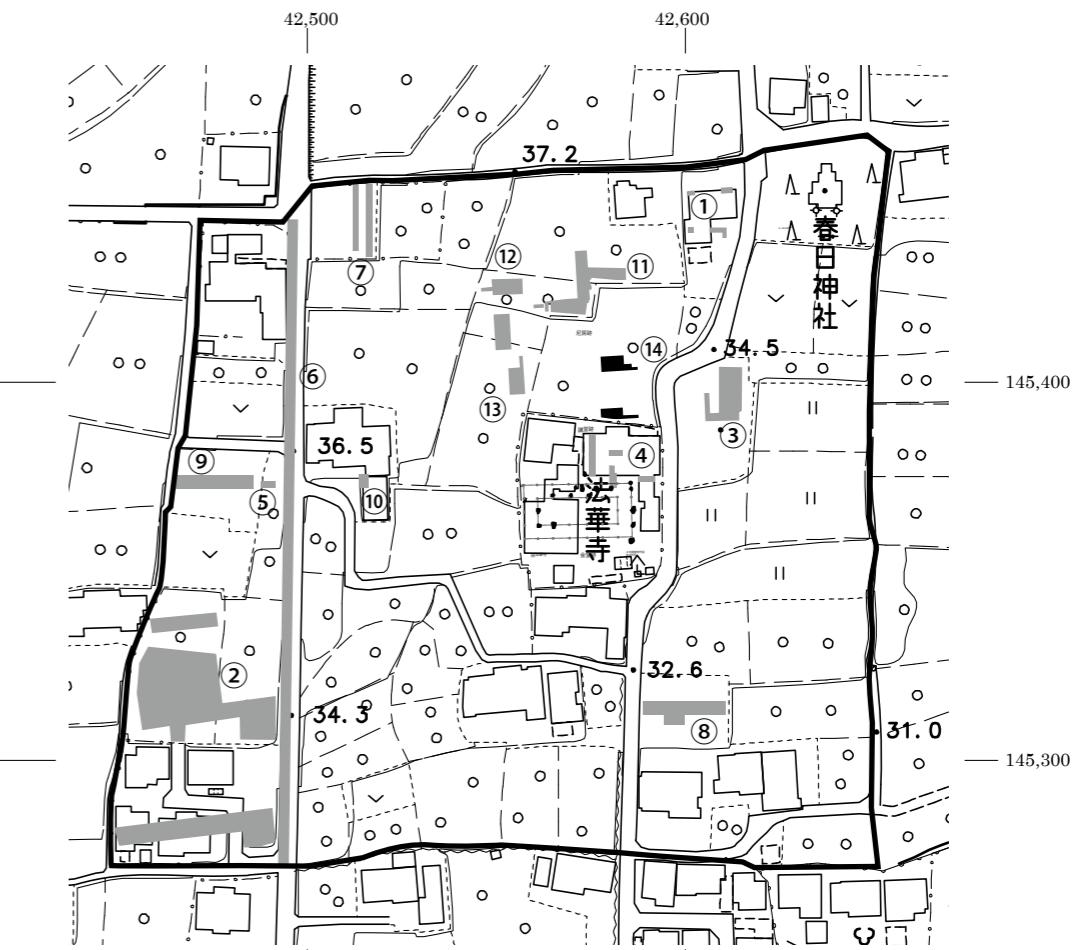
第13次調査同様に建物に葺かれていた瓦が多数出土した。軒瓦については一部取り上げ、それ以外の遺構面で確認できたものはこれまでどおり現地にとどめている。第32～33図の軒瓦が、出土したすべてである。

6まとめ

以上のように、礎石は現存していなかったが、根石及び抜き取り、東限と考えられる溝もしくは基壇の落ちを確認した。これらの成果から、講堂跡は礎石間の距離で東西約28.4m（44尺）、南北約13m（96尺）の規模で、基壇の落ちから、基壇規模は東西約33.15m（112尺）、南北約17.76m（60尺）であると推定される。今回の調査によって、讃岐国分尼寺跡の講堂跡の基壇の南東部はかなり古い段階に削平されていること、多くの礎石は抜き取られている可能性が高いが、基壇の大部分は残存していることが明らかとなった。また、平成23年度以降の4か年の調査で、史跡地内の削平状況、後世の造成状況も確認でき、現在の表層地形と創建段階の地形及び造成について検討を行う必要性も明らかとなった。（渡邊）



第28図 調査位置図 (S=1/5000)



第29図 14次調査箇所 (S=1/2000)



写真26 第2トレント全景 (西から)



写真27 第2トレント礎石抜き取り状況 (南から)



写真28 第2トレント遺物出土状況 (南から)

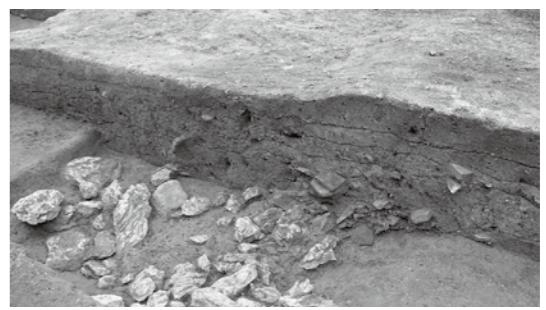
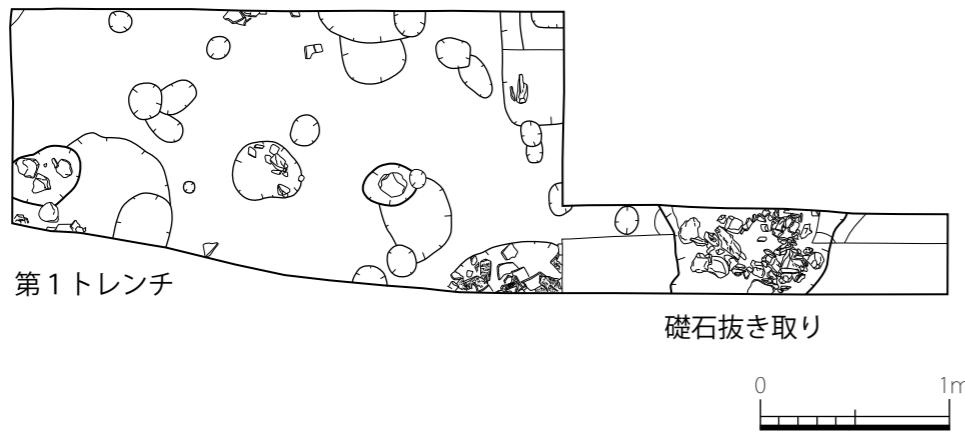
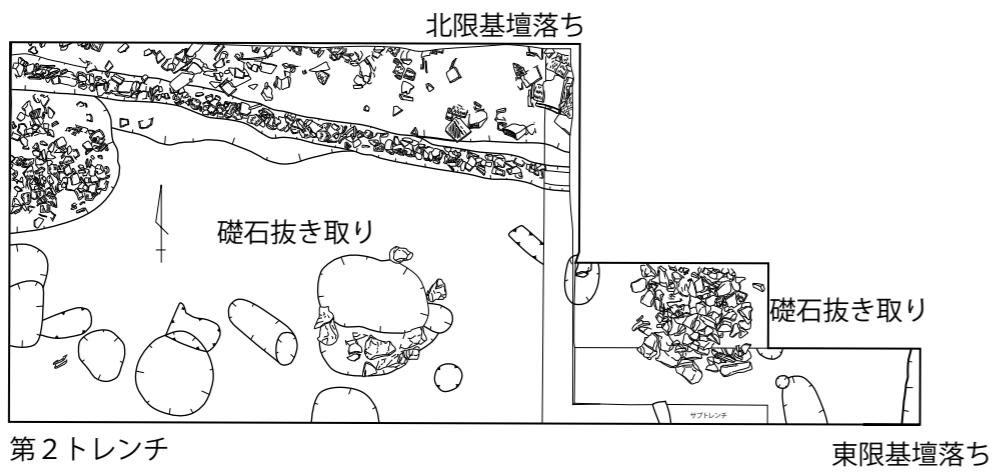


写真29 第1トレント礎石抜き取り状況 (南から)

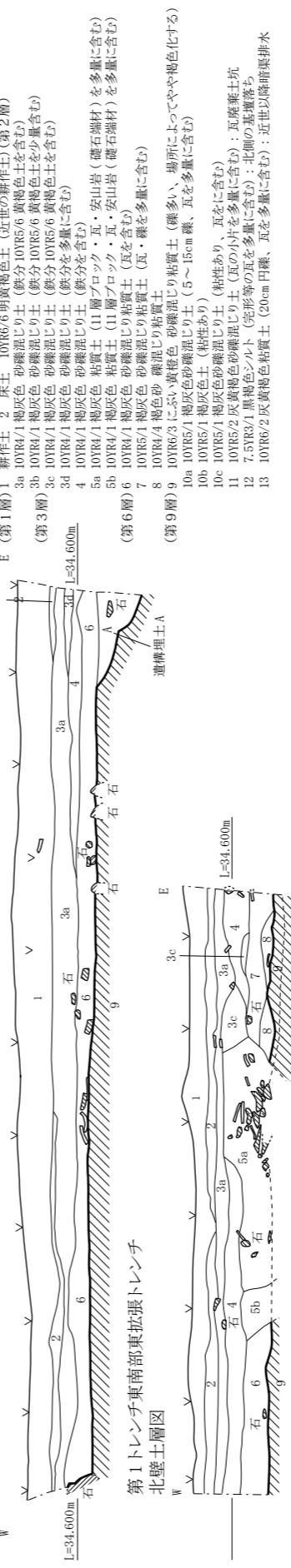


第30図 トレーニング平面図 (S=1/40)

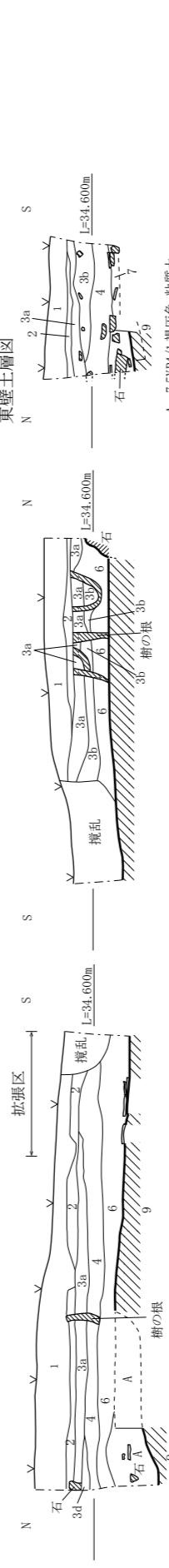
- 26 -



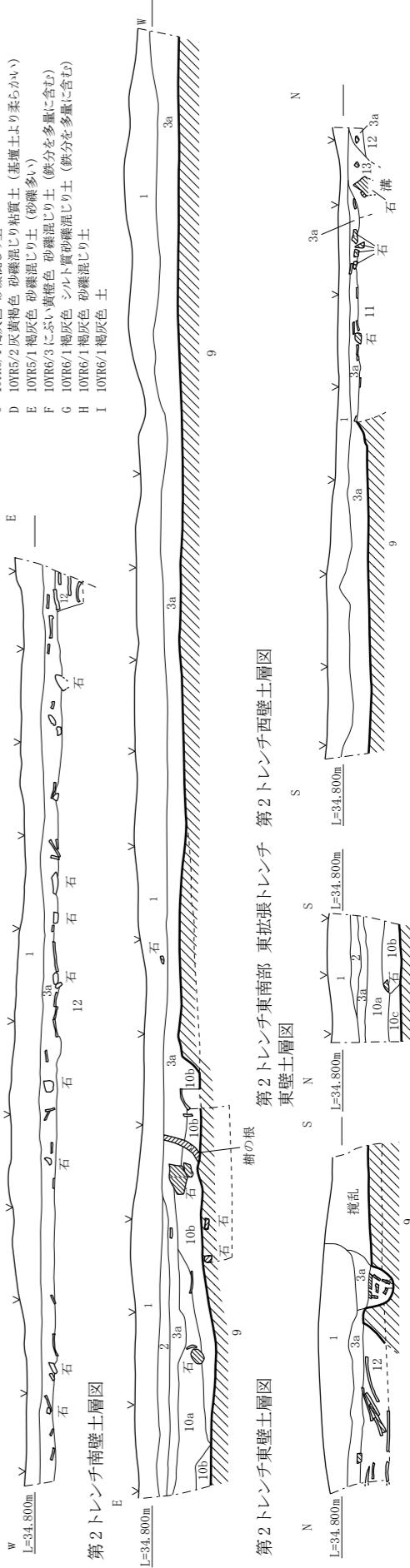
第1トレーニング北壁土層図



第1トレーニング東壁土層図

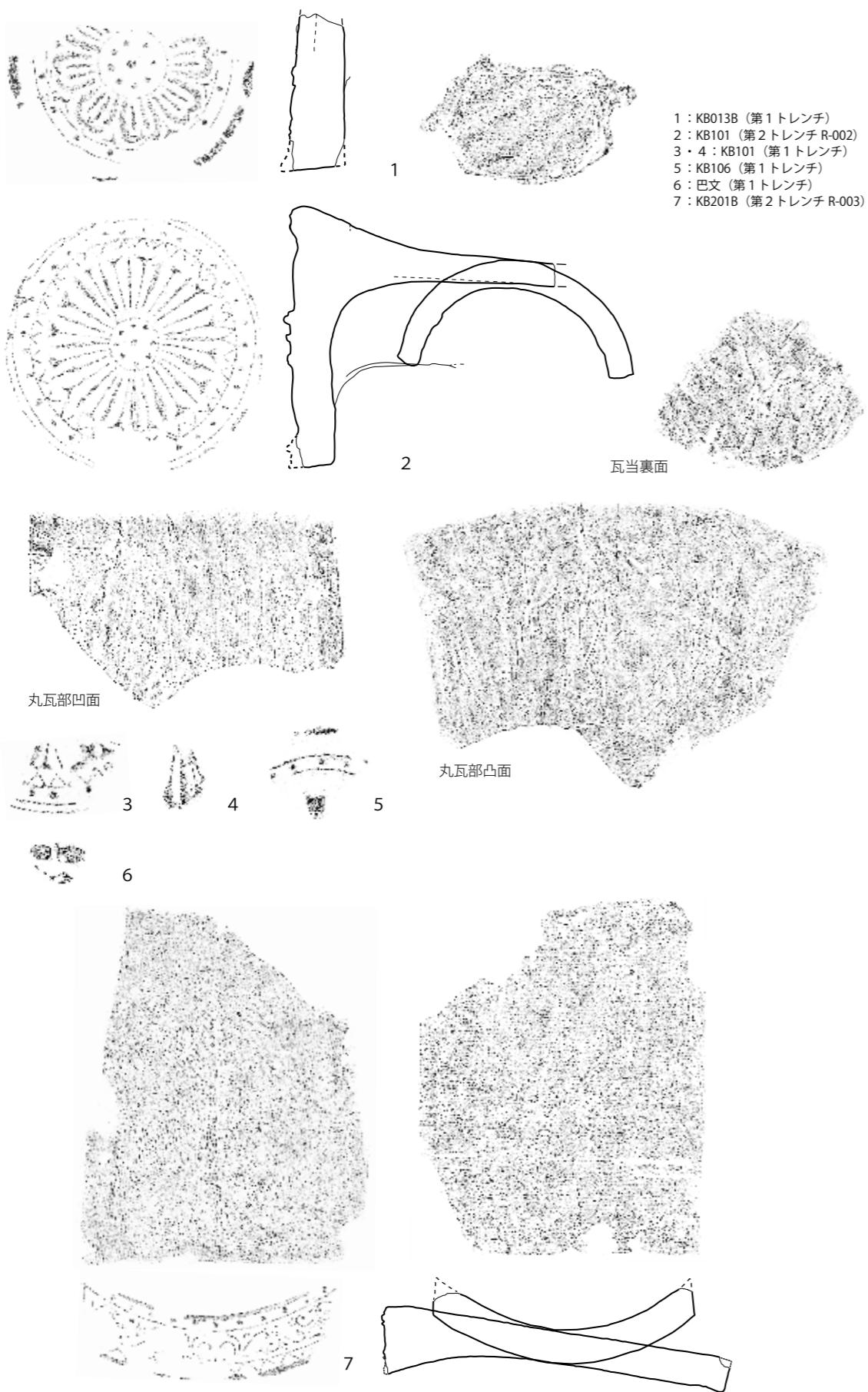


第2トレーニング北壁土層図

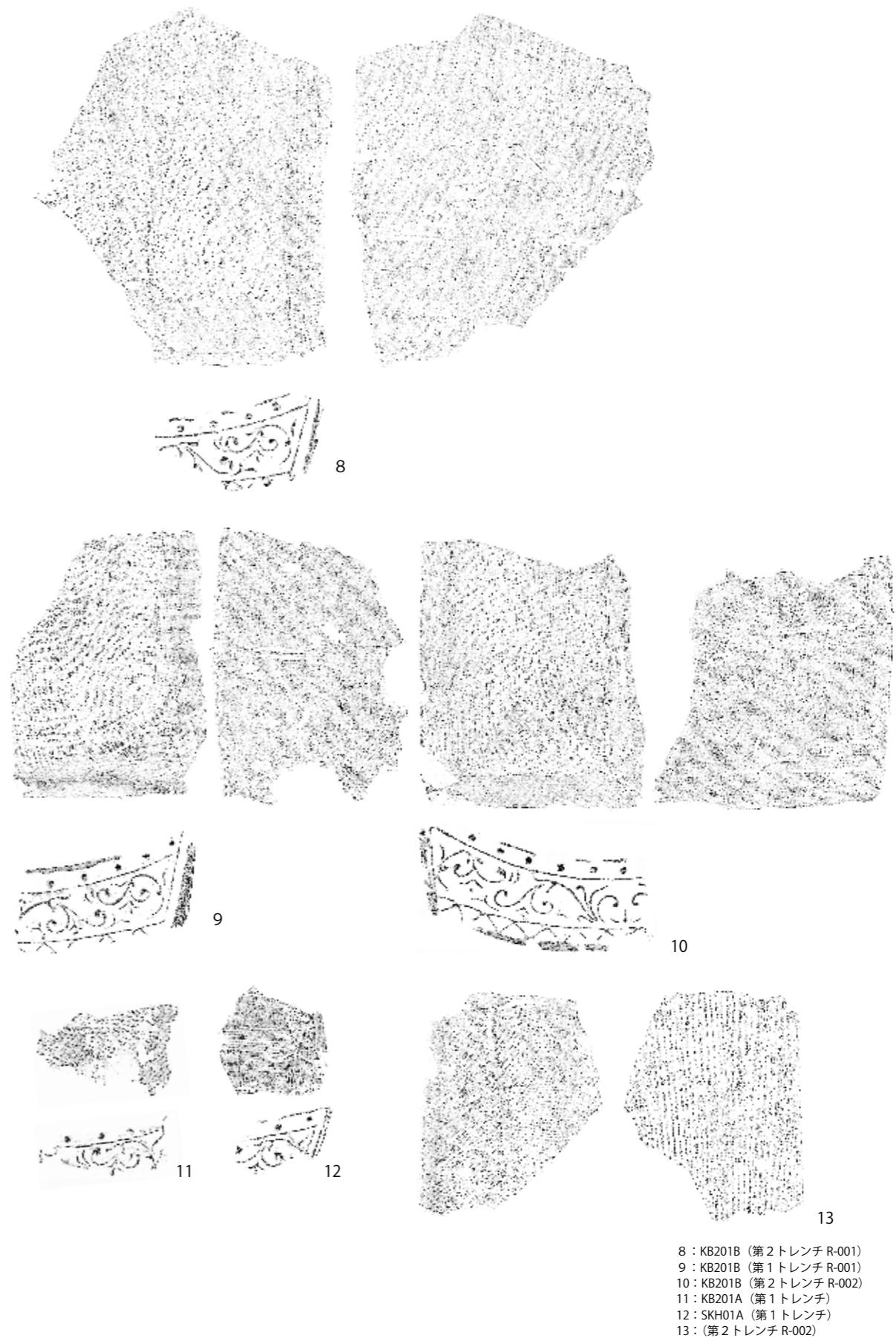


第31図 トレーニング土層図 (S=1/40)

- 27 -



第32図 第14次調査出土軒丸瓦 (S=1/4)・軒平瓦 (S=1/6)



第33図 第14次調査出土軒平瓦・平瓦 (S=1/4)

15. 北口遺跡

- 1 所 在 地 高松市香川町大野
2 調査期間 平成26年5月19日～5月20日
3 調査担当者 高上 拓
4 調査の原因 大野地区統合保育所整備工事
5 調査の概要

(1) はじめに
対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、事業主管課との事前協議に基づいて、試掘調査を実施した。調査にあたり、6本のトレンチを設定した。

(2) 調査成果
基本層序であるが、全域で花崗土の下層から旧耕土・床土を確認した。これらの層には近世以降の遺物を含む。その下層が遺構面であり、かつ遺物包含層であるA層を全域で確認している。この層には弥生土器片・打製石器のほか、8世紀代のものと考えられる須恵器片が細片であるがいくつか確認できる。遺物はいずれも摩耗しており、古代に流入した遺物包含層であると考えられる。さらに下層では、黒色系のシルトが厚く堆積しており(B層)、少量の土師質土器細片を含む。時期は不明であるが、後述するSD1はこのB層を基盤層としている。B層の下層には地点により異なるが、黄褐色系のシルト層や風化礫を含む層などが確認できる。特に前者は良好な旧地表面であると考えられ、遺構面である可能性が推測されたため、南東・南西トレンチなど複数の調査区で平面的に調査したが、遺構・遺物ともに確認することはできなかった。

確認した遺構は、東トレンチのSP1・SD1、南西トレンチのSP2・3である。SP1はA層を基盤層とする。遺物が出土せず、時期は古代以降であるとしか特定できない。SD1はB層を基盤層とし、A層に被覆されている。出土遺物は土師質土器細片であり、時期の特定はできないが、上記の堆積状況から古代以前の遺構であると言える。SP2はA層を基盤層とし、埋土中より高台付の土師器底部と須恵器細片が出土しており、古代～中世の時期幅の中で捉えうる。SP3は上面検出のみで掘削していないが、A層を基盤層としており、埋土の特徴はSP2に近似する。

以上をまとめると、全域に遺物包含層かつ遺構の基盤層が認められるほか、密度はやや疎であるが、遺構の分布が認められた。遺物の出土量であるが、試掘面積に対してコンテナ1/4箱程度である。

6まとめ

調査対象地全域が埋蔵文化財包蔵地と認められる。協議の結果、開発に先行して発掘調査を実施することとなり、平成26年度中に実施する予定である。(高上)



第34図 調査地位置図 (S=1/5000)

16. 上天神遺跡

- 1 所 在 地 高松市上天神町
2 調査期間 平成26年5月21日
3 調査担当者 高上 拓
4 調査の原因 病院建設工事
5 調査の概要

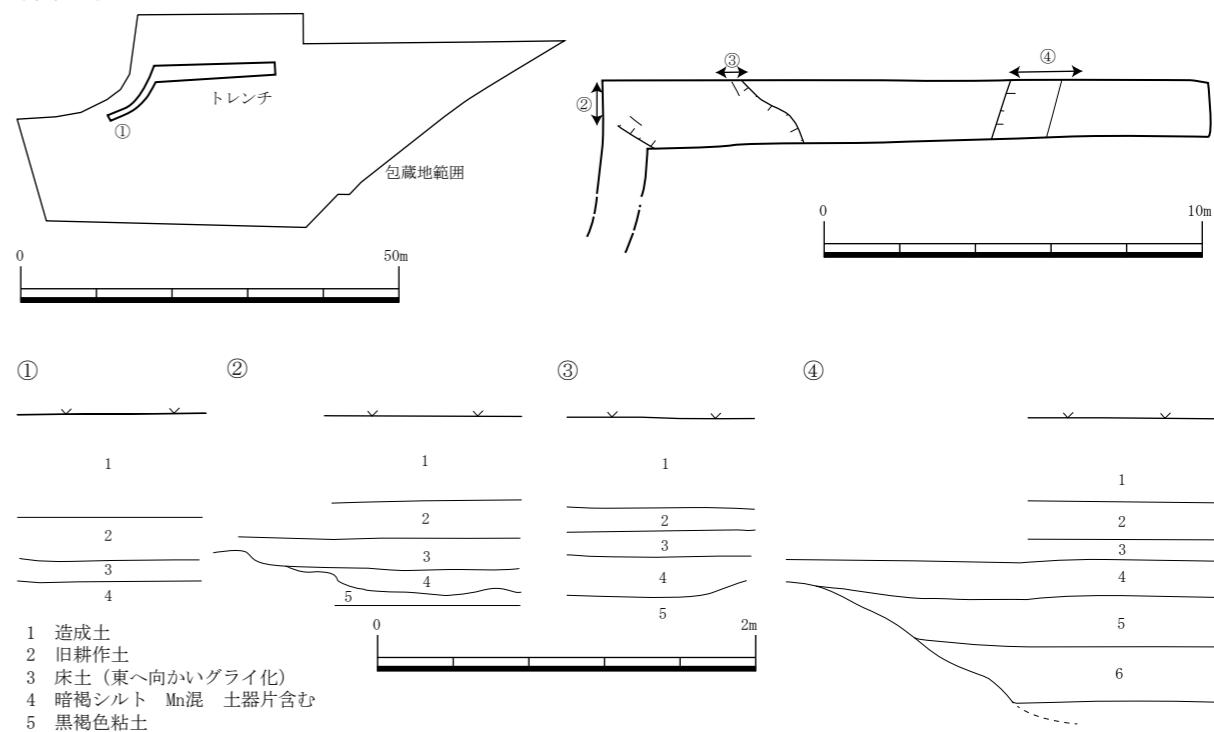
(1) 経緯と調査目的
対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「上天神遺跡」内に位置する。事業者から依頼を受け、確認調査を実施した。調査にあたっては、開発行為の及ぶ範囲を主対象とし、東西方向のトレンチと、それに連続する湾曲したトレンチを設定した。

(2) 調査成果
東西トレンチでは西端で不明遺構SX1、東端で溝SD1を検出した。SD1は東側の遺構端が調査区外へ延びており、範囲は不明である。これらの遺構を検出した深度は、現地表面下0.8～0.85m程度である。遺構埋土は黒色の粘土層を主体としており、SD1からは土師質の土器細片が出土した。細片であり、時期比定は困難である。遺構の基盤層は黄褐色系シルトである。南北トレンチでは、上記の基盤層が広がる状況を確認し、基盤層上層から土師質土器の細片を検出した。ただし、遺構を検出することはできなかった。

6まとめ

調査対象地全域に遺構の分布と、ごく少数の遺物を確認することができた。対象となる事業に対しても大半で保護層が確保できることから、極一部の範囲を工事立会することになった。

(高上)



第36図 トレンチ平・断面図 (S=1/1000・1/200・1/40)



写真 30 確認調査風景（西から）



写真 31 SX1 検出状況（北西から）



写真 32 遺物検出状況

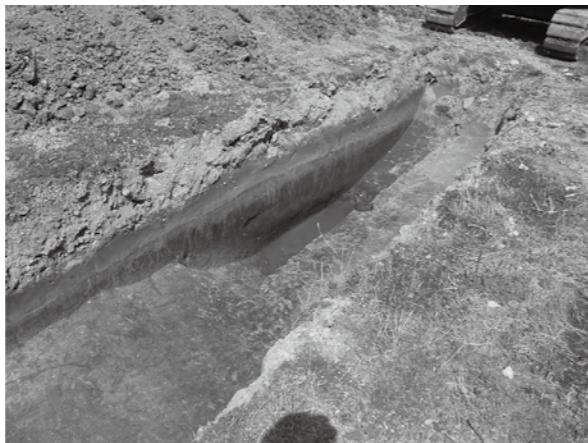


写真 33 第2トレンチ全景（西から）

かがわちょうかわひがしきみちく 17. 香川町川東上地区

- 1 所 在 地 高松市香川町川東上
- 2 調 査 期 間 平成 26 年 5 月 24 日
- 3 調 査 担 当 者 高上 拓
- 4 調 査 の 原 因 保育所改築工事
- 5 調 査 の 概 要

(1) はじめに

対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、事業主管課との事前協議に基づいて、試掘調査を実施した。

(2) 調査成果

調査にあたっては 3 本のトレンチを設定した。いずれも、花崗土・造成土下に旧耕作土・床土、さらに下層では粒径の大きな円礫層が確認できる。すべてのトレンチで遺構・遺物ともに確認することはできなかった。

6まとめ

対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地とは認められない。（高上）



第37図 調査地位置図 (S=1/5000)

じょうりあと 18. 条里跡

- 1 所 在 地 高松市香南町横井
- 2 調 査 期 間 平成 26 年 7 月 22 日
- 3 調 査 担 当 者 池見 渉
- 4 調 査 の 原 因 個人住宅地造成工事
- 5 調 査 の 概 要

(1) はじめに

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「条里跡」内に位置する。当該地における埋蔵文化財の包蔵状況が不明であったことから、開発行為との調整に係る協議データを得る目的で、事業者の依頼を受けて確認調査を実施した。

(2) 調査成果

現地表面下 0.3 ~ 0.4 m の地点において黄褐色細砂～シルトの地山面を確認した。当該地山上面で遺構精査を行った結果、18世紀後半以降の遺物を含む土坑 2 基及び柱穴 9 基を確認した。土坑の性格は不明であるが、柱穴は南北に並ぶ部分が見られることから、柵列あるいは掘立柱建物跡である可能性が高い。

6まとめ

今回の確認調査では、近世の柱穴及び土坑のみを確認し、中世以前の遺構は皆無であった。中世以前の遺構が形成されなかつた、あるいは近世以降に削平された可能性が考えられる。今回の確認調査によって、当該地における保護措置は完了したとみなすことができる。（池見）



第38図 調査地位置図 (S=1/5000)



写真 34 1tr 遺構検出状況（西から）



写真 35 1tr 土坑断面（西から）



写真 36 2tr 遺構検出状況（北から）



写真 37 2tr 柱穴断面（西から）

19. 香西南西打遺跡

1 所 在 地 高松市香西南町

2 調査期間 平成 26 年 8 月 5 日～8 月 12 日

3 調査担当者 池見 渉・杉原 賢治

4 調査の原因 分譲住宅地造成工事

5 調査の概要

(1) はじめに

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「香西南西打遺跡」に隣接しており、当遺跡で確認された遺構群が開発範囲にも延伸している可能性が考えられたため、事業者の協力のもと試掘調査を実施した。

(2) 調査成果

調査箇所は 2 か所（I 区・II 区）に分かれるが、ここでは、一括して調査成果を記述する。



第39図 調査位置図 (S=1/5000)

I 区

調査対象地北端から南へ 20～30 m 付近を境に南側で、谷状地形の埋土である黒色粘土層が黄褐色粘土の地山上面に広く平面的に堆積している状況を確認した。西方の勝賀山から本津川へとつながる低地帯であったと考えられる。当該谷状地形北岸付近において、谷状地形の埋土である黒色粘土（地山ブロックを含む）層上面から掘削された溝状遺構 1 条を確認した。西から東へ蛇行しながら伸びる状況を想定可能であることから条里制施行以前の遺構であると考えられ、周辺遺跡の状況から弥生時代に属するものである可能性がある。また、谷状地形埋没後に古代の遺物（土師質土鍋等）や地山ブロック、マンガンを含む灰色粘土層が調査対象地全域を覆う状況を確認した。隣接する香西南西打遺跡における平成 9～11 年度の発掘調査においても同様の堆積層が確認されており、プラント・オパールを多量に含むことが判明していることから、古代以降の水田層であると考えられる。なお、水田層上面は近世以降の削平を受けており、畦畔等の痕跡は皆無であった。加えて、11 トレンチにおいてのみ、上記の水田層上面から掘削されたと考えられる柱穴を数基確認している。出土遺物は皆無であるが、古代～中世以降の遺構であると考えられる。

II 区

花崗土及び現代耕作土直下で黄灰色粘土の地山層を確認した。当該地山層で遺構精査を行った結果、1 トレンチを除く各トレンチにおいて溝や不定形な土坑を確認した。埋土の特徴から、隣接する香西南西打遺跡で確認された古代の遺構と同一時期に形成された遺構であると考えられる。香西南西打遺跡の調査では、古代の粘土採掘坑が多量に検出されており、今回の試掘調査においても不定形を呈する土坑が不規則に分布する状況が見られたことから、上記遺構群は粘土採掘に関わる遺構である可能性が考えられる。

6まとめ

試掘調査の結果、調査対象地全域に遺構が残存することが判明した。よって、調査対象地全域を周知の埋蔵文化財包蔵地「香西南西打遺跡」の範囲に追加した。（池見）



写真38 I区基本層序
(下から地山・古代水田層・近世耕作土・現代耕作土)



写真39 I区検出谷状地形埋土堆積状況



写真40 I区谷状地形北岸溝状遺構検出状況



写真41 I区南東部中世以降柱穴群検出状況



写真42 II区粘土採掘土坑群検出状況(1)



写真43 II区粘土採掘土坑群検出状況(2)

20. 鵜羽神社境内遺跡

- 1 所 在 地 高松市屋島西町
- 2 調査期間 平成 26 年 8 月 19 日～9 月 8 日
- 3 調査担当者 高上 拓
- 4 調査の原因 重要遺跡確認調査
- 5 調査の概要

(1) はじめに

平成 24 年度より実施している重要遺跡確認調査である。徳島文理大学文学部との連携協定に基づき、調査を実施している。本年度本市が担当したのは 14・15 トレンチである。

(2) 調査成果

神社境内北側に向かっての製塩土器廃棄層の広がりを確認するために、2 本のトレンチを設定して調査を実施した。調査の結果、現地表面から約 0.3 m 程度の深度より製塩土器細片を含む堆積層が確認でき、順次断割り調査を行ったところ 14 トレンチでは 0.8 m、15 トレンチでは 1.0 m の深度まで遺物包含層が確認できた。遺物については整理中であるが、製塩土器は上層については備讃 VI 式の資料が比較的多量に出土する傾向があり、昨年度実施した他のトレンチの調査成果と矛盾しない。また、下層では備讃 III 式相当の製塩土器も確認しており、長期間に及ぶ土器製塩の実施がうかがえる。他のトレンチと比較して、後期の弥生土器が比較的多量に出土する傾向にあることも指摘できる。

遺物包含層下層については、トレンチ同士が近接しているものの東側がやや高くなっている。山の斜面から海岸に向かう傾斜と合致している。またその土質を比較すると、近接するものの西側では細砂成分が強いのに対し、東側では粘質土を一定程度含むなど、やや異なっている。調査対象地は臨海部であり、海浜部のから波風で運ばれる土砂と山から流入堆積する粘性を含む土砂が交雑して堆積する環境であった可能性が考えられる。

6まとめ

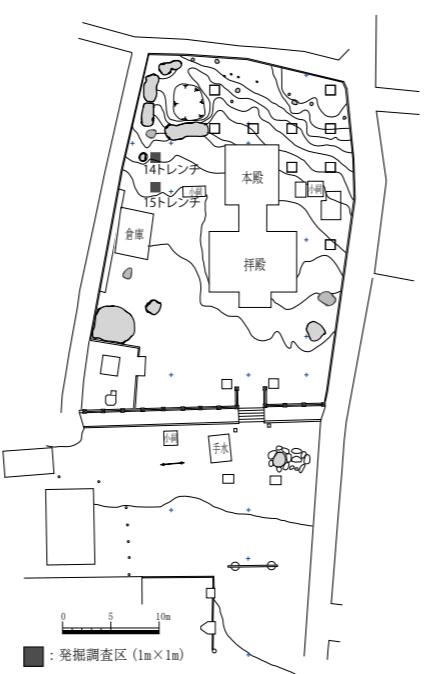
調査の結果、神社内で北側にも広く製塩土器の廃棄層が分布することが確認できた。また、紹介にとどめるが文理大が担当した調査区で弥生時代後期末に属する焼土面が確認されており、製塩に伴う火を用いる施設の一部である可能性が考えられる。当該期の土器製塩の具体的な行為の痕跡であり、貴重な事例であることから、調査を今後も継続する予定である。(高上)



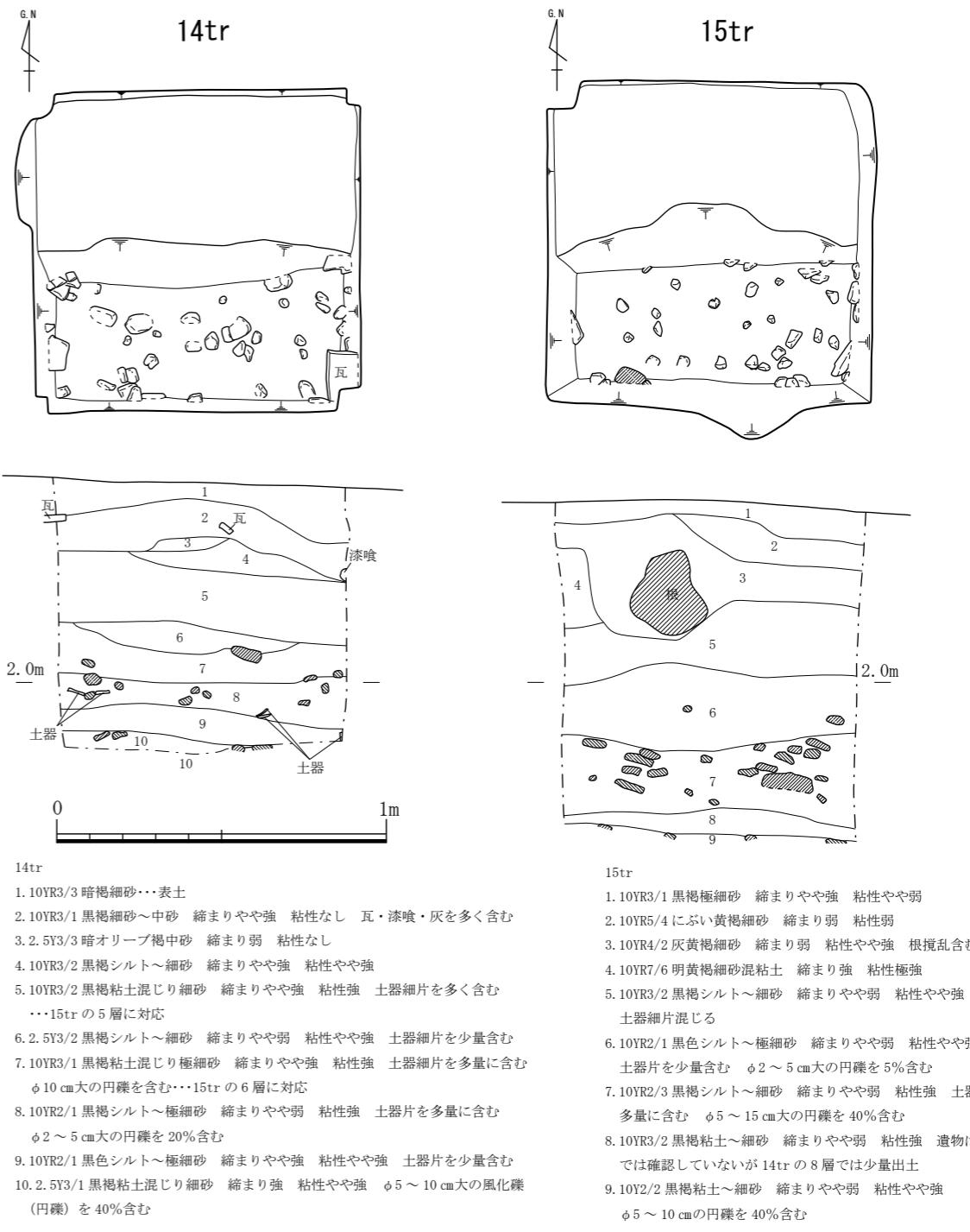
写真 44 14 トレンチ完掘壁面



第 40 図 調査地位置図 (S=1/5000)



第 41 図 トレンチ配置図



第 42 図 トレンチ平面図・断面図 (S=1/20)

参考文献

大久保徹也 2010 「瀬戸内の弥生・古墳時代土器製塩 - 生産・流通の変遷」『製塩土器の分布状況から見た塩の生産 / 流通 - 四国地域の弥生・古墳時代を例に』四国考古学研究会土器製塩研究部会

21. 東中筋遺跡

- 1 所 在 地 高松市桜町二丁目
- 2 調査期間 平成 26 年 9 月 29 日～9 月 30 日
- 3 調査担当者 船築 紀子・磯崎 福子
- 4 調査の原因 店舗新築工事
- 5 調査の概要

(1) はじめに

桜町二丁目で計画されている店舗の建設予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である東中筋遺跡の隣接地である。よって事業者の協力を得て試掘調査を実施することとなった。試掘調査は、敷地面積の約 890 m²を対象に、その範囲内に南から順に合計 5 本のトレンチを設定した。

(2) 調査成果

a 基本層序

調査地は、北東側にむかって緩やかに下がる平地に位置する。基本層序は現代耕作土とその床土(層厚 20 ~ 50 cm)の下層で、地山面と包含層(層厚 10 ~ 20 cm)を確認した。さらに下層の堆積状況を確認するため、2・3・4 トレンチで現状地盤から約 2m の深さまで断割り調査を実施したが、遺構・遺物は確認できなかった。

b 遺構の概要

遺構は主に 1 トレンチで確認でき、内訳はピット 1 基、溝 2 条、土坑 1 基である。このうち、南北溝である 2 溝は、2・4 トレンチでも確認できた。2 溝の埋土は黄灰色微細砂で、中世の遺構と考えられる。1 溝は、埋土が黒褐色小礫まじり細砂～シルトで、出土遺物から弥生時代の遺構と考えられる。

2 トレンチでは、1 トレンチと同様の地山面を確認することができたが、3 トレンチ以降では、包含層は確認できるものの、中世以前の遺構を検出することができなかった。周辺で実施した発掘調査でも同様の結果となっており、中世以前の遺構は、調査地の南西側に存在する可能性が高いと考えられる。

6まとめ

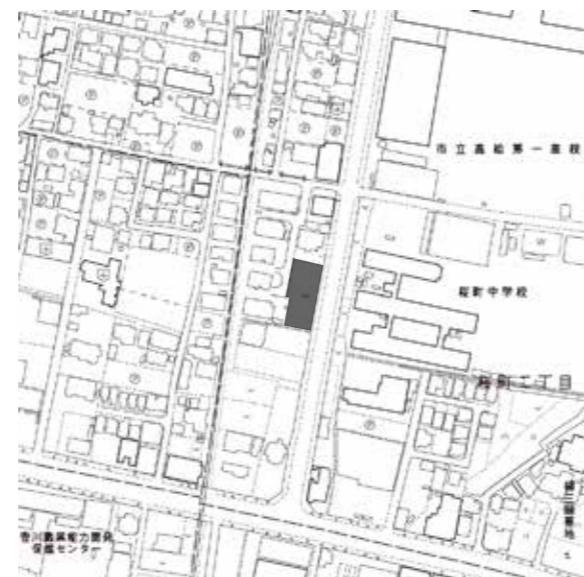
以上のように、試掘調査を行った範囲の一部で遺構・遺物が認められた。よって、対象地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地「東中筋遺跡」の範囲に追加された。(船築)



写真 45 1 トレンチ全景 (北東から)



写真 46 3 トレンチ断割り (北東から)



第 43 図 調査地位置図 (S=1/5000)

22. 大池南遺跡

- 1 所 在 地 高松市木太町
- 2 調査期間 平成 26 年 10 月 16 日～10 月 21 日
- 3 調査担当者 池見 渉
- 4 調査の原因 共同住宅建設工事
- 5 調査の概要

(1) はじめに

調査対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地外に位置するが、近接して周知の埋蔵文化財包蔵地「弘福寺領讃岐国山田郡田図調査地」や「大池遺跡」が分布するとともに、『弘福寺領讃岐国山田郡田図』に描かれた奈良時代の弘福寺領の比定地であると考えられている。よって、遺跡が展開している可能性があることから、事業者の協力のもと試掘調査を実施した。

(2) 調査成果

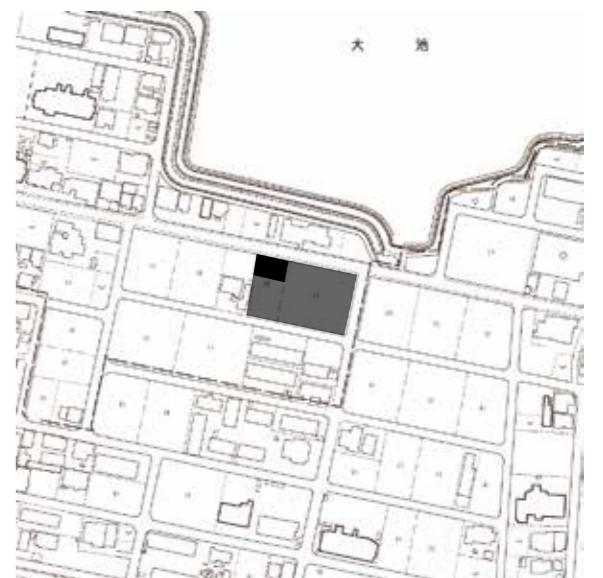
試掘調査の結果、1・3～6・12 トレンチにおいて、黒色粘土層・灰黃褐色粗砂～細砂等で埋没した谷状地形を確認した。調査地北側に位置する大池と南西方向に位置する長池は旧河道上に築造された溜池であるが、当該旧河道が調査地内を南西から北東方向に向かって横切っていると考えられる。『弘福寺領讃岐国山田郡田図』に記載された「佐布田」とされる低地帯にあたる可能性があるが、遺物が皆無であることから埋没時期は不明である。また、流路底部に人工的に設けられた井堰等の施設も皆無であった。

上記旧河道西岸部では現地表面下 1.0m 前後の深度で黄褐色粘土の地山層を確認し、微高地が展開していることが判明したが、現代の粘土採掘坑による削平が著しく、粘土採掘坑間に部分的に地山面が残存するのみであった。このうち、調査対象地北西端部に位置する 13 トレンチ周辺では平面的に地山面が残存しており、南西から北東方向へと延びる幅 1.5 ~ 2.0 m、深さ 1.0 m 以上の溝状遺構を 1 条確認した。上記旧河道に沿って開削された基幹水路の末端部付近であると考えられる。出土遺物は弥生土器又は土師器片が少量出土し、底部付近では多量の流木を検出した。溝の延伸方向及び出土遺物から弥生時代～古墳時代に形成されたものであると考えられる。

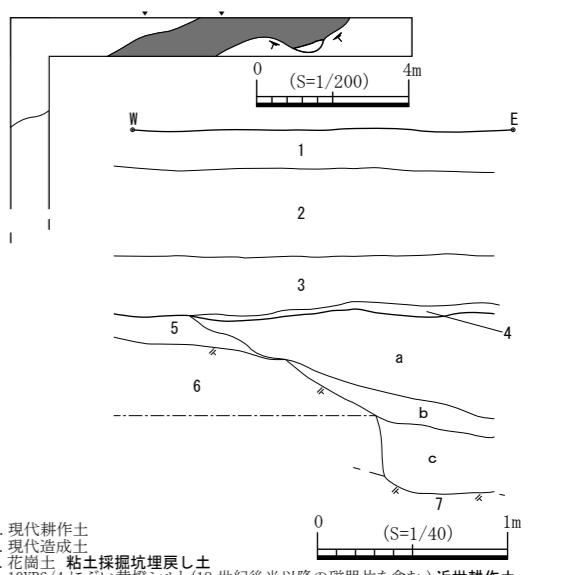
なお、当該地では平成 26 年 11 月に工事立会を実施しており、上記溝状遺構を含む計 3 条の溝がほぼ平行して開削されていることが判明した。また、溝底部より縄文時代から弥生時代前期のものと考えられる土器底部が出土していることから、縄文時代晚期～弥生時代前期に形成された遺構群である可能性も考えられる。

6まとめ

今回の試掘調査によって、古墳時代以前に形成されたと考えられる溝状遺構 1 条を確認したことから、調査対象地の一部を周知の埋蔵文化財包蔵地「大池南遺跡」として包蔵地台帳及び包蔵地図に登載した。(池見)



第 44 図 調査地位置図 (S=1/5000)



第 45 図 13 トレンチ平・断面図

1. 現代耕作土
2. 現代造成土
3. 花崗土 粘土採掘坑埋戻し土
4. 10YR6/4 黒褐色シルト(18世紀後半以降の磁器片を含む)近世耕作土
5. 10YR3/2 黒褐色シルト(地山ブロックを含む、マンガン沈着)低地性堆積
6. 10YR5/6 黄褐色粘土 地山
7. 10YR3/1 黒褐色砂質粘土 基盤層
- a. 10YR3/1 黑褐色シルト・粘土(6 層ブロックを含む) 溝埋土
- b. 10YR3/2 黑褐色シルト(6 層ブロックを含む) 溝埋土
- c. 10YR3/2 黑褐色粘土 (2.5Y4/1 黄灰細砂ブロックを含む) 溝埋土

23. 野郷遺跡

1 所 在 地 高松市多肥上町

2 調査期間 平成 26 年 11 月 4 日～11 月 7 日

3 調査担当者 池見 渉

4 調査の原因 分譲住宅地造成工事

5 調査の概要

(1) はじめに

工事対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが、事業者の依頼により埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。

(2) 調査成果

調査対象地は西側に位置する旧河道及び旧河道東岸に形成された自然堤防・後背湿地に位置する。基本的な土層序は、近世～現代の耕作土・床土直下に弥生土器や土師器・須恵器を含む黒色～黒褐色系細砂～粘土（I 層）が、さらに下位に黒褐色系細砂（II 層）、黄褐色系細砂～シルト（III 層）の順に堆積し、平野形成期の基盤層である砂礫層に至る。元来、起伏の激しい地形であったことが砂礫層の検出レベルから想定でき、砂礫層上面の凹部を埋めるように上記の堆積層が堆積している。また、III 層は調査対象地南半部（22 ～ 26tr 以南）でのみ確認しており、想定される旧河道から離れた位置にある 22 ～ 26tr では、比較的安定した黄褐色系細砂～シルトの地山面を確認している。このうち、I ～ III 層上面において遺構精査を行った結果、複数の遺構、遺物を確認した。なお、I 層までの深度は現地表面から概ね 30 ～ 50 cm、II 層までの深度は現地表面から概ね 40 ～ 50 cm である。III 層までの深度は地点により大きくばらつきがあり、旧河道から比較的離れた 22 ～ 26tr では 20 cm 前後、それより南方では 40 ～ 90 cm と、南にいくにつれ検出深度は深くなる。

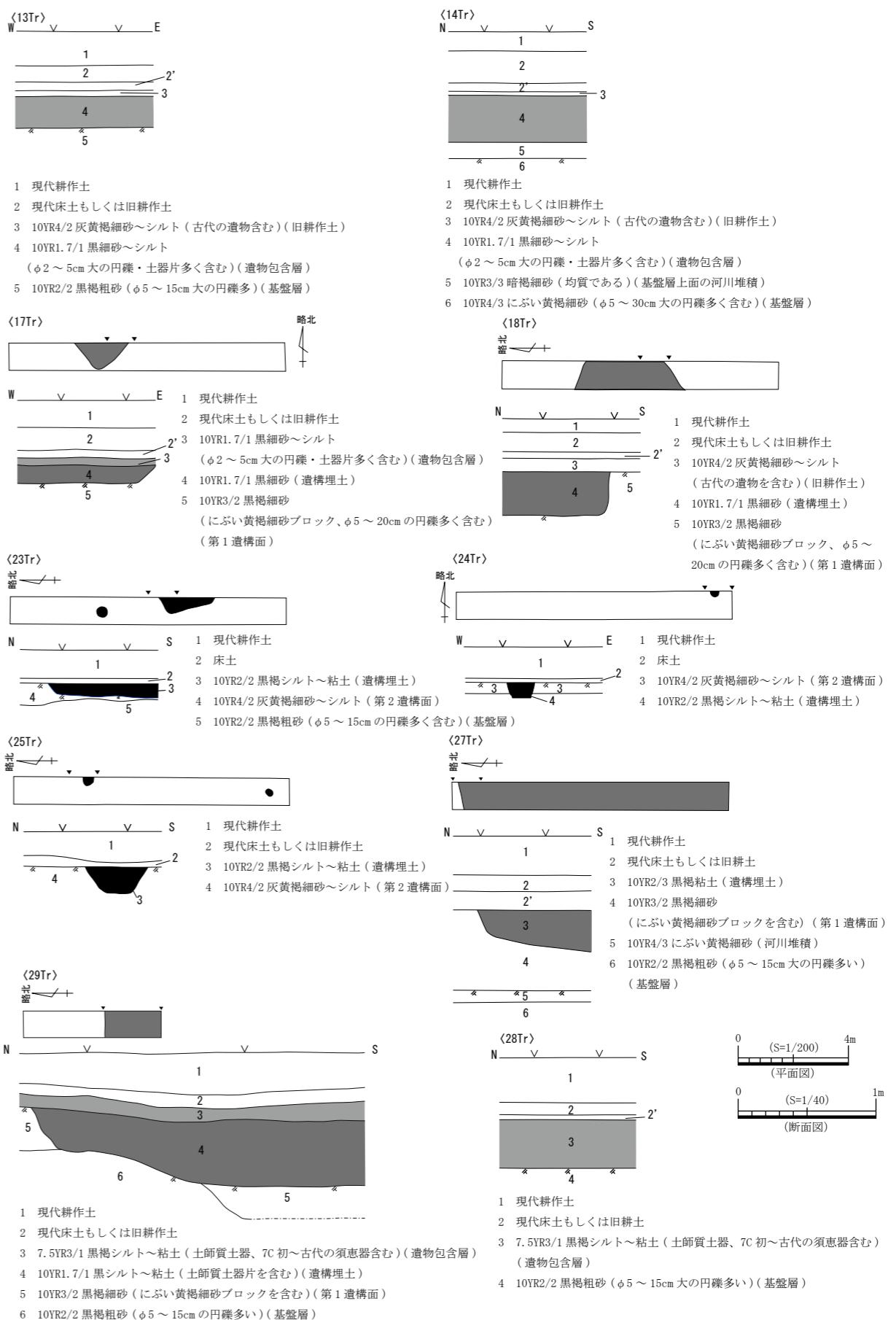
I 層上面では遺構が皆無であったが、I 層は弥生時代後期前葉～中葉及び 7 世紀前葉の遺物を多量に含む遺物包含層である。特に、7 世紀前葉の遺物は調査対象地南端部、27 ～ 35tr に集中する。

II 層上面（第 1 遺構面）で遺構を検出したトレンチは 17・18・27・29・30・32・35tr である。検出遺構は柱穴、竪穴建物等である。第 1 遺構面検出遺構の埋土は、いずれも黒～黒褐色系細砂～粘土である。弥生時代後期中葉～古代の遺構を同一遺構面で確認している。

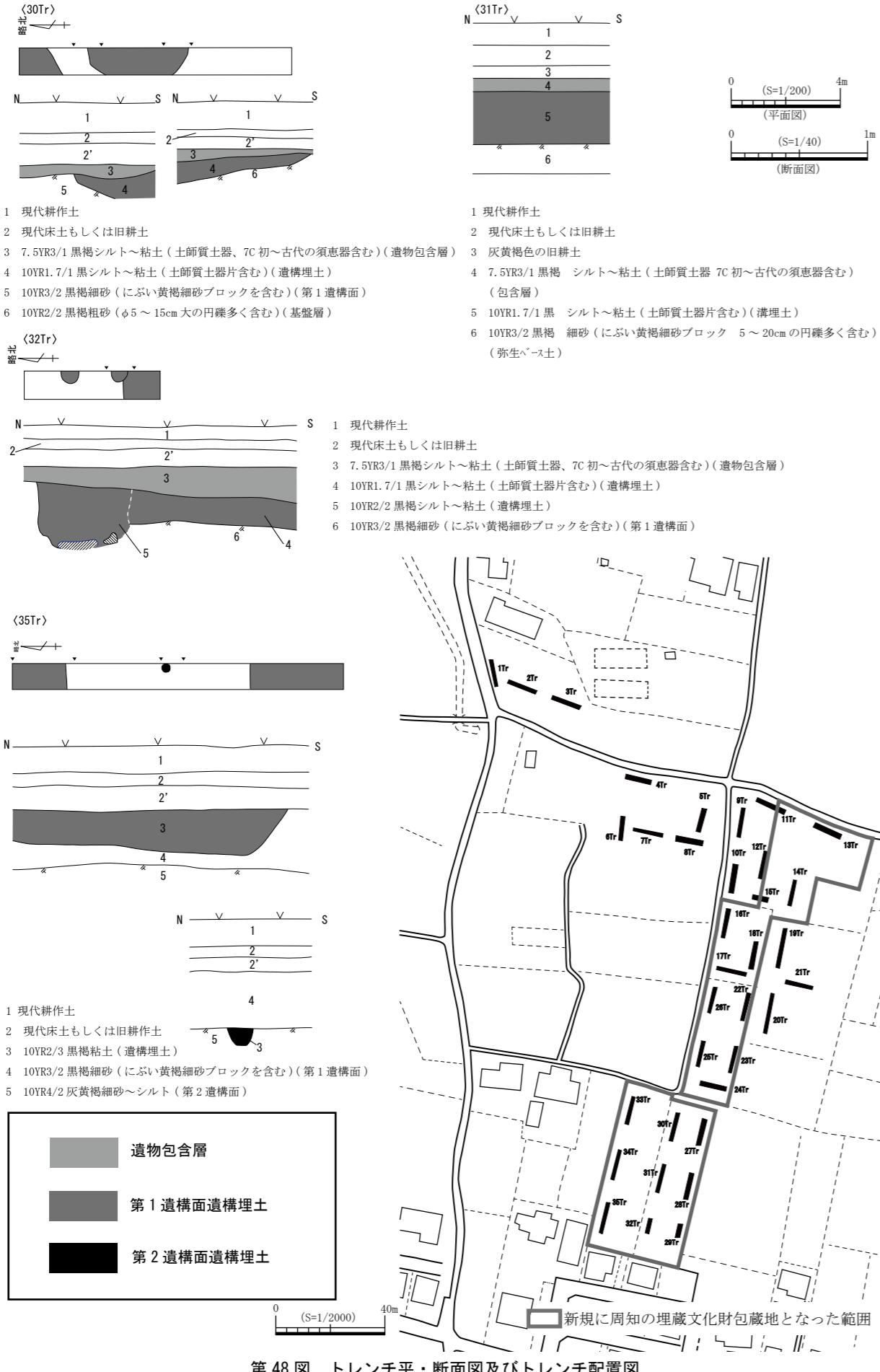
一方、III 層上面（第 2 遺構面）で遺構を検出したトレンチは、23 ～ 25・35tr である。なお、23 ～ 25tr については、I 層が削平されており残存しないことから、本来 I 层上面から掘削された遺構である可能性も考えられるが、残存する遺構の深度が比較的深いことから、当該遺構面に属する可能性が高いと考えられる。なお、前述のとおり I 层は調査対象地南半部でのみ確認しているが、北半部においても極めてしまりが弱い黄褐色系細砂層を確認しており、I 层と対応するものである可能性が考えられるものの、遺構は皆無であった。第 2 遺構面検出遺構は、掘立柱建物、柱穴、竪穴建物等である。このうち、掘立柱建物は径 60 cm 前後の掘方を持ち、底部に根石を据えた柱穴で構成される。また、竪穴建物には焼土・炭化物等を多量に含む比較的残存状況が良い資料を含む。第 2 遺構面検出遺構の埋土は、いずれも黒～黒褐色系細砂～粘土である。弥生時代後期中葉～古代の遺構面である I 层下位に位置することから、弥生時代後期中葉以前に属する遺構面であると考えられる。



第 46 図 調査地位置図 (S=1/5000)



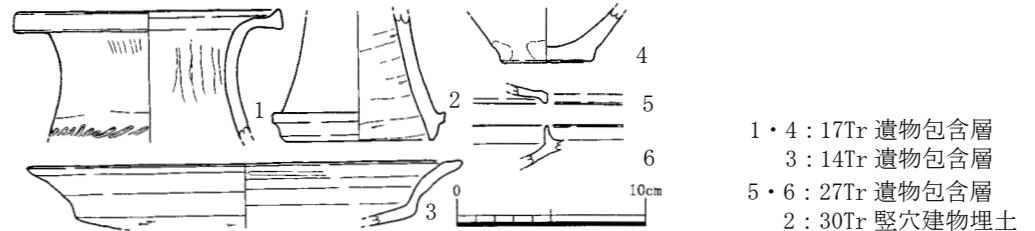
第 47 図 トレンチ平・断面図



第48図 レンチ平・断面図及びレンチ配置図

6まとめ

試掘調査の結果、弥生時代後期～7世紀初頭前後の遺構・遺物を確認した。よって、調査対象地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地「野郷遺跡」として、包蔵地台帳及び包蔵地地図に登載された。（池見）



第49図 包含層及び遺構出土遺物実測図 (S=1/4)



写真47 17レンチ第1遺構面
遺構検出状況（西から）



写真48 25レンチ第2遺構面
遺構検出状況（南から）



写真49 32レンチ第1遺構面
遺構断面（西から）



写真50 35レンチ第2遺構面
遺構検出状況（西から）

24. 井手上・中所遺跡

- 1 所 在 地 高松市多肥上町
 2 調査期間 平成26年11月10日～11月14日
 3 調査担当者 池見 渉
 4 調査の原因 分譲住宅地造成工事
 5 調査の概要

(1) はじめに

工事対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地内ではないが、事業者の依頼により埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を実施した。

(2) 調査成果

調査対象地は南から北へと緩やかに下る扇状地状の地形面に位置するとともに、東方及び西方約300～400mの地点に位置する旧河道間の微高地中央部付近にある。基本的な土層序は、近世～現代の耕作土・床土直下に土師質土器片を含む黒褐色粘土が、さらに下位に非常にしまりの強いにぶい黄褐色細砂が堆積し、平野形成期の基盤層である砂礫層に至る。このうち、黒褐色粘土（第1遺構面）及び黄褐色細砂（第2遺構面）上面において遺構精査を行った結果、複数の遺構を確認した。なお、第1遺構面までの深度は現地表面から概ね20～40cm、第2遺構面までの深度は現地表面から概ね30～50cmである。

第1遺構面上面で遺構を検出したトレンチは3・4・6・7・9・12～14・16～20trである。なお、1・2・10・24・25trでは第1遺構面を構成する黒褐色粘土が削平されていることから、第2遺構面上面で検出した遺構は本来第1遺構面に属する遺構である可能性が高い。検出遺構は溝状遺構、柱穴、竪穴建物等である。溝状遺構は条里制地割の方向性と合致するものが多く、6・7・24・25trでは比較的規模が大きく、複数回にわたる浚渫の痕跡を観察できるものを確認している。当該溝は現有水路と並走しており坪界溝である可能性が高い。なお、同様の規模・埋土を呈する溝状遺構は北方延長線上において香川県教育委員会により実施された多肥平塚遺跡の調査時にも確認されており、一連の遺構である可能性が高い。また、16trにおいても上記溝と同様の規模・埋土を有する溝状遺構を確認しており、推定される12里・13里の境界付近に位置することから坪界溝である可能性が指摘できる。第1遺構面検出遺構の埋土は、黒褐色系シルト～粘土と暗褐・灰黄褐色系細砂～シルトの2種類に大別できる。後者は前述の坪界溝等にみられる埋土であり、古代以降に属するものであると考えられる。前者は、条里地割の方向性と合致する溝状遺構や柱穴、竪穴建物等にみられる埋土であり、須恵器を含むものもみられることから古墳時代～古代に属するものであると考えられる。

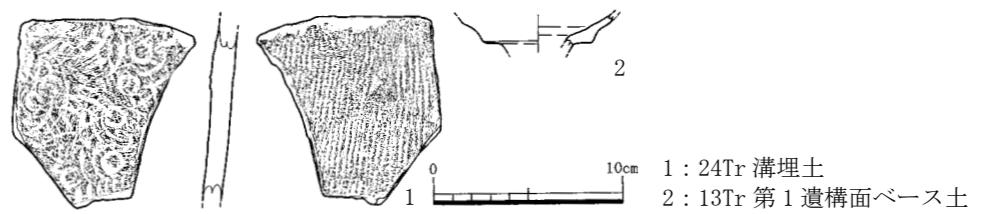
一方、第2遺構面上面で遺構を検出したトレンチは、9・11・12・14・20trであり、調査対象地南半部で見られる。ただし、北半部においても第2遺構面相当層が見られることから、遺構が残存している可能性は考えられる。検出遺構は溝及び柱穴である。埋土は黒褐色系粘土が主体であり、一部の溝状遺構において灰黄褐色系細砂がみられる。上位に位置する第1遺構面が古墳時代以降に属するものであると考えられる点、第2遺構面検出遺構埋土から須恵器片等古墳時代以降に見られる遺物が出土していない点から、弥生時代に属する遺構面である可能性が考えられる。

6まとめ

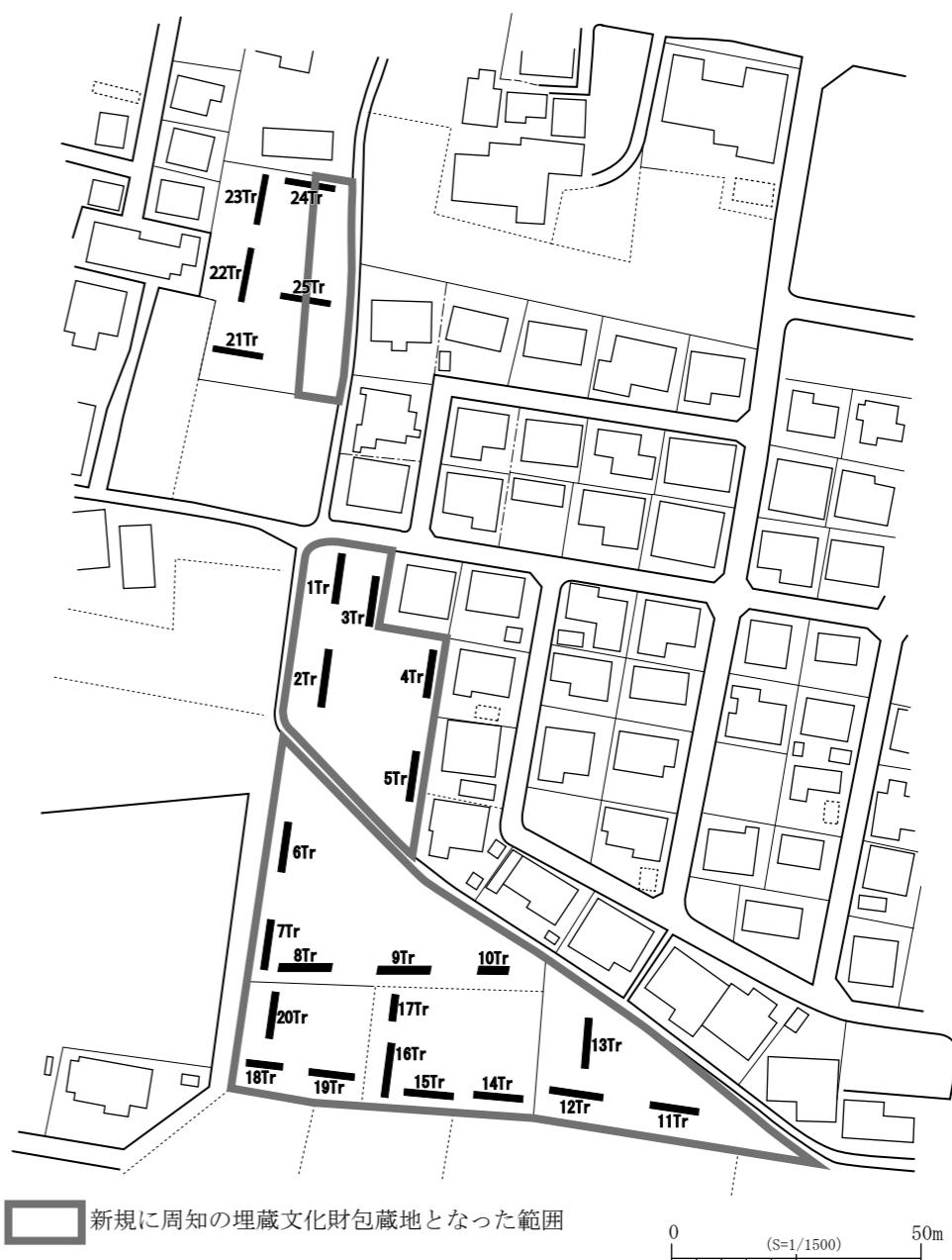
試掘調査の結果、弥生時代～古代の遺構・遺物を確認した。よって、調査対象地の一部が周知の埋蔵文化財包蔵地「井手上・中所遺跡」として包蔵地台帳及び包蔵地地図に登載された。（池見）



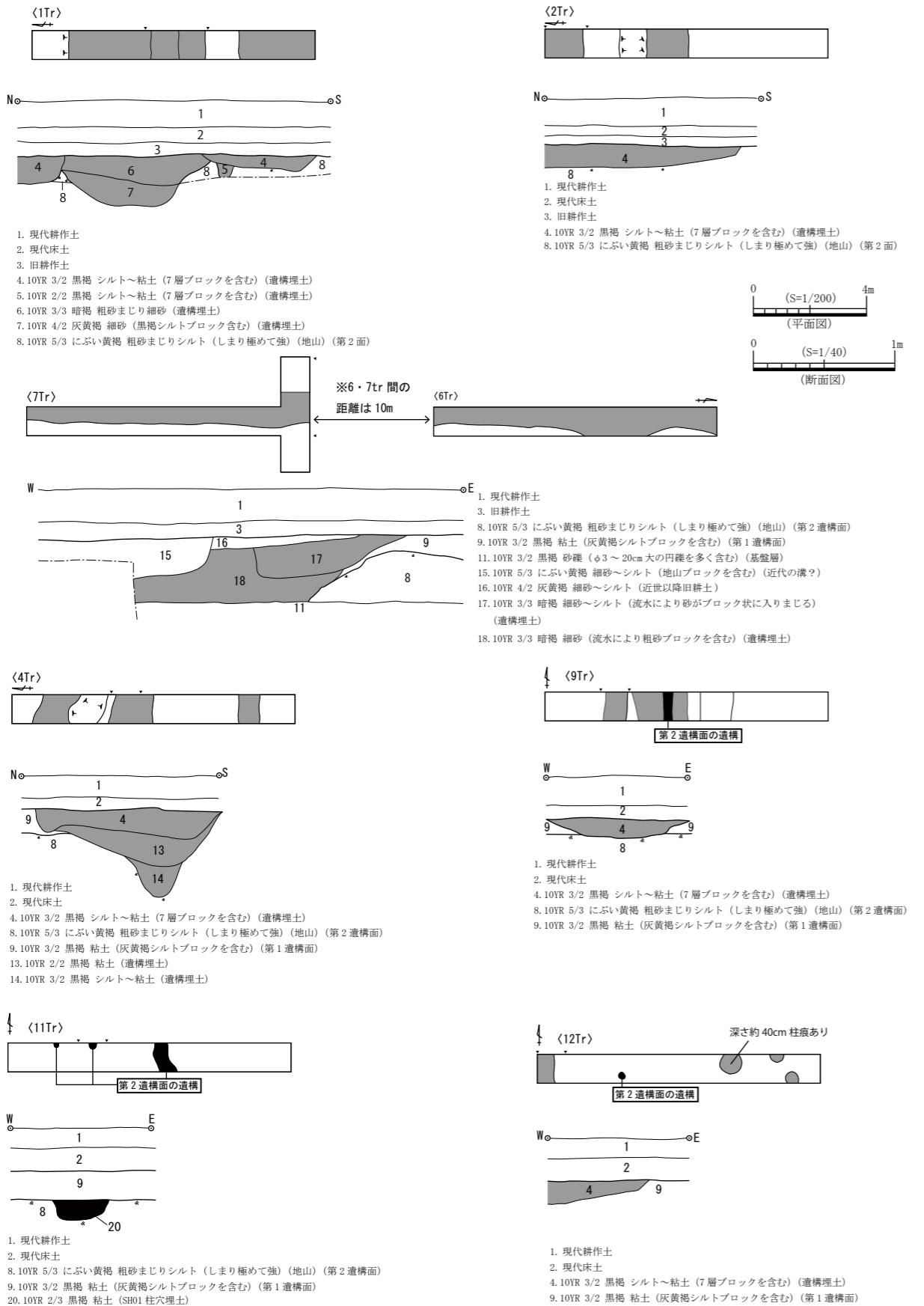
第50図 調査地位置図 (S=1/5000)



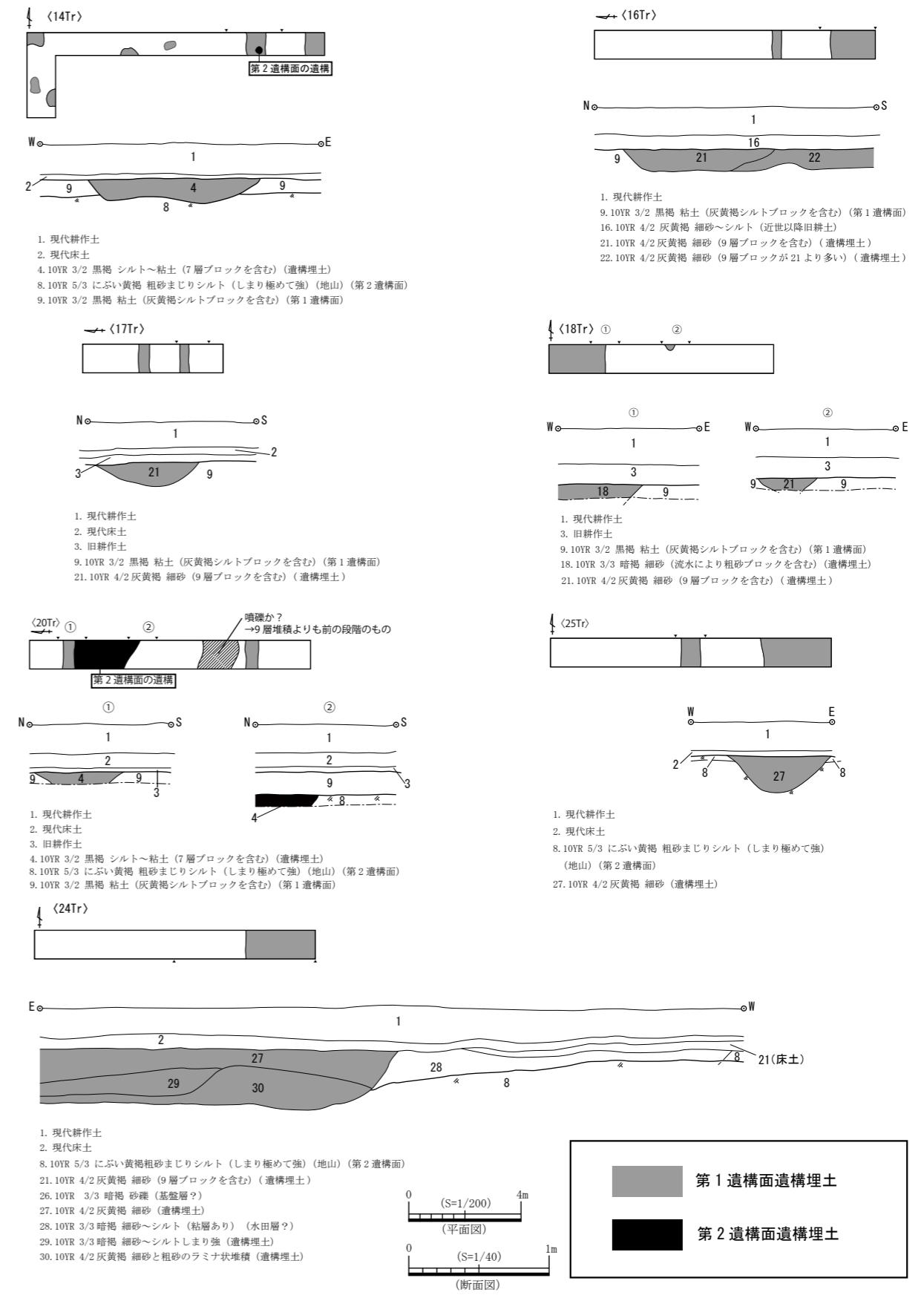
第51図 包含層及び遺構出土遺物実測図 (S=1/4)



第52図 トレンチ配置図 (S=1/1500)



第53図 トレーンチ平・断面図(1)



第54図 トレーンチ平・断面図(2)

25. 拝師廢寺

- 1 所 在 地 高松市上林町
- 2 調査期間 平成 26年 11月 26日～11月 27日
- 3 調査担当者 船築 紀子・森原 奈々
- 4 調査の原因 集合住宅建設工事
- 5 調査の概要

(1) はじめに

上林町字本村で計画されている集合住宅の建設予定地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である拜師廢寺の範囲内である。事業者の依頼を受けて確認調査を実施することとなった。確認調査は、敷地面積の約 2000 m²を対象とし、その範囲内に合計 10 本のトレンチを設定した。

(2) 調査成果

a 基本層序

遺構は、造成土や搅乱（層厚約 40～60 cm）を除去した直下で検出した。遺構面は、調査対象地の中央～北側は、にぶい黄褐色細砂～シルトで、調査対象地の南側は暗褐色粘土～シルトまじり粗粒砂～中礫である。

b 遺構の概要

1・5・7・8・9・10 トレンチにおいて複数の遺構を確認している。内訳は 1 トレンチが堅穴建物、5 トレンチが堅穴建物・土坑・ピット、7 トレンチが溝・ピット、8 トレンチが溝、9 トレンチが土坑・溝・ピット、10 トレンチが溝・土坑である。遺構が確認できたトレンチでも、複数の搅乱があり、トレンチ間で遺構の連続性を捉えることはできなかった。

3・6 トレンチでは遺構面を確認できたが、遺構は確認できず、2・4 トレンチはすべて搅乱であった。

遺物は、弥生時代後期の甕・鉢、時期不明の須恵器片、土師器片が出土している。

6まとめ

以上のように、確認調査を行った範囲全域で遺構・遺物が認められた。よって工事を行う際には保護措置が必要であると考えられる。（船築）



写真 51 5 トレンチ平面



写真 52 5 トレンチ断面

第2章 史跡石清尾山古墳群保存・整備事業(平成25・26年度)

26. 石清尾山塊レーザー測量・図化業務

- 1 所 在 地 高松市峰山町他
- 2 調査期間 地形測量 平成 25年 10月 7日～平成 26年 3月 31日
図化作業 平成 26年 4月 7日～6月 30日
- 3 調査担当者 高上 拓・波多野 篤
- 4 調査の原因 重要遺跡確認調査
- 5 事業の概要

石清尾山は、峰山・淨願寺山・稻荷山の三山の総称で、古く京都帝国大学が調査した古墳が分布する。古墳群中には古墳時代前期や後期の古墳が約 200 基所在し、前期の積石塚古墳は讃岐を中心に分布する特徴的な古墳と言える。このうち、峰山にある鶴尾神社 4 号墳や猫塚古墳など 12 基（うち積石塚古墳は 10 基）の古墳は、すでに国の史跡に指定されている。

本市では、昭和 60 年に「史跡石清尾山古墳群保存整備基本計画」、昭和 63 年に「史跡石清尾山古墳群保存調査報告書」、平成 9 年に「史跡石清尾山古墳群保存整備事業計画策定報告書」を作成し、既指定の古墳の整備について計画している。このうち、史跡の古墳に説明板を設置することや、一部の積石塚古墳で立ち入りを制限するなど、部分的な事業の進捗はあるものの、崩壊が進む積石塚古墳をどのように保護するのか等の課題は現在まで残された状態である。さらに、稻荷山に所在する積石塚古墳は、峰山の既指定の積石塚古墳と遜色のない価値を有すると考えられるものの、未だ史跡には指定されていない。

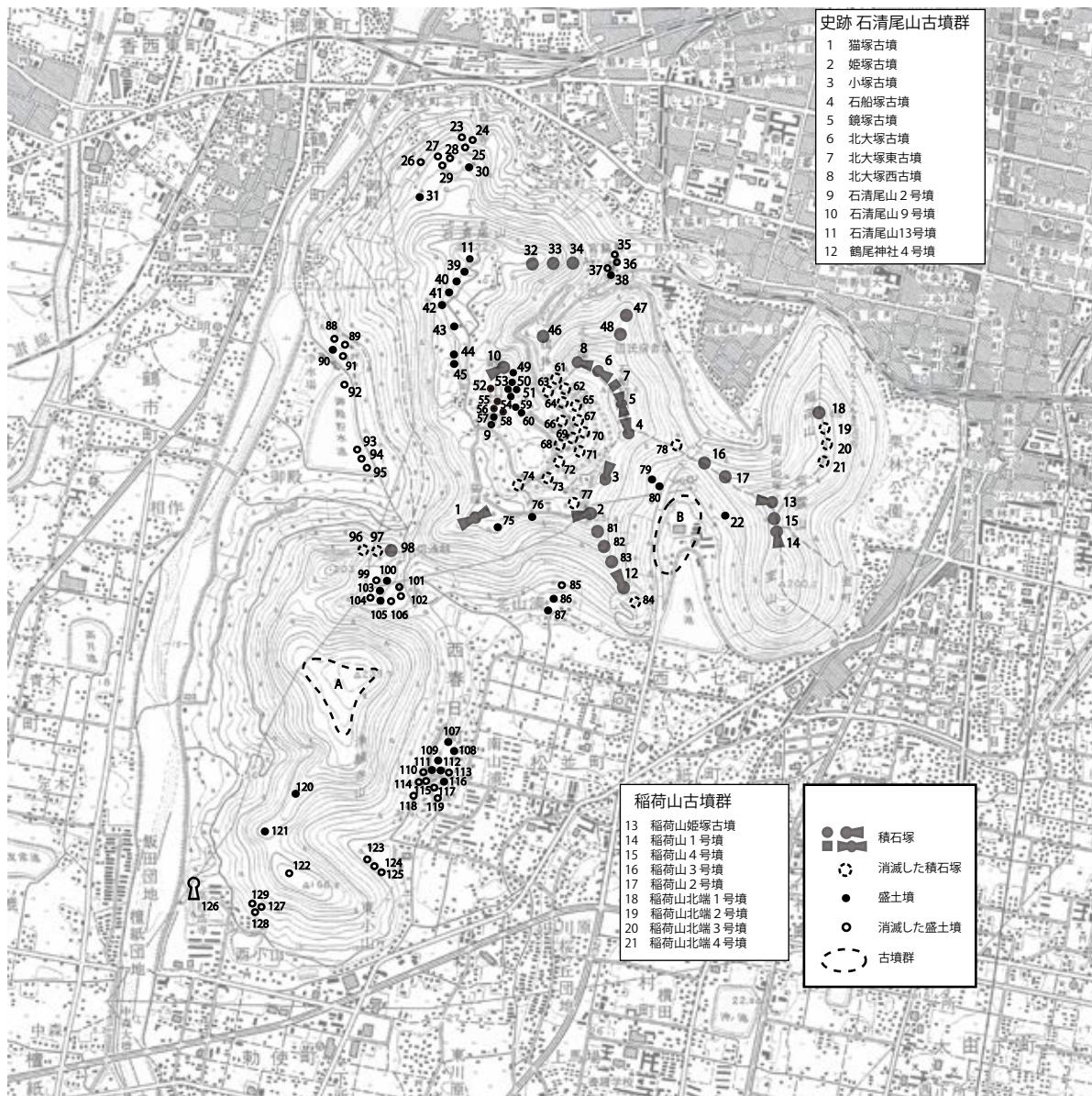
平成 23 年度より、史跡の指定が果たされていない稻荷山に所在する古墳を対象として、本市と徳島文理大学が共同で踏査を実施した。踏査の結果を受けて、史跡への追加指定の対象として、稻荷山姫塚古墳・稻荷山北端 1 号墳・稻荷山 1 号墳の 3 基を選定し、平成 24 年度以降に古墳の詳細を把握する発掘調査等を実施している。その調査成果については、個別に報告する。なお、本踏査は、積石塚古墳が想定以上に破壊の危機に瀕している現状を再認識する機会ともなった。

6 地形測量調査の成果

以上の経緯から、まず稻荷山地区の基礎的なデータを得ることを目的に、地形測量を計画した。測量の対象範囲は、今後の計画も念頭に石清尾山塊とした。測量の目的は、古墳が立地する詳細な地形の把握、古墳周辺の土地利用の状況や登山道の把握、未周知の古墳の確認等である。地形測量にあたっては、樹木の生育した山塊であることや、立体的な構造物である古墳の分布状況を正確に把握する等の観点から、ヘリコプターを利用した三次元レーザー測量を採用した。なお、現地での測量業務は平成 25 年度、測量成果の図化業務を平成 26 年度に分けて、いずれも委託業務として実施した。

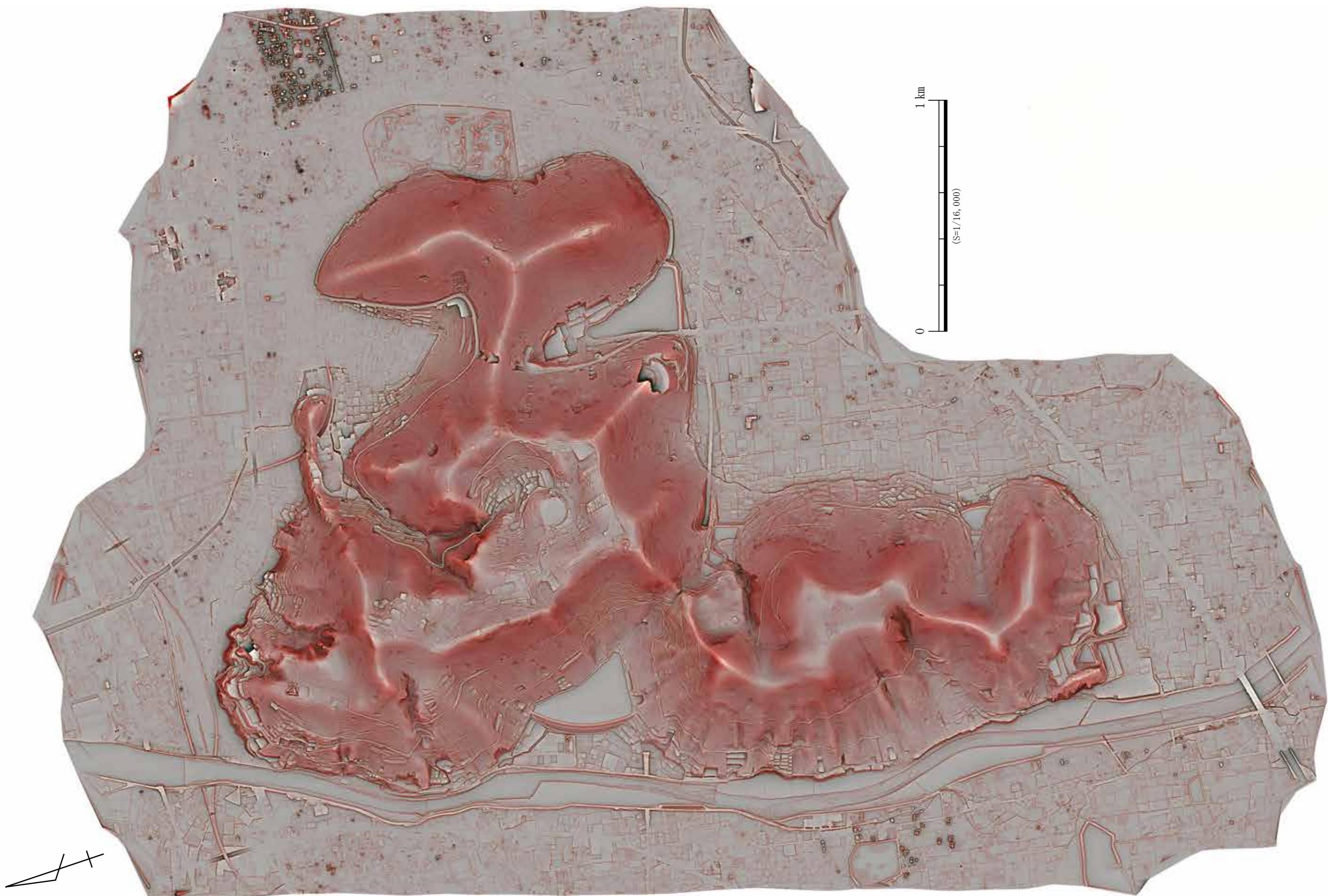
測量調査によって、これまでに新規の古墳の発見には至っていないが、登山道と古墳の位置関係をより詳細かつ正確に把握することが可能となった。合わせて、測量図と地番図の合成を行い、土地の境界に関する大まかなデータも得られた。また、既存の遺跡地図と測量図を合成し、正確な測量図に即した古墳の分布図を作成した。この成果は、今後史跡整備を計画するための重要な基礎資料と位置付けられる。加えて、ヘリレーザーによる測量成果の特質についても一部を把握した。例えば、空中写真では認識できない登山道や、高さ 40 cm 程度の高低差であっても、赤色立体地図では認識されていた。また、測量データは立体的な構造物に優位な情報を得ることができるため、例えば展示などの教育普及活動の場でも立体的なデータを提示でき、視覚的に分かりやすい情報として活用できると考えられる。以上のように、広範囲で実施した今回の測量調査は、短期間で正確な稻荷山地区の地形測量を行うことができたことと、副次的な成果として、埋蔵文化財調査や史跡整備にあたって、多方面に活用できる基礎資料を得ることができたと言える。

測量成果を基に、今後は稻荷山地区における史跡未指定の積石塚古墳の詳細な調査を行なう予定である。（波多野）

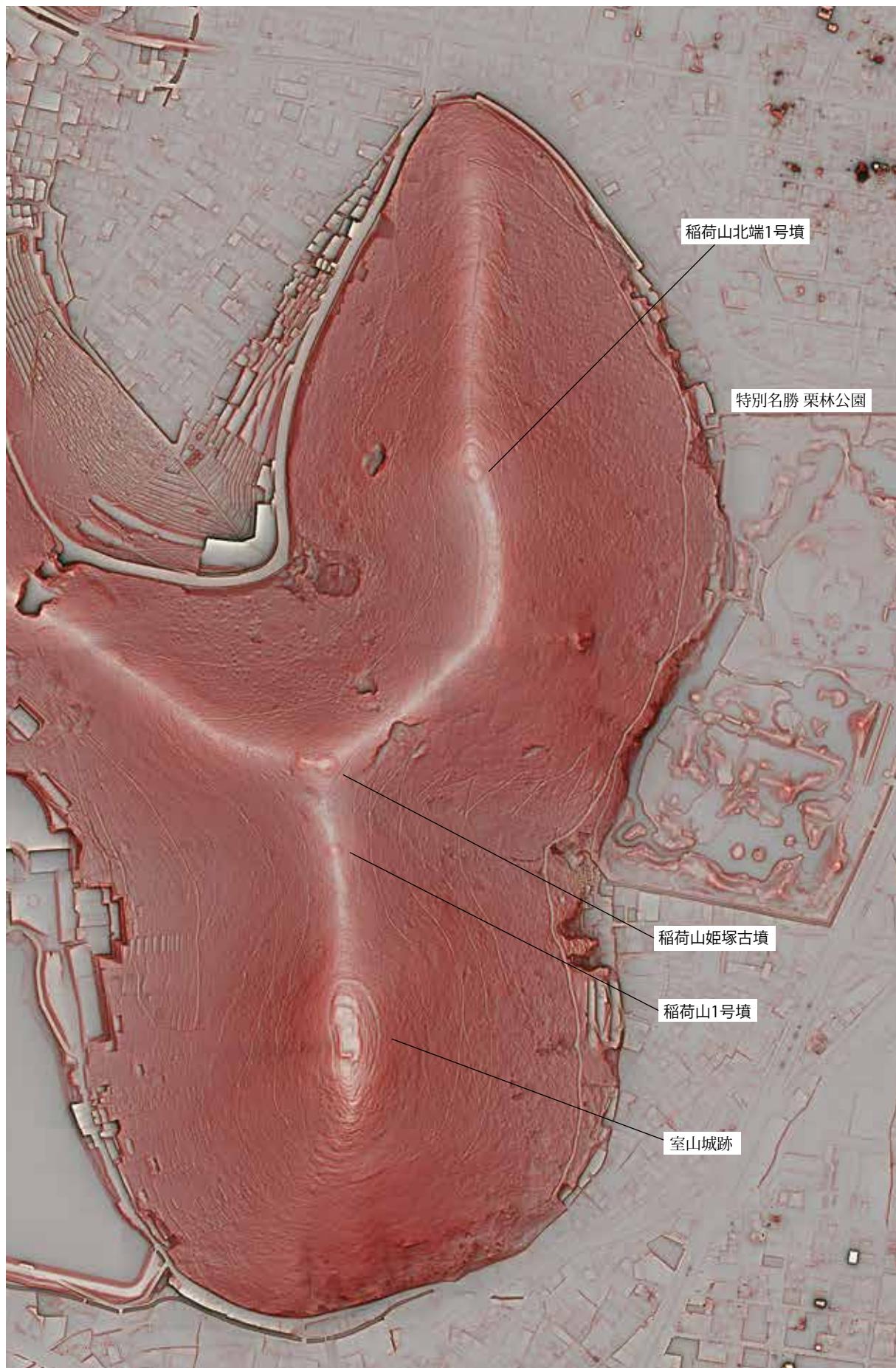


- 1 猫塚古墳 2 姫塚古墳 3 小塚古墳 4 石船塚古墳 5 鏡塚古墳 6 北大塚古墳 7 北大塚東古墳 8 北大塚西古墳
 9 石清尾山2号墳 10 石清尾山9号墳 11 石清尾山13号墳 12 鶴尾神社4号墳 13 稲荷山姫塚古墳 14 稲荷山1号墳
 15 稲荷山4号墳 16 稲荷山3号墳 17 稲荷山2号墳 18 稲荷山北端1号墳 19 稲荷山北端2号墳 20 稲荷山北端3号墳
 21 稲荷山北端4号墳 22 稲荷山5号墳 23 西方寺4号墳 24 西方寺6号墳 25 西方寺5号墳 26 木里神社2号墳 27 木里神社3号墳
 28 木里神社5号墳 29 木里神社4号墳 30 木里神社6号墳 31 木里神社1号墳 32 石清尾山14号墳 33 石清尾山15号墳
 34 石清尾山16号墳 35 峰山墓地内4号墳 36 峰山墓地内3号墳 37 峰山墓地内2号墳 38 峰山墓地内1号墳 39 石清尾山17号墳
 40 石清尾山18号墳 41 石清尾山12号墳 42 石清尾山11号墳 43 石清尾山19号墳 44 石清尾山20号墳 45 石清尾山10号墳
 46 石清尾山23号墳 47 北大塚北方2号墳 48 北大塚北方1号墳 49 揖鉢谷西斜面5号墳 50 石清尾山7号墳 51 石清尾山8号墳
 52 揖鉢谷西斜面4号墳 53 石清尾山21号墳 54 石清尾山6号墳 55 揖鉢谷西斜面3号墳 56 揖鉢谷西斜面1号墳 57 石清尾山3号墳
 58 揖鉢谷西斜面2号墳 59 石清尾山5号墳 60 石清尾山4号墳 61 揖鉢谷東斜面1号墳 62 揖鉢谷東斜面2号墳
 63 揖鉢谷東斜面3号墳 64 揖鉢谷東斜面5号墳 65 揖鉢谷東斜面4号墳 66 揖鉢谷東斜面7号墳 67 揖鉢谷東斜面6号墳
 68 揖鉢谷東斜面10号墳 69 揖鉢谷東斜面9号墳 70 揖鉢谷東斜面8号墳 71 揖鉢谷東斜面11号墳 72 揖鉢谷東斜面12号墳
 73 揖鉢谷東斜面13号墳 74 揖鉢谷東斜面15号墳 75 石清尾山22号墳 76 石清尾山1号墳 77 揖鉢谷東斜面14号墳
 78 石船塚東方古墳 79 奥ノ池4号墳 80 奥ノ池5号墳 81 鶴尾神社1号墳 82 鶴尾神社2号墳 83 鶴尾神社3号墳
 84 鶴尾神社5号墳 85 北山浦3号墳 86 北山浦1号墳 87 北山浦2号墳 88 御殿神社2号墳 89 御殿神社3号墳 90 御殿神社1号墳
 91 御殿神社4号墳 92 御殿貯水池4号墳 93 御殿貯水池1号墳 94 御殿貯水池2号墳 95 御殿貯水池3号墳 96 野山10号墳
 97 野山11号墳 98 野山3号墳 99 野山9号墳 100 野山1号墳 101 野山5号墳 102 野山16号墳 103 野山2号墳 104 野山8号墳
 105 野山4号墳 106 野山7号墳 107 南山浦12号墳 108 南山浦13号墳 109 南山浦11号墳 110 南山浦6号墳 111 南山浦9号墳
 112 南山浦10号墳 113 南山浦8号墳 114 南山浦4号墳 115 南山浦5号墳 116 南山浦7号墳 117 南山浦3号墳 118 南山浦2号墳
 119 南山浦1号墳 120 淨願寺山56号墳 121 淨願寺山57号墳 122 小山山頂古墳 123 片山池1号墳 124 片山池2号墳
 125 片山池3号墳 126 がめ塚古墳 127 がめ塚2号墳 128 がめ塚3号墳 129 がめ塚4号墳
 A 淨願寺山古墳群 B 奥の池古墳群

第56図 石清尾山古墳群 分布図



第57図 石清尾山塊 赤色立体地図 (S=1/16000)



第58図 石清尾山塊 赤色立体地図（稻荷山拡大図）(S=1/7000)

27. 稲荷山姫塚古墳

- 1 所 在 地 高松市宮脇町二丁目・室新町
 2 調査期間 平成 26 年 7 月 14 日～11 月 20 日
 3 調査担当者 高上 拓・波多野 篤
 4 調査の原因 内容確認調査
 5 調査の概要

高松市では、稲荷山に所在する 3 基の積石塚古墳（稲荷山姫塚古墳・稲荷山北端 1 号墳・稲荷山 1 号墳）を史跡に追加指定することを目的に調査を実施している。最初の調査対象に稲荷山姫塚古墳を選定し、平成 24 年度に現況の地形測量と遺存部位等の観察、平成 25 年度に後円部の発掘調査を行った。今年度は、昨年度と同様に古墳の規模・形状・構造を把握することを念頭に、前方部側に 3 箇所のトレンチを設定して発掘調査を行った。

6 調査成果

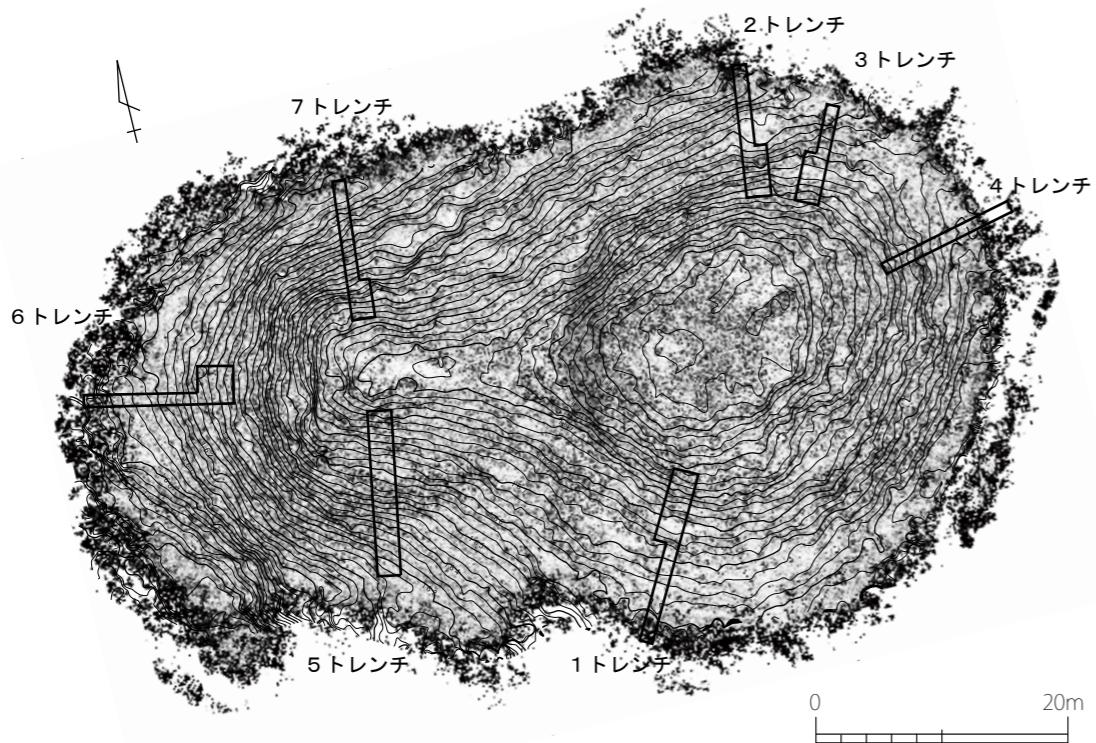
a 調査区の設定と調査方法

稲荷山姫塚古墳は、丘陵の尾根上に立地する古墳で、後円部が尾根の頂部、前方部はそれよりも低い尾根頂部の西側に配置される。従って、前方部が後円部より数 m 低い位置に造られる点が立地上の特性と言える。以上を考慮したうえで、平成 26 年度の前方部側での発掘調査は、古墳の範囲を確定することを念頭に調査区を設定した。

調査区の設定には昨年度の調査成果も参考にして、バラス礫が多数露出する傾斜変換点（5 トレンチ）、古墳の最外周の遺構を確認するため調査区を長く設定できる箇所（5・6 トレンチ）、前



第 59 図 調査地位置図 (S=1/15000)



第 60 図 調査区配置図

方部の規模を把握できる箇所（5・6・7 トレンチ）、以上を主な選定理由とした。なお、トレンチ上方の墳丘部分は崩落石の量が少なく平面での遺構検出が期待できること、トレンチ下方では崩落石が多く堆積することが予想されることから、調査区の幅をトレンチ上方で 2～3 m、トレンチ下方で 1 m に設定した。3 つの調査区の合計面積は約 58 m²である。

調査方法は、①表土除去、②石材の出土状況の観察と転落石の除去、③トレンチ下方の流土・転落石等の掘削、④トレンチ上方の流土・転落石等の除去、⑤記録作成・埋め戻し、以上の手順を基本とした。なお、後円部に設定した 1・3 トレンチについて、前方部の検出遺構と比較するため、墳端部分のみ再度遺構を露出させた。

b 前方部の調査成果の概要

まず、26 年度の調査成果について、調査の詳細を述べる前に概要を整理する。

- 1) 古墳の範囲について、各トレンチで最外周の構造物を検出したことから、前方部の範囲が確定。
- 2) 古墳の構造について、地山の岩盤上に大ぶりな塊石を一部段状に設置したうえで、上位に塊石段を 2 列、下位に「塊石段+板石積み」を 2 単位構築する。古墳の外表付近に板石積みを施工するという、後円部と類似した構造を確認（前方部南側面の状況から）。
- 3) 古墳の時期について、前方部からも後円部と共に埴輪が出土したことから、後円部の所見と同様に古墳時代前期前半の築造と考えられる。

なお、古墳の築造時期には直接関わらないが、前方部から 5 世紀末の須恵器が比較的まとまって出土した点も、副次的な成果の一つと言える。

c 前方部の調査成果の詳細

前方部南側面（5 トレンチ） 調査面積は約 26 m²である。調査前にトレンチ上方に 2 列の塊石による段（以下、塊石段）が露出していた。調査によって、さらにその下方で「塊石段+板石積み」を 2 単位分検出した。

上部の板石積みは 2～3 石分が積み上げられた状態で出土し、その背後に塊石段が 1 列存在する。また、上部の板石積みから水平方向に南へ約 1.2 m の位置で、下部の塊石段（高さ約 0.75 m）と板石積み（高さ約 0.1 m）を検出した。下部の板石積みを被覆する状態で多数の崩落した板石が出土したことから、下部の板石積みはさらに高く積み上げられていたと推定できる。下部の板石積みの基盤となるのは後述する大ぶりな塊石だが、石材間の凹凸には拳大の自然礫を充填し、高さの調節を行っている。なお、前方部墳頂の標高が約 169.0 m、下部の板石積みの基底部の標高が約 165.6 m であることから、少なくとも 3.4 m 以上石材を積み上げて墳丘を構築したことが分かる。

前述したとおり、下部の板石積みの下には、大ぶりな塊石が多数認められた。この大ぶりな塊石は、上位で同規模の石材が認められないことから、上部から転落した石材とは考えにくく、原位置ないしは近い位置で出土した石材と考え



写真 53 5 トレンチ 下部板石積み（南から）



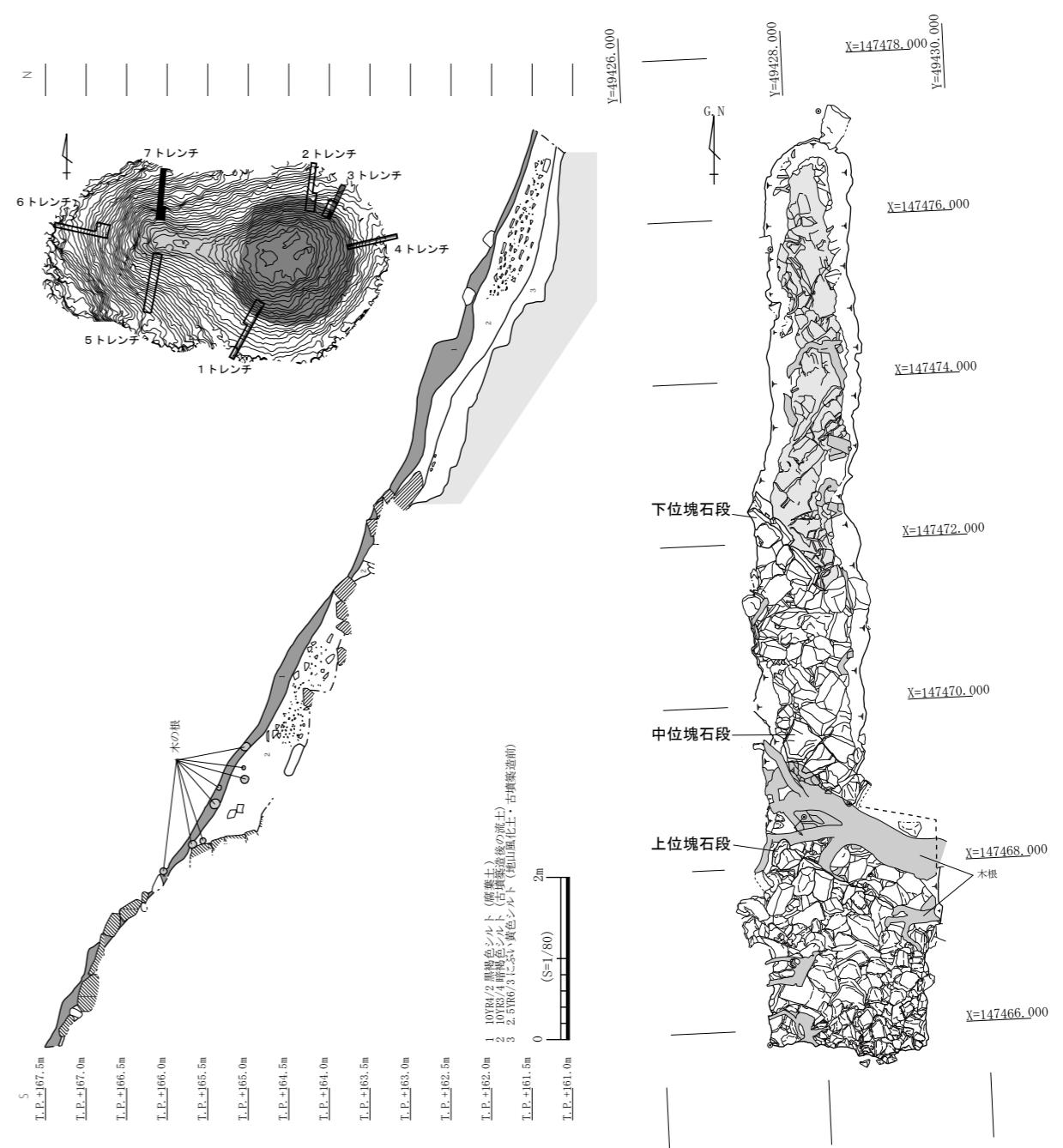
写真 54 7 トレンチ 上位塊石段（北西から）



写真 55 7 トレンチ 中位塊石段検出状況（北西から）



第 61 図 5 トレンチ 平・断面図 (S=1/80)

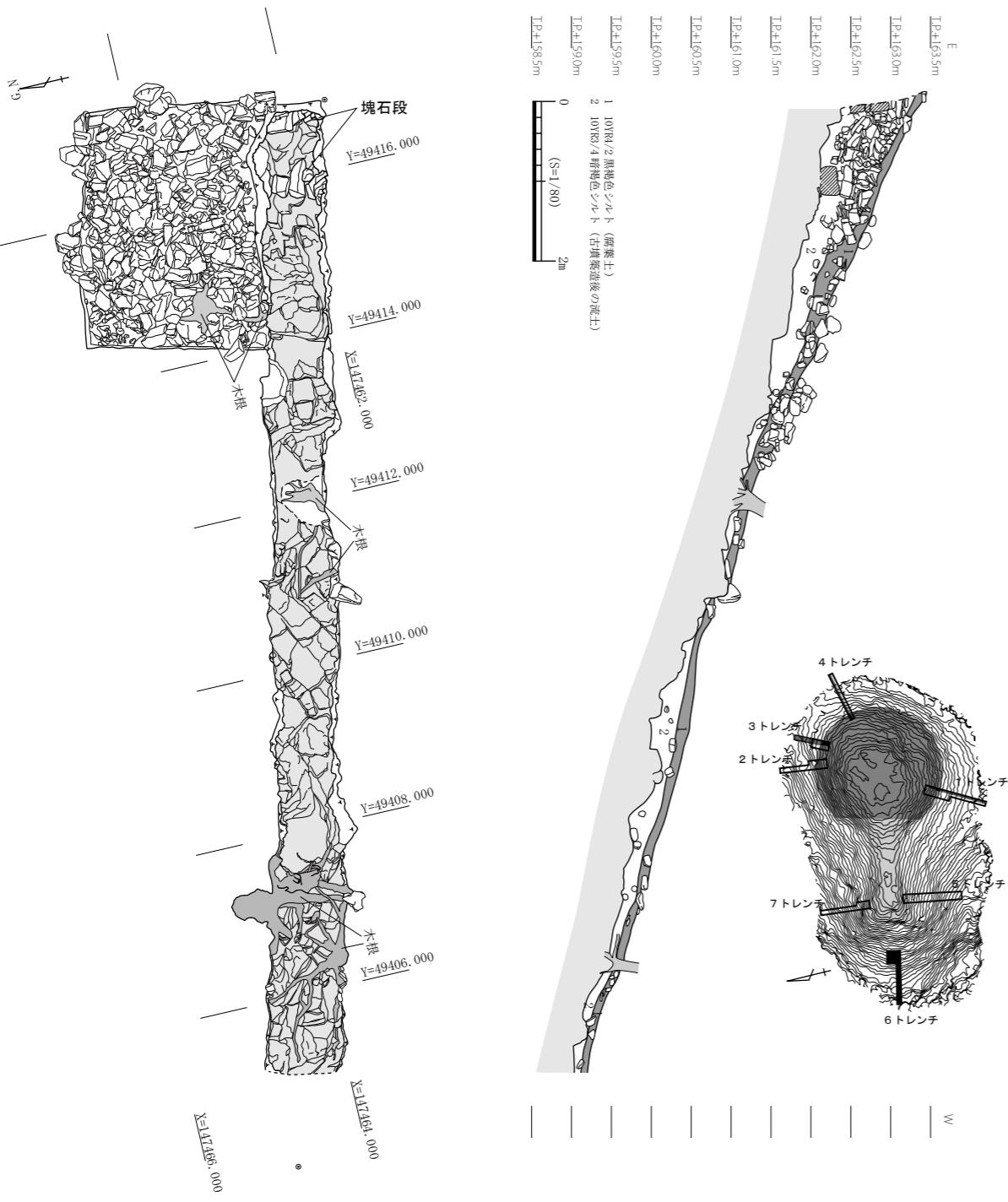


第 62 図 7 トレンチ 平・断面図 (S=1/80)

られる。大ぶりな塊石は地山の岩盤上に設置されたようで、その分布範囲は下部の板石積みから水平方向に南へ約 2.1 m、垂直方向に約 0.95 m の高さまで積み上げられる。なお、遺構を保護するため、大ぶりな塊石の断割り調査は行っておらず、大ぶりな塊石の性格については検討中である。大ぶりな塊石より下方では遺構は存在せず、地山の岩盤を検出したのみである。

遺物は、転落石間や黄色土中（第 61 図 断面図 3 層）から土師器片や埴輪片が多数出土したが、原位置をとどめる遺物は存在しなかった。また、トレンチ中ほどから下方にかけての 3 層より、5 世紀末の須恵器杯身片や須恵器甕の体部片などが出土した。

前方部北側面（7 トレンチ） 調査面積は約 14 m²である。7 トレンチでは、塊石段を合計 3 段分検出した（上から上位塊石段、中位塊石段、下位塊石段と仮称）。上位塊石段は幅 2 m の範囲で検出し、残存高は約 0.9 m である。上位塊石段は、最大で 5 石程度を石垣状に積み上げて構築しており、前面には前方部前端に向けて緩やかに傾斜する複数の塊石の平らな面を上に向けることで形成したテラス状の平面が存在する。上位塊石段の石材がテラス状の平面より下まで垂直方向



第63図 6トレンチ 平・断面図 (S=1/80)

に観察できることから、上位塊石段の構築後にテラス状の平面が形成されたと考えられる。なお、上位塊石段中央付近におけるテラス状平坦面上面の高さは約165.5mであり、5トレンチで検出した下部の塊石段の基底部の高さとほぼ同じである。この点と平面的な位置関係から、双方の塊石段は対応するものと考えられる。

上位塊石段よりも下方には、5トレンチで見られた大ぶりな塊石が多数分布する。5トレンチと同様に、大ぶりな塊石はこれよりも上方の墳丘の表層では認められないことから、上位から崩落した石材とは考えにくい。大ぶりな塊石は、上位塊石段から水平方向に北へ約3.5m、垂直方向に約1.8mの高さの範囲に分布する。この範囲内で、古墳の外側に石材の平らな面を向けて設置された塊石による段を2列（中位塊石段・下位塊石段）検出した。

中位塊石段は、三次元測量後に一部の石材を除去して検出した。中位塊石段は上位塊石段から

水平方向に北へ約1.3mの箇所に位置し、トレンチ東壁付近で3石程度が垂直方向に積まれた状態で出土した。

下位塊石段は、中位塊石段から水平方向に北へ約2.25mの箇所に位置する。段を構成する石材は、設置した地形面が下方に急角度で傾斜するためいくらか移動したものと考えられるが、風化した地山の岩盤上に長方形の石材を横手に最大3石程度積み上げた状態で出土した。下位塊石段よりも下方で古墳に関わる遺構は存在せず、地山の岩盤を検出したのみである。

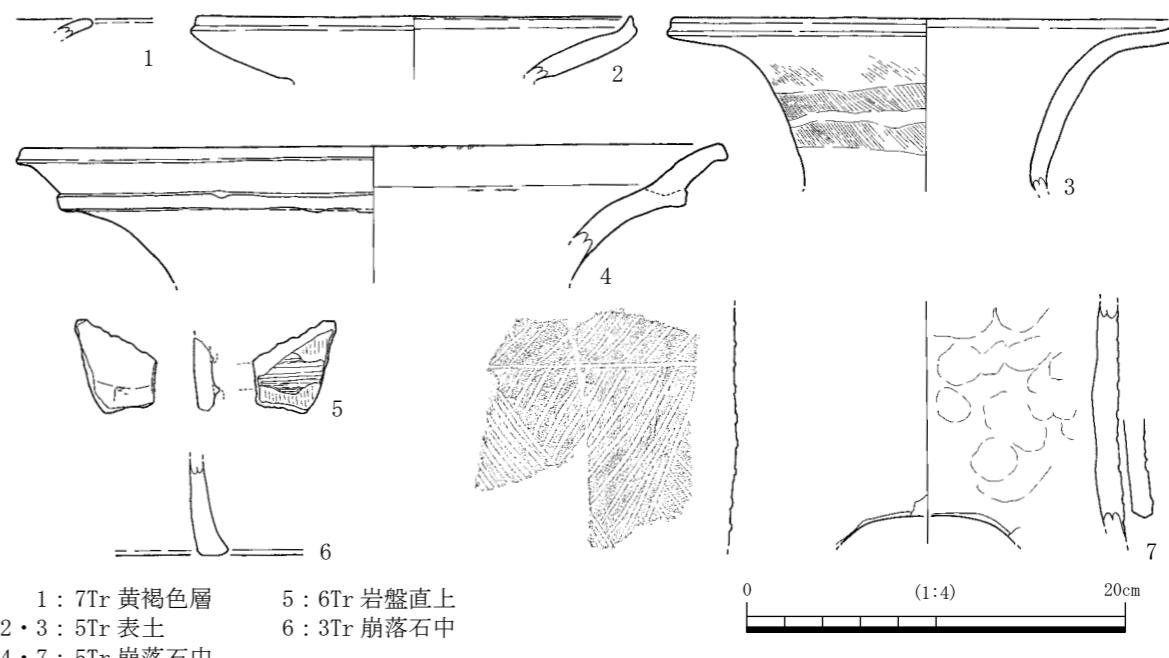
7トレンチでは板石積みは検出していないが、トレンチ内の転落石のなかに板石が存在した点と、7トレンチ東側で板石が崩落した状況で壁面に露出していることから、トレンチ内では遺存していないなかつたが、前方部北側面でも板石積みが施工されていた可能性が高いと考えられる。また、遺物は転落石間や黄色土中（第62図 断面図3層）から土師器片や埴輪片が出土した。

前方部前端（6トレンチ） 調査面積は約18m²である。6トレンチ上端の岩盤直上で、塊石段の可能性がある段を2列分検出した。このうち、下方の塊石段は、段の背部の岩盤直上から遺物が出土しており、元々段であったかは検討中である。上方の塊石段は、段を構成する石材の平らな面を古墳の外側に向けた状態で岩盤直上に設置しており、一部では垂直方向に2石分を積んだ状態であった。なお、塊石段上の崩落石を除去する過程で多数の板石が出土しており、6トレンチよりも上方で板石積みが存在した可能性が考えられる。

遺物は、他のトレンチと同様に転落石間や黄褐色土中（第63図 断面図2層）から土師器片や埴輪片が出土したが、それ以外に、塊石段直上の転落した石材間から5世紀末の須恵器杯身・杯蓋・短頸壺（一部に赤色顔料付着）等が複数個体出土した。この須恵器は、出土状況からいざれも原位置をとどめるものではないが、同一個体の破片が近い範囲で出土しており、6トレンチ上端のそれほど離れない位置から転落したものと考えられる。

d 出土遺物の概要

合計58m²と小規模な調査面積ながら、後円部と同様に前方部側からも多数の埴輪等が出土した。前方部で確認したのは、器壁の薄い土師器甕と考えられる口縁部、単口縁・二重口縁の口縁部、円筒形を呈する体部、二重突帯が巡る体部等である。また、多くの埴輪で赤色顔料の塗布が認め



第64図 出土遺物実測図 (S=1/4)



写真56 6トレンチ 崩落石中 須恵器出土状況（南から）

られた。

図化した遺物は7点で、出土位置や層位は第64図に記載した。1は土師器甕の口縁部と考えられる破片資料である。他の出土遺物と比較して器壁が薄く、口縁端部は丸く収める。2は単口縁の壺の口縁部片で、口縁端部はつまみ上げて仕上げる。口縁部外面はやや丸みを持って膨らむ形状である。3も単口縁の壺で、口縁端部はつまみ上げて仕上げる。頸部外面はタテハケを施したのちヨコナデで仕上げるが、帶状にタテハケを残す。4は二重口縁の破片である。二次口縁の端部は外側に面を持ち、内・外面ともに丁寧なヨコナデで仕上げる。5は二重突帯を持つ体部片で、いずれの突帯も失われているが、接合痕は明瞭に残り、その痕跡から突帯の間隔は1cm程度であることが分かる。6は円筒形の脚部片で、脚部端部は外側に肥厚する。7は円筒形の体部片で、一部を欠損するが円形基調の透かしを設ける。体部には直線を基調とした線刻文様を施す。

図化した遺物の詳細は上記のとおりだが、ここで平成25年度に調査した後円部の出土資料と比較する。器種、胎土、特徴は双方で共通すると考えられる。ただし、後円部で見られた大型壺の資料は前方部では見られない。また、前方部側では器壁の薄い土師器甕と見られる破片資料が多く認められる点も指摘できる。さらに、後円部では出土していない須恵器が前方部の5・6トレンチで出土した点は注目される。この須恵器は遺物の総量のわずかに過ぎず、古墳の築造時期を示す資料ではないと考えられる。須恵器の帰属時期は5世紀末頃と考えられるが、多くの須恵器に赤色顔料が塗布されている点は注目される。須恵器が出土したことから、石清尾山で造墓活動が中断する時期に、稻荷山姫塚古墳の前方部で人為的な活動があったことを示すと考えられる。

7まとめ

3ヵ年実施した稻荷山姫塚古墳全体の調査成果について、整理作業中の途中経過ではあるが、まとめておく。

- 1) 後円部の直径約28m、古墳に関わる石積みの全長約54mの積石塚前方後円墳である。
- 2) 地形的に高い尾根頂部に後円部、それよりも2m近く低い尾根頂部西側に前方部を配置する。
- 3) 墳丘構築上の特質として、後円部の施工に際して地山の岩盤の高さを整える造成を行う点や、地形的に2m程度低い前方部は後円部の段の表層には見られない大ぶりな塊石を用いるなどして古墳を構築している。
- 4) 後円部・前方部とともに、安山岩の板石を積み上げた垂直壁を施工し、古墳の外表を装飾している。
- 5) 直線的な刻みを配した特異な文様構成の埴輪片などが多数出土。単口縁・二重口縁・複合口縁の口縁部、円筒形を呈する体部・底部、二重突帯の巡る体部、土師器の甕の可能性がある口縁部片等がある。本古墳出土資料を鶴尾神社4号墳や高松市茶臼山古墳の出土遺物等と比較した結果、古墳の築造時期は古墳時代前期前半と考えられる。

以上のように、3か年の調査によって調査前に設定した古墳の規模・形状・構造に関する知見を得ることができた。他方、史跡指定に向けた今回の調査の課題とは異なるが、墳丘の認識や段数、前方部の墳端の位置など、稻荷山姫塚古墳についての細部の検討課題も明確となった。

史跡指定に関連した調査は、当初設定した課題を明らかにしたことから、本年度を持って終了する。(波多野)

28. 稲荷山北端1号墳

1 所 在 地 高松市宮脇町二丁目

2 調 査 期 間 平成26年8月19日～11月20日

3 調査担当者 高上 拓・波多野 篤

4 調査の原因 内容確認調査

5 調査の概要

高松市では、稻荷山に所在する積石塚古墳を史跡に追加指定することを目的に調査を行っており、稻荷山北端1号墳は2基目の調査対象となる古墳である。

同古墳は、昭和6～8年に京都帝国大学が測量調査等を実施しているが、その測量図では墳丘がやや歪な楕円形で表現されており、古墳の正確な形状や構造などは不明であった。

本年度は、古墳の基礎データ収集のための三次元レーザー測量及び測量図の解析を実施した。

6 調査成果

古墳とその周辺の除草作業と落ち葉等の除去を行った上で、三次元レーザー測量による地形測量を実施した。測量後、遺存する石列や地形の変換点などを現地で観察するなど、測量図の解析作業を行った。なお、同様の調査を平成24年度に稻荷山姫塚古墳で実施しており、発掘調査前に墳端に関わる地形的な特徴を把握するなどの一定の成果が得られている。以下に、それぞれの項目に分けて調査成果を記載するが、古墳の各部の名称は、墳形が双方中円墳か前方後円墳か定まっていないため、客観的な呼称という意味で「円丘部」、「方丘部」等の仮称を用いる。

さて、調査成果の詳細を述べる前に、煩雑になることを避けるため、今回の調査成果の概要を先に述べ、そのうちに形状・規模・構造に分けて調査所見を述べる。

- 1) 方丘部・円丘部で遺存する石列を検出したことと、円丘部の北側で石列は未検出ながら地形の高まりが存在することを確認した。墳形は双方中円墳か前方後円墳のいずれかである。
- 2) 南側の方丘部について、撥状に開く平面形を呈する。
- 3) 円丘部・方丘部ともに板石積みを施工する。
- 4) 円丘部の直径は約27m、南側の方丘部の長さは約18m。前方後円墳であった場合の古墳の全長は約45mである。
- 5) 古墳に伴う出土遺物はなく、古墳の帰属時期は特定できていない。

a 形状

古墳の形状は、①遺存する石列の位置、②墳丘に用いられていたと考えられる石材の分布範囲、③石材の分布が疎となり、かつ傾斜が変化する箇所、主に以上を基準として判断した。

まず、京都帝国大学の測量調査で判明していた円丘部について、現地でもおよその形状は清掃前でも把握できる状態であったが、遺存する石列等は観察できない状態だった。清掃作業によって、円丘部の北西側で板石積みを検出した。それ以外では、円丘部の南東側で原位置の可能性がある塊石列を検出した。以上の石列等の下方では遺構は検出できなかった。このほか、円丘部の西側と南東側で、石材の分布が疎となり、かつ傾斜が緩やかとなる箇所が認められた。以上から、確認した石列等の遺存部の内側が円丘部の墳丘に相当すると推定する。

一方、円丘部の南側は、清掃前は雑草等が生い茂り、わずかな地形の高まりと石材がまばらに分布する程度であった。清掃の結果、円丘部の南側でも塊石による石列が概ね3箇所（東・南・西側）で認められた。東側の石列は、一部で板石を積み上げた箇所も観察できた。東側の石列は



第65図 調査位置図 (S=1/15000)

南北方向に連続して施工されており、円丘部側では直線的、南側では東に屈曲して外側に開く配置である。南側の石列は東西方向に施工されるが、石列の南側にはさらに大ぶりな塊石が数石程度、石列に並行して分布する。西側の石列も、部分的に石列が露出する程度だが、観察できる箇所では塊石が直線的に施工される。なお、方丘部は、立体的な円丘部に対して低平な形状であることが特徴と言える。確認した石列の配置から、円丘部の南側では、南に向けて撥状に開く墳丘の平面形状が存在すると見える。

これ以外の箇所で墳丘の存在を推定できる石列は検出していないが、墳丘の可能性がある所見として、円丘部の北側で地形の高まりを確認した。この地形の高まりの主軸は、南側の方丘部の主軸から約17°東へ振るため、南側の方丘部と北側の地形の高まりは直線上には位置しない。地形の高まりに伴う石列を検出していないことから、この部分が墳丘になるかどうかは、今回の清掃・測量調査では確定できなかった。

以上のとおり、稻荷山北端1号墳の形状は、丘陵の北側に円丘部、南側に方丘部が存在することは確定したが、円丘部の北側にさらに墳丘が存在するか否かは確定できず、そのため稻荷山北

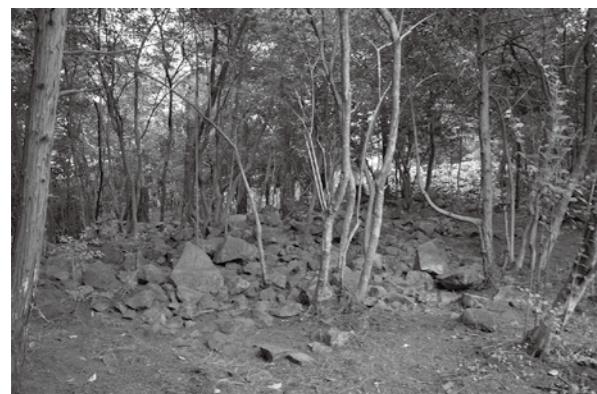


写真57 方丘部東側面（南東から）



写真60 円丘部 墳頂（南から）



写真58 方丘部東側面 石列（北西から）



写真61 円丘部北東側 墳丘（北から）



写真59 方丘部東側面 石列（南東から）



写真62 円丘部北西側 板石積み（北から）

端1号墳の墳形は、前方後圓墳か双方中圓墳のいずれかと考えられる。

b 規模

上記で述べた古墳の形状のうち、墳丘であることが明瞭な箇所の現況での規模は、円丘部の直径が約27m、地形の傾斜が変わる標高約162.5m地点から円丘部の墳頂までの高さは約2.5m。南側の方丘部の南北長が約18mであることから、南側の方丘部と円丘部の全長は約45mである。

c 構造

古墳に関する構造が露出していると見られる箇所の所見から、稻荷山北端1号墳の構造について概観する。

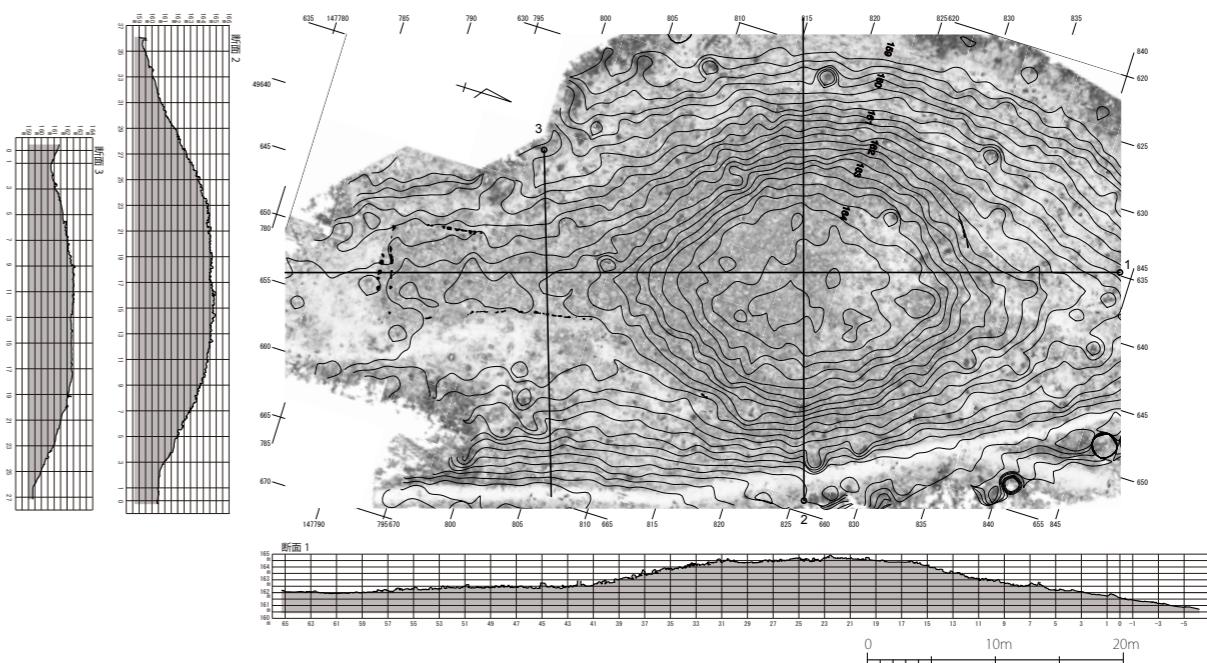
先述したとおり、円丘部北西側で板石積みを検出した。構造は、塊石の上に板石を積み上げたもので、現状で板石を2~3石積み上げる程度である。この板石積みのすぐ西側は、塊石列は存在するものの板石は存在しない。この点から、円丘部の板石積みは連続して施工されたものがすでに部分的にしか遺存しないか、元々板石積みが部分的な施工にとどまるものであったかの双方を推定できる。

一方、方丘部東側の石列の一部で、塊石の上に板石を2石積み上げた箇所を確認した。ただし、この部分でも周辺で板石積みは認められず、方丘部も板石積みを施工するものの、円丘部と同様に部分的な施工にとどまる可能性が想定される。これ以外の箇所では、塊石列を数カ所で検出したが、いずれも石材の平らな面を外側に配置するように設置する構造が確認できた。

7まとめ

今年度の調査では、墳形の確定には至らなかったが、板石積みを検出するなど多くの成果を得ることができた。再度、稻荷山北端1号墳の特徴を整理すると、①古墳が丘陵の先端に立地、②立体的な円丘部に対して低平な方丘部、③方丘部前端は大ぶりな塊石列で区画、④方丘部は撥状に開く形状、⑤板石積みを円丘部・方丘部のいずれでも施工するが、部分的な施工にとどまる可能性もある。以上の諸点は、石清尾山塊に所在する最古段階の積石塚前方後圓墳である鶴尾神社4号墳や石清尾山9号墳の特徴と類似する。この点は、稻荷山北端1号墳の築造時期を考える場合、現段階での一つの指標になるものと考えられる。

次年度は、墳形・規模の確定を目的とした最小限度の発掘調査を計画しており、史跡として保護すべき範囲を検討するデータの収集に努めたい。（波多野）



第66図 稲荷山北端1号墳 陰影平面図・断面図

第3章 史跡天然記念物屋島基礎調査事業(平成25年度)

29. 屋嶋城跡 浦生地区

1 所 在 地 高松市屋島西町
26林班ろ7小班

2 調査期間 平成25年11月18日～
平成26年3月6日

3 調査担当者 渡邊 誠

4 調査の原因 内容確認調査

5 調査の概要

(1)はじめに

昭和55年の調査時に確認されていた石積みの南側にやや窪んだ箇所があり、その周辺に城門が所在する可能性が以前より指摘されていた。そのため、今回の調査は、平成24年度に確認した城門推定地の城外石積みに対して平行する石積みがどのように展開するかを確認するためにトレントを設定し、城壁の状況及び城門等の遺構の確認を行うことを目的とした。調査はすべて人力により実施し、調査後は養生し、埋め戻した。

(2)調査成果

a 基本層序

調査区は南北方向に大きく傾斜している。後述するように第4層から18世紀後半以降の遺物が出土しており、上層については200年余りの間に堆積したものと考えられる。5層以下については、年代を決める遺物は出土していない。第4層～第6層については、土質は異なるものの、比較的類似したやや黒ずんだ色調の花崗岩起源の土が堆積している。6e層は石積みの石が堆積しており、城内側が一定程度、埋積した後に、石積みが崩落したこと示している。

第7層は、地山直上に堆積する炭化材を多量に含む砂礫混じり粘質土で、堆積土の中で最も特徴的な土である。この土は、石積みの根石下層と根石の前面に堆積しており、後述するように石積み構築時に使用した造成土と考えられる。ただし、城内側に比較的面的に認められ、その意味については今回の調査では明らかにできていない。地山はにぶい黄褐色粘質土で、安山岩を含む。

b 遺構の概要

門道を明確に示す石積み、遺構は確認できなかった。平成24年度に確認した石積みが南側城壁に向かって延びていることが明らかとなり、城壁が良好に残っていることが判明した。このことで、調査地は、これまで城門が推定されてきたが、実は城壁にあたり、その一部が流出することで、凹みができたものと考えられる。城外の現存石積みと今回明確になった石積みの距離（城壁の幅）は、上端部で約7.5mである。

城壁は斜面地に築かれているため、最北部（最上部）は1石程度で、南に下るに従って石積みの段が増えていく。確認できた範囲では約1.4mの石積みが残っている。南側に行くほど、大きく窪んでいる。石積みの根石部分は非常に小さな石で積んでおり、その下層には造成土と考えられる褐灰色砂礫混じり粘質土があり、その下層が地山である。また、この造成土は根石の前にも認められることから、当初、地山の上に堆積していた土と捉え、それを掘り込んで石積みを構築



第67図 調査位置図 (S=1/50,000)

したと考えたが、断面④から根石付近の地山を掘り込んだ形跡が認められることと、7a層が東西方向に概ね水平になっており、人為的に盛られたと考えられることから、①地山成形②造成と根石の設置③根石の前面の補強という順序で施工されたと判断した。平成21年度の調査では根石と造成土の関係は明確にできていないが、根石を据える際、地山の上に造成を行った後に石積みを行うという点は共通しており、山上の城門地区の石積みと異なる点である。しかし、この7a層（褐灰色砂礫混じり粘質土）は比較的広範囲に認められることから、根石の補強以外の意味については検討が必要である。

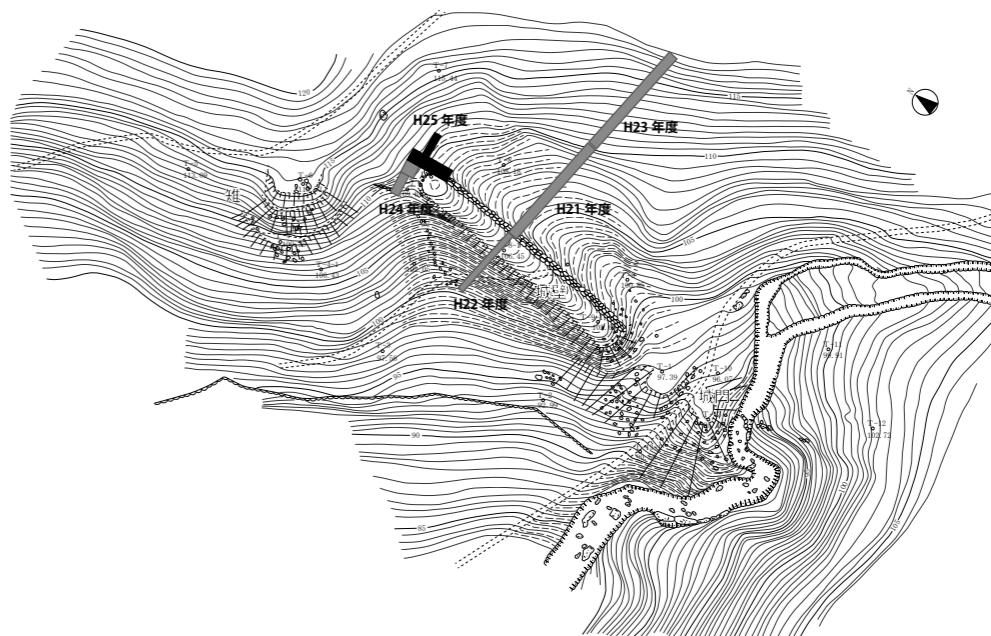
また、昨年度確認していたこの石積みに挟まれた部分、すなわち城壁の内部を構成する部材は石材で、人頭大の（20～30cm程度）安山岩が非常に粗く集積したような状況であった。基底部までの断割りは行わなかったため、この集積された石材がどの程度用いられているかは判断できないが、山上の城門地区の城壁構造などと比較を行える重要な成果を得ることができた。今回確認できた石積みの石材と城壁内部の構築材と考えられる石材には、明らかにサイズに違いが認められ、石を使い分けている状況も確認することができた。

c 出土遺物の概要

小片が数点出土したが、時期決定ができる遺物はなかった。第4層から18世紀後半以降の肥前系磁器が出土した。

6まとめ

調査目的であった城門がなかったことが確認できた。また、城壁内側は埋没しているが石積みが良好に残っていることが判明するとともに、城内側に散在している石材の多くは、城内が埋没後、石積みが崩落して現状を形成していることが明らかとなった。また、今回の調査で城壁は地形（地山）に擦り付けていることが判明し、雉城へとどのように接続するのか、雉城の北側の城壁、関野貞氏推定の城壁ラインの有無など、より上層の城壁構造について調査を行う必要性が強まった。（渡邊）



第68図 屋嶋城跡浦生地区調査箇所



写真 63 石積み検出状況（北西から）



写真 64 石積み検出状況（北から）



写真 65 石積み状況（北東から）



写真 66 石積み状況（南から）



写真 67 石積み状況（東から）



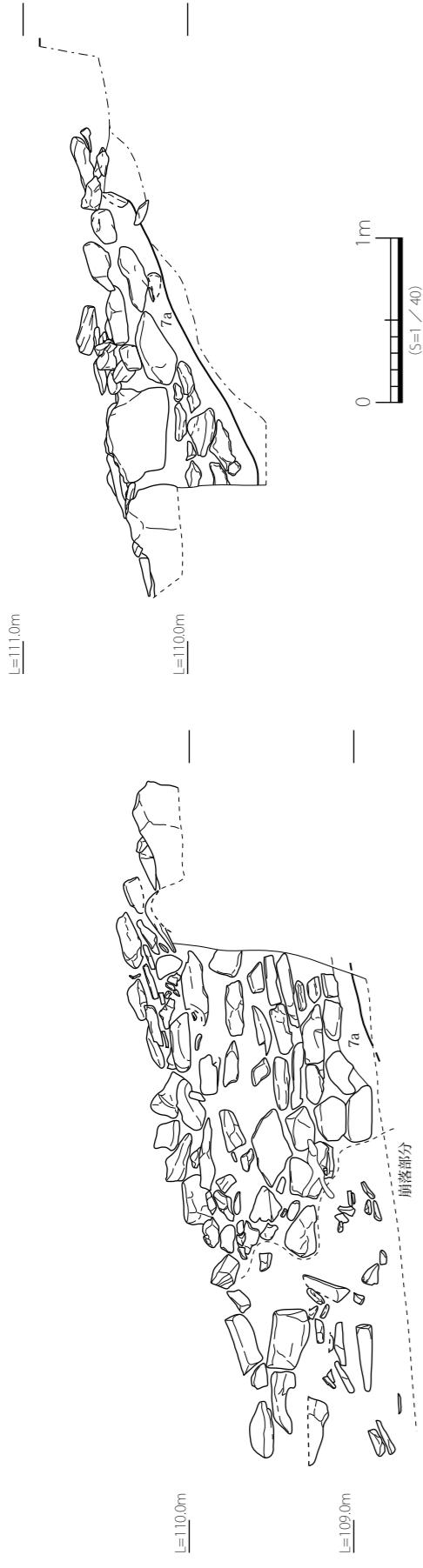
写真 68 石積み前面の堆積状況（南から）



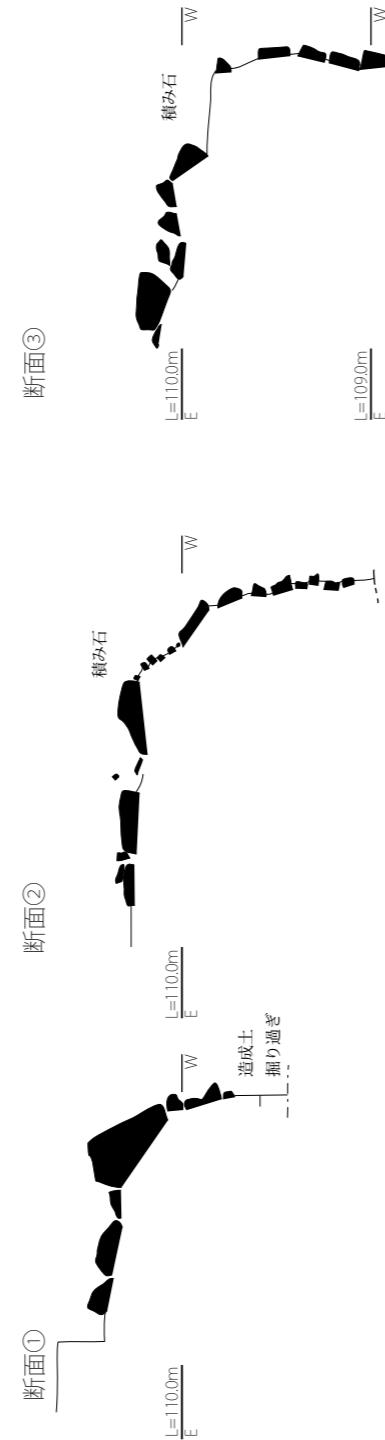
写真 69 城内側地山検出状況（東から）



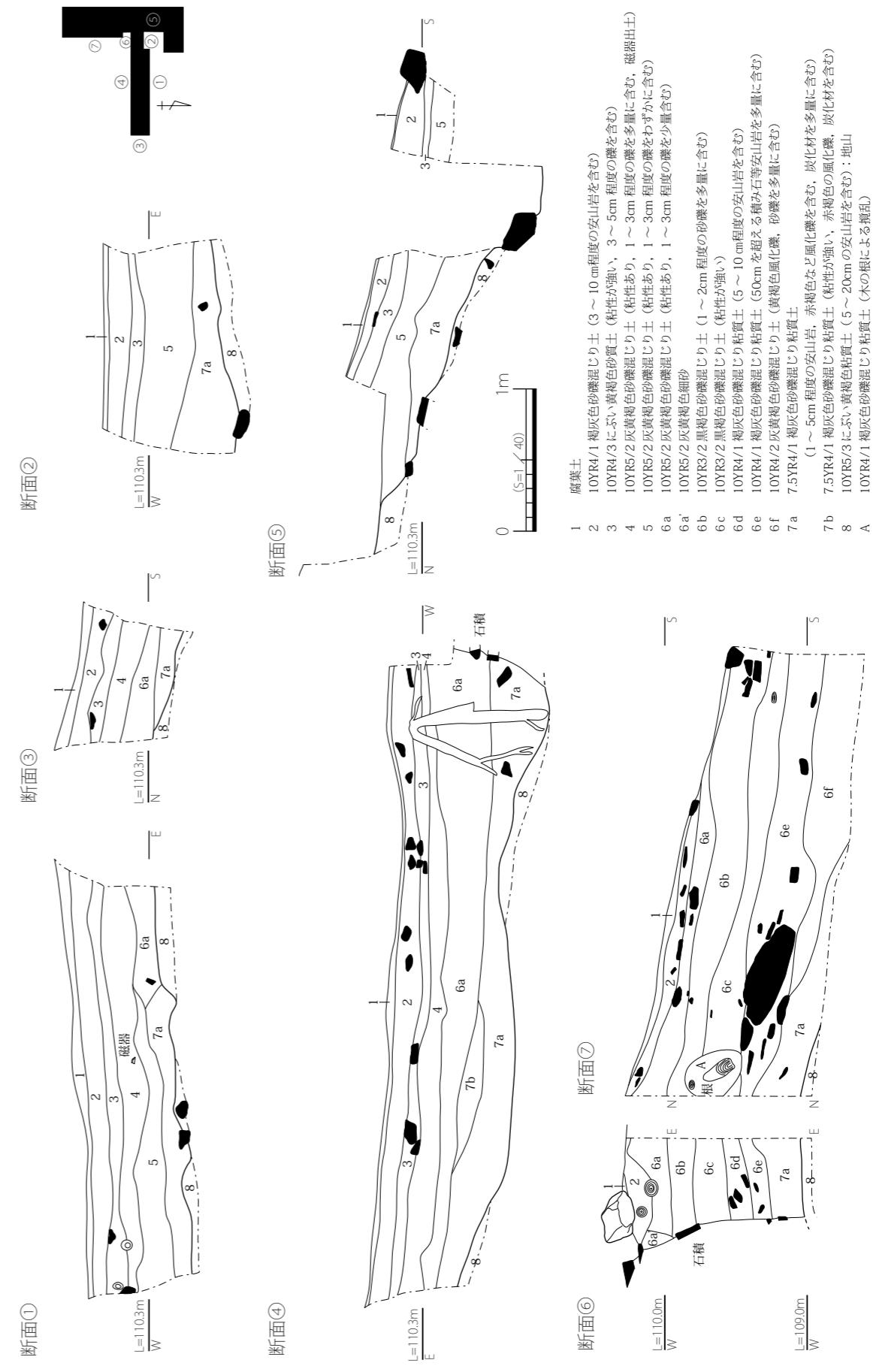
第69図 平成24・25年度調査トレンチ位置図 (S= 1 / 80)



第70図 城壁内側石積み立面図 ($S=1/40$)



第71図 城壁内側石積み断面図 ($S=1/40$)



第72図 調査区北壁及び中央壁の土層図 ($S=1/40$)

報告書抄録

ふりがな	たかまつしないいせきはっくつちょうさがいほう					
書名	高松市内遺跡発掘調査概報					
副書名	平成26年度高松市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書					
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	第159集					
編著者名	小川賢・渡邊誠・船築紀子・高上拓・波多野篤・池見渉・中西克也・磯崎福子					
編集機関	高松市教育委員会					
所在地	〒760-8571 香川県高松市番町一丁目8番15号 Tel.087(839)2660					
発行年月日	平成27年3月31日					
ふりがな						
所収調査	調査地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間
						調査面積
						調査原因
ぐふくじりょうさぬきこくでんすうちょうさち 弘福寺領讃岐国 田園調査地	多肥上町	37201		34° 17' 40"	134° 3' 40"	H25.12.2 ~ 12.3
たかまつじょうあど 高松城跡 (おおとまえちく (大手前地区))	玉藻町	37201		34° 20' 56"	134° 3' 12"	H25.12.10 ~ 12.17
いいだなし 飯田西5・6号塚	飯田町	37201		34° 19' 11"	133° 59' 42"	H26.2.5
しせきさぬきこくぶ 史跡讃岐国分 尼寺跡	国分寺町 新居	37201		34° 18' 36"	133° 57' 44"	H26.2.3 ~ 3.28
たかまつじょうあど 高松城跡 (まるのうちく (丸の内地区))	丸の内町	37201		34° 20' 52"	134° 3' 12"	H26.3.3 ~ 3.6
じないじょうあど 神内城跡	西植田町	37201		34° 13' 39"	134° 4' 26"	H26.3.14 ~ 3.31
しんみょうしやしきあと 新名氏屋敷跡	国分寺町 新名	37201		34° 17' 9"	133° 57' 21"	H26.4.6 ~ 4.11
ひらがしたいせき 平賀下遺跡	香西北町	37201		34° 20' 54"	133° 59' 44"	H26.4.15 ~ 6.12
みやのうらいせき 宮ノ浦遺跡	三谷町	37201		34° 16' 25"	134° 4' 8"	H26.4.23
きたやましたいせき 北山下遺跡	川島東町	37201		34° 16' 5"	134° 5' 34"	H26.4.24
しそきたかまつじょうあど 史跡高松城跡	玉藻町	37201		34° 21' 4"	134° 2' 59"	H26.5.7 ~ 5.9
かわらやしうちく 上林町地区	上林町	37201		34° 17' 26"	134° 3' 44"	H26.5.14
さりょういせき 佐料遺跡	鬼無町 佐料	37201		34° 20' 0"	133° 59' 42"	H26.5.15
しせきさぬきこくぶ 史跡讃岐国分 尼寺跡	国分寺町 新居	37201		34° 18' 36"	133° 57' 45"	H26.5.19 ~ 6.20
きたぐれいせき 北口遺跡	香川町 大野	37201		34° 16' 3"	134° 1' 37"	H26.5.19 ~ 5.20
かみてんじんいせき 上天神遺跡	上天神町	37201		34° 18' 41"	134° 2' 23"	H26.5.21
かがわらようかわひがしみちく 香川町川東上地区	香川町 川東上	37201		34° 14' 16"	134° 2' 6"	H26.5.24
じょうりあと 条里跡	香南町 横井	37201		34° 14' 50"	134° 0' 29"	H26.7.22
こうざいみのみにしうちいせき 香西南西打遺跡	香西南町	37201		34° 20' 14"	133° 59' 58"	H26.8.5 ~ 8.12
うのはじんじやけいだいせき 鵜羽神社境内遺跡	屋島西町	37201		34° 21' 57"	134° 5' 35"	H26.8.19 ~ 9.8
ひがしなかすじいせき 東中筋遺跡	桜町 二丁目	37201		34° 19' 32"	134° 3' 4"	H26.9.29 ~ 9.30
おおいけみのみいせき 大池南遺跡	木太町	37201		34° 18' 32"	134° 4' 5"	H26.10.16 ~ 10.21
のごういせき 野郷遺跡	多肥上町	37201		34° 17' 21"	134° 3' 17"	H26.11.4 ~ 11.7
いでうえちゅうしょいせき 井手上・中所遺跡	多肥上町	37201		34° 17' 24"	134° 2' 54"	H26.11.10 ~ 11.14
はやしはいじ 拝師廃寺	上林町	37201		34° 17' 24"	134° 3' 52"	H26.11.26 ~ 11.27

いなりやまひめづかふん 稻荷山姫塚古墳	宮脇町 二丁目 室新町	37201		34° 19' 42"	134° 2' 15"	H26.7.14 ~ 11.20	58m³	内容確認調査
いなりやまほくたん ごうふん 稻荷山北端1号墳	宮脇町 二丁目	37201		34° 19' 54"	134° 2' 22"	H26.8.19 ~ 11.20	1452m³	内容確認調査
やしまのきあと うろちく 屋嶋城跡 浦生地区	屋島西町	37201		34° 21' 49"	134° 6' 7"	H25.11.18 ~ H26.3.6	18m³	内容確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
ぐふくじりょうさぬきこくでんすうちょうさち 弘福寺領讃岐国田園調査地	—	—	—	弥生土器
たかまつじょうあと おおとまえちく 高松城跡(大手前地区)	城館	近世～近代	壠基礎、礎石建物	陶磁器、瓦
いいだなし ごうづか 飯田西5・6号塚	塚	中世	—	土師器、陶磁器
しそきさぬきこくぶんにじあと 史跡讃岐国分尼寺跡	寺院	古代～中世	礎石建物	瓦、土師器、須恵器
たかまつじょうあと まるのううちく 高松城跡(丸の内地区)	城館	近世～近代	石組み遺構、土坑、柱穴	陶磁器、瓦
じんないじょうあと 神内城跡	城館	中世	—	—
しんみょうしやしきあと 新名氏屋敷跡	城館	中世	溝、柱穴	土師質土器、須恵器、瓦質土器
ひらがしたいせき 平賀下遺跡	集落	中世～近世	掘立柱建物、柱穴、土坑、溝	土師質土器、陶磁器
みやのうらいせき 宮ノ浦遺跡	—	—	—	—
きたやましたいせき 北山下遺跡	集落	中世	不明遺構、溝？	土師器、須恵器
しそきたかまつじょうあと 史跡高松城跡	城館	近世～近代	石列	—
かみはいじょうあと 上林町地区	—	—	—	—
さりょういせき 佐料遺跡	集落	弥生時代・ 古代～中世	掘立柱建物、柱穴	弥生土器、土師器
しせきさぬきこくぶんにじあと 史跡讃岐国分尼寺跡	寺院	古代～中世	礎石建物	瓦、土師器、須恵器
きたぐれいせき 北口遺跡	集落	弥生時代・ 中世	溝、柱穴	打製石器、弥生土器、 須恵器、土師器、 土師質土器
かみてんじんいせき 上天神遺跡	集落	弥生時代	溝、不明遺構	土師質土器
かがわらようかわひがしみちく 香川町川東上地区	—	—	—	—
じょうりあと 条里跡	条里	古代～中世	柱穴、土坑	土師質土器、陶器、 磁器、瓦
こうざいみのみにしうちいせき 香西南西打遺跡	集落	弥生時代～ 中世	溝、土坑、柱穴、水田	土師質土器、須恵器、 磁器
うのはじんじやけいだいせき 鵜羽神社境内遺跡	生産遺跡	弥生時代～ 飛鳥時代	焼土遺構	製塩土器
ひがしなかすじいせき 東中筋遺跡	集落	弥生時代～ 中世時代	柱穴、溝、土坑	弥生土器、須恵器
おおいけみのみいせき 大池南遺跡	集落	弥生～古墳 時代	溝	弥生土器、土師器
のごういせき 野郷遺跡	集落	弥生時代～ 古代	遺物包含層、竪穴建物、 掘立柱建物、柱穴	弥生土器、土師器、 須恵器
いでうえちゅうしょいせき 井手上・中所遺跡	集落	弥生時代～ 中世	溝、竪穴建物、土坑、柱穴	土師器、須恵器
はやしはいじ 拝師廃寺	集落	弥生時代～ 中世	竪穴建物、土坑、溝、柱穴	弥生土器、須恵器、 土師器
いなりやまひめづかふん 稻荷山姫塚古墳	古墳	古墳時代	古墳	埴輪、土師器
いなりやまほくたん ごうふん 稻荷山北端1号墳	古墳	古墳時代	古墳	—
やしまのきあと うろちく 屋嶋城跡 浦生地区	城館	古代	城壁	土師器

高松市埋蔵文化財調査報告第 159 集

高松市内遺跡発掘調査概報

－平成 26 年度国庫補助事業－

平成 27 年 3 月 31 日 発行

編 集 / 発 行 高松市教育委員会

高松市番町一丁目 8 番 15 号

印 刷

有限会社 中央ファイリング